高知市文化財調査報告書第18集

介　良　遺　跡　Ⅱ

介良川都市小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2集

1998.6

高知市教育委員会

介良遺跡Ⅱ報告書正誤表

本文

ページ	行	項　目	誤	正
5		第3図	客Ⅰ	客土
		第3図	SD301 埋Ⅰ	SD301 埋土
7	8～9		(80～85・87・90・91・93)	(80～85・87・88・90・91・93)
19		スケール	5 cm	10 cm
21	30		163	162
22	5		168	169
22	5		179	トル
	9		ナデ	ハケ
23		第19図	SD102	SD103
25	2		貼付口縁をもち	175 は貼付口縁をもち
26	4		Ⅵ層	Ⅴ層
28		第25図	154	トル
29	7		口縁部のない外面に	口縁部の内外面に
	11		口縁端部付近にハケを	口縁端部付近にナデを
29	17		天井部付近に絞り目が残る	トル
	23		1	268
	24		2	266
	25		3	269
	27		4	270
32	10		234	233
	11		234	233
33	1		SD202	SD102
	3		SD102 が SD202 に	SD103 が SD102 に
	5		112	152
33	5		扁平片場石斧	扁平片刃石斧
34	1		多く含むが礫層	多く含む礫層
34	14		Ⅰ	1
36	3		251～253 は	250～253 は
	3		252	251
	5		ナデ	ヘラケズリ
38	1		から	～
55	12		早天	旱天

観察表

ページ	図番	項　目	誤	正
45	84	成形・文様・調整	成形・文様・調整（外面／内面）	タタキ／ハケ
49	183	色調	色	明赤褐色／明赤褐色
52			（石器）	石器観察表

介　良　遺　跡　Ⅱ

1998.6

高知市教育委員会

序

水稲耕作が本格的に始まる弥生時代以降は、全国的にも低湿地に集落が立地するようになってきます。鏡川の沖積平野上に立地する高知市内の平野部でも、弥生時代から古墳時代にかけて周辺部から次第に本格的な定住が始まったことをうかがわせる遺跡が発見されるようになってきました。今回調査された介良遺跡は、朝倉地区に存在する柳田遺跡とともにそのような遺跡の代表的なものです。

高知市では「ふるさとの川モデル事業」として介良地区において、自然環境と調和のとれた開発を行うことになりました。この事業にともなう、事前調査として今回の発掘は実施されました。介良地区は古代の史料「和名類聚抄」以来多くの文献に登場する歴史の古い地域ですが、高知市教育委員会では先に「高知市文化財調査報告書第９集」として同地区の調査結果をまとめています。今回の調査が高知市及び介良地区の歴史や文化財についての理解をさらに深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが発掘調査にかかわられた方々にお礼申し上げますとともに、関係各機関のご理解とご協力に感謝いたします。

平成１０年６月　高知市教育委員会

例　　言

1.　本報告所は高知県高知市介良に所在する「介良遺跡」の発掘調査報告書である。平成８年度調査は（財）高知県埋蔵文化財センターが行っており、「介良遺跡」として報告されているため、今回の報告書の表題を「介良遺跡Ⅱ」とした。

2.　発掘調査は高知市下水道部河川水路課が四国土建株式会社に委託し，高知市教育委員会が全般的な指導を行った。

3.　発掘調査は1997年10月20日から翌年２月27日まで行った。整理作業は1997年10月25日から1998年６月30日まで現地で行った。遺物は高知市教育委員会で保管している（遺物の注記はＫＫ－９７とした）。

4.　本書の編集は高知市教育委員会総括の下，編集全般を松田が行った。また，整理作業・編集に武石隆義，森岡和信の協力を得た。本文は第Ⅰ章及び第Ⅱ章第２節４区の調査を田上，それ以外を松田がそれぞれ執筆した。

5.　発掘調査及び整理作業において下記の方々の協力を得た。（順不同・敬称略）

発掘調査：大石喜久，北添隆清，北村光亀，坂本彰男，島津忠利，武内義巧，竹村達臣，土居一彦，西内孝明，浜田豊，廣光忠重，福留博，森英郎，森尾導，森岡和信，山地福男，井上能子，岡村好子，岡本良子，門田信子，門田美智，小松喜美，竹村君子，田中和子，徳久道子，山本栄子，横田繁子

整理作業：足達智代，池本千鶴，伊藤民，井上華代，入野光代，佐田笑子，島崎美恵子，島津清代香，西森千枝，野中朋子，畑平裕美，福富宣子，松村文枝，矢野睦子

発掘調査掘削工事　（有）共運工業

航空測量　（株）アイシー

木製品保存処理　（株）吉田生物研究所

6.　発掘調査並びに報告書作成に当たり，下記の諸氏・諸機関から助言、教示を賜った。記して感謝したい。（順不同・敬称略）

森田尚宏，出原恵三，前田光雄，吉成承三，坂本憲昭，高知県教育委員会文化財保護室，（財）高知県埋蔵文化財センター

本　文　目　次

序・例言

目次〈本文目次・挿図目次〉

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の概要と層序 …… 4

第１節　遺跡の概要 …… 4

第２節　基本層序 …… 4

第Ⅲ章　調査の結果 …… 6

第１節　１～３区の調査 …… 6

第２節　４区の調査 …… 39

遺物観察表 …… 41

第Ⅳ章　おわりに …… 54

写真図版 …… 57

報告書抄録 …… 85

挿図目次

第 1図　周辺の遺跡 …… 2
第 2図　調査区配置図 …… 3
第 3図　基本層序 …… 5
第 4図　SR201遺物出土地点 …… 7
第 5図　SR201出土遺物（土器）－壺・甕① …… 8
第 6図　SR201出土遺物（土器）－壺・甕② …… 9
第 7図　SR201出土遺物（土器）－甕① …… 10
第 8図　SR201出土遺物（土器）－甕② …… 11
第 9図　SR201出土遺物（土器）－壺 …… 12
第10図　SR201出土遺物（土器）－鉢 …… 13
第11図　SR201出土遺物（土器）－底部 …… 14
第12図　SR201出土遺物（土器）－高坏 …… 15
第13図　SR201出土遺物（土器）－Ⅴ層 …… 16
第14図　SR201，SD102出土遺物（石器） …… 17
第15図　SR201出土遺物（木器）－① …… 18
第16図　SR201出土遺物（木器）－② …… 19
第17図　SR201出土遺物（土器）－③ …… 20
第18図　SD201出土遺物 …… 22
第19図　SD101，102，201遺物出土状況・土層図測点 …… 23
第20図　SD201遺物出土状況 …… 24
第21図　SD202遺物出土状況 …… 24
第22図　SD202出土遺物（土器） …… 25
第23図　SX201出土遺物（土器） …… 26
第24図　SX201出土遺物（木器） …… 27
第25図　SX201遺物出土状況 …… 28
第26図　SR202土層図 …… 29
第27図　SR202出土遺物（土器） …… 30
第28図　SD101，SR202，SX201平面図・土層図測点 …… 31
第29図　SD101出土遺物 …… 32
第30図　SD101土層図 …… 33
第31図　Ⅵ層分布範囲・堆積状況 …… 34
第32図　Ⅵ層出土遺物 …… 35
第33図　Ⅲ層出土遺物（土器） …… 36
第34図　Ⅲ層，SR202，SD202出土遺物（木器） …… 37
第35図　Ⅱ層出土遺物 …… 38
第36図　4区出土遺物 …… 39
第37図　4区平面・土層図 …… 40

第Ⅰ章　調査に至る経過

高知市教育委員会では、高知県教育委員会の協力を得て、平成３年度に市内の詳細遺跡分布調査を実施した。その際新たに発見された遺跡の一つが介良遺跡であり、弥生時代以降現代までの遺物がほぼ連続して散布する複合遺跡である。

この度、高知市では市民に親しまれる良好な水辺空間を形成するために、「ふるさとの川モデル事業」として、遺跡の東端を流れる介良川の改修及び親水公園の整備を行うことを計画した。この計画を受けて、文化財保護の担当部局である高知市教育委員会と河川改修の担当部局である高知市下水道部との間で協議がもたれ、計画地内において遺構・遺物の有無を確認するため、高知市教育委員会では高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て、事前の試掘調査を行った（平成７年度調査）。

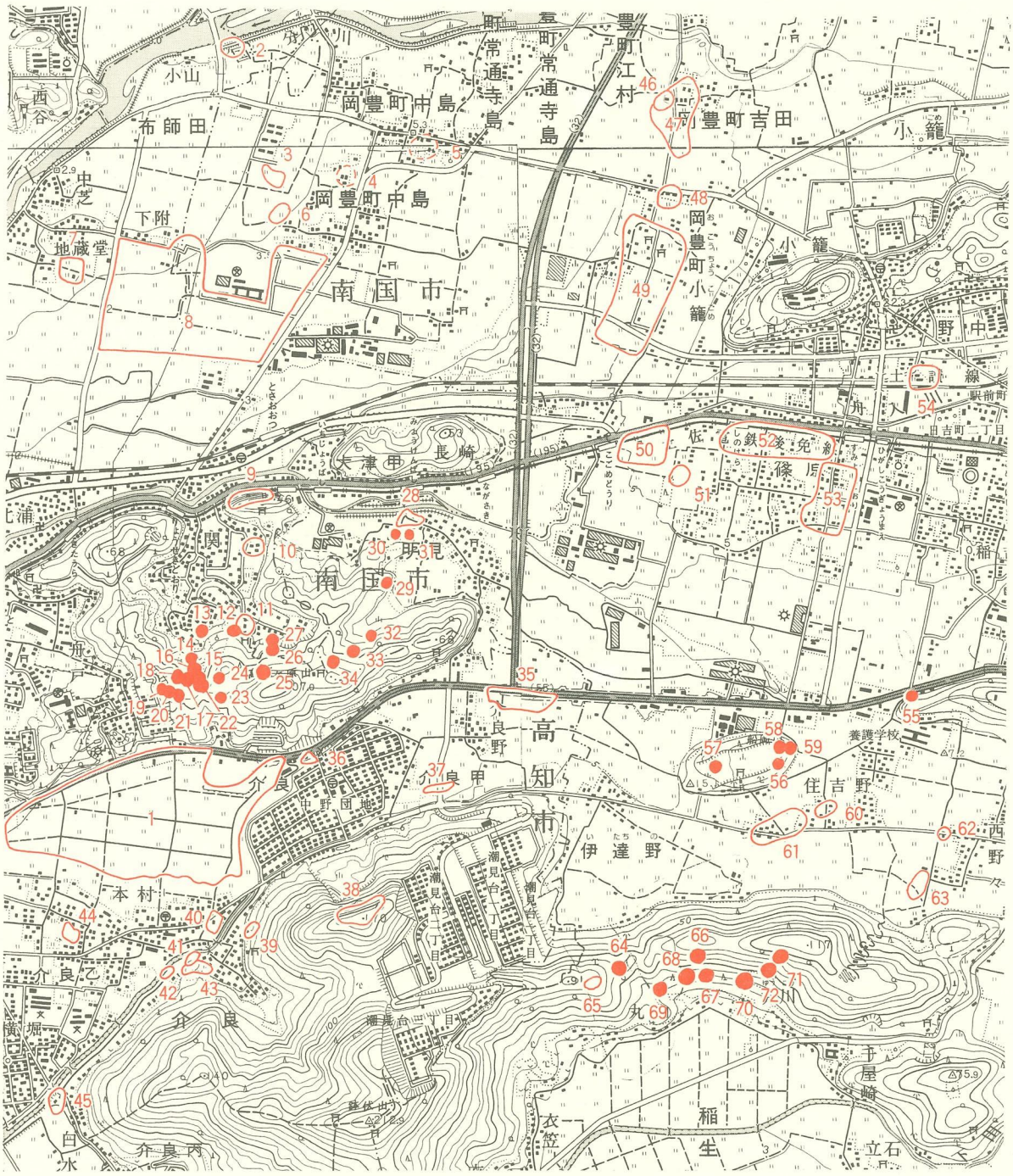
確認調査においては、明確な遺構は検出できなかったが、介良川の流路に近い部分において、弥生時代から古墳時代を中心時期とする土器や木器などの遺物が多量に出土し、特に木器は低湿地であるため良好な残存状況であった。この結果を受けて、再度両者の間で協議がもたれ、工事計画地のうち、介良川の流路に近い約１万２千㎡について記録保存を目的として本格的な発掘調査が行われることとなり、平成８年度には調査対象地のうち約３千㎡を埋蔵文化財センターに委託して調査が行われた。今回の調査（平成９年度調査）は８年度調査地のに北側に接する４，４２０㎡の部分を対象として平成９年９月１７日～平成１０年６月３０日までの間に行われた。

平成９年度の調査体制は以下の通りである。

事業主体及び事務	高知市下水道部河川水路課
調査主体及び事務	高知市教育委員会社会教育課

現地での調査は以下の体制で行われた。

調査員	田上　浩	（高知市教育委員会社会教育課）
	武石隆義	（　同　上　）
調査補助員	松田重治	（四国土建株式会社）
発掘現場管理	豊永主政	（　同　上　）



図番	遺跡名
1	介良遺跡
2	黒頷古墳
3	中島町田遺跡
4	中内土居城跡
5	中島土居城跡
6	カヲツ池遺跡
7	布師田八頭城跡
8	ミトロ遺跡
9	大津城跡
10	大津金子遺跡
11	高間原弥生遺跡
12	小奈路古墳
13	六郎山古墳
14	高間原10号古墳
15	高間原1号古墳

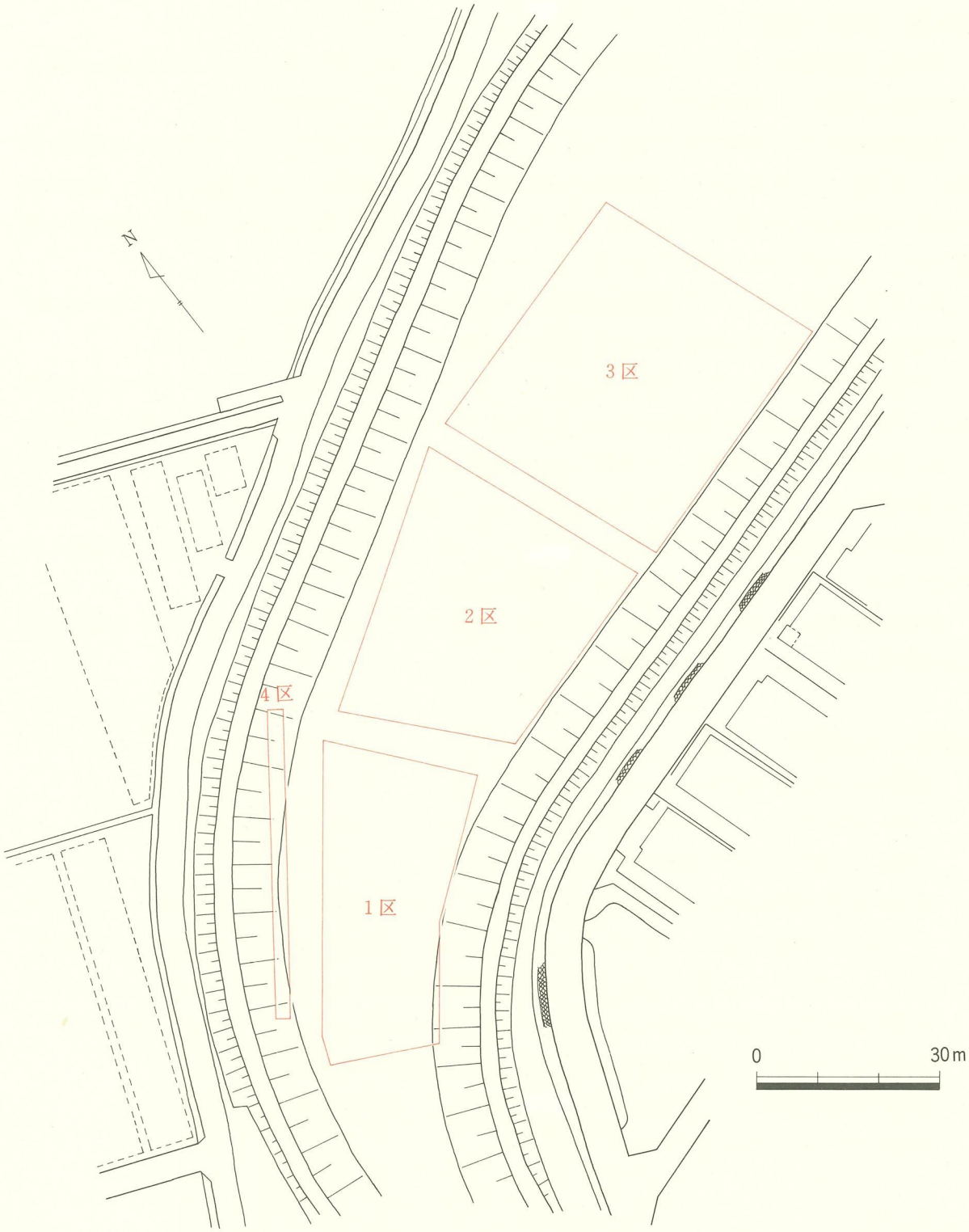
図番	遺跡名
16	高間原2号古墳
17	高間原3号古墳
18	高間原4号古墳
19	高間原11号古墳
20	高間原9号古墳
21	高間原5号古墳
22	高間原6号古墳
23	高間原8号古墳
24	高間原7号古墳
25	三塚上古墳
26	三塚中古墳
27	三塚下古墳
28	竹の後遺跡
29	明見彦山1号墳
30	明見彦山2号墳

図番	遺跡名
31	明見彦山3号墳
32	狸岩1号古墳
33	狸岩2号古墳
34	狸岩3号古墳
35	介良野遺跡
36	若宮窯跡
37	介良中野遺跡
38	介良城跡
39	朝嶺神社前遺跡
40	朝嶺橋北西遺跡
41	花熊城跡
42	西養寺跡
43	西の谷遺跡
44	介良下組遺跡
45	介良白水古墳

図番	遺跡名
46	吉田土居城跡
47	吉田遺跡
48	小籠土居城跡
49	小籠遺跡
50	忠兵衛遺跡
51	北野寄遺跡
52	若宮ノ東遺跡
53	北泉遺跡
54	野中廃寺跡
55	吾岡山古墳
56	住吉山1号墳
57	住吉山2号墳
58	住吉山3号墳
59	住吉山4号墳
60	乱戸遺跡

図番	遺跡名
61	野津古遺跡
62	神田遺跡
63	茶田遺跡
64	逆ノ松古墳
65	丸山五輪塔
66	馬背東1号古墳
67	馬背東2号古墳
68	馬背西3号古墳
69	丸山古墳
70	馬背古墳
71	井川山1号古墳
72	井川山2号古墳

第1図　周辺の遺跡



第2図　調査区配置図

第Ⅱ章　遺跡の概要と層序

第1節　遺跡の概要

今年度の調査範囲は前年度の調査区に北接する位置にある。南北約150m、東西約40mの調査対象地を三分割し、南端を1区、中間を2区、北東端を3区として調査を行った。

当遺跡において、時期を特定できるもっとも古いものは弥生時代終末～古墳時代初頭頃を中心として流れていた自然河川（SR201）、SR201へ流入するSR202，溝状遺構であり，SR201から流出するSD201、作業場に当たると考えているSX201がある。SR201，202は現在，調査区の南を流れている介良川の旧河道に当たると思われるものである。

出土する土器を中心とした遺物の状態等から弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてのSR201は流速も遅く、埋没後も湿地帯として不安定な状態が長く続いていたと考えられる。

いずれにしてもSR201はこの付近に存在するであろう集落の生活用水摂取に欠かせない場所であったと同時に2区の中心部を中心としたあたりが河川祭祀後に土器を一括投棄した場所として，あるいはゴミ捨て場として機能したと思われる。

SX201は人頭大の角礫や杭で木材を固定するような配置やそこに水を引くためと考えられる小水路等から作業場であったと思われる。しかし、出土遺物やその出土状況から祭祀遺構とは考えられず、むしろ日々の生活に密着した場所を想定している。

古代から中世にかけては溝状遺構が1条存在するのみであるが、上面かなりを削平されている。出土遺物も細片が多く、特筆すべきこともない。

第2節　基本層序（第3図）

当遺跡における基本層序は大きく7つに分けられる。

Ⅰ層　客土である。上半は雑草等による撹拌がみられ、土壌化している。

Ⅱ層　古代から中世の遺構埋土・包含層である。

Ⅲ層　弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構埋土・包含層である。SR201外においてこの層から若干の須恵器の出土がみられ、この層が前年度の調査で須恵器が多く出土したⅨ層[1]に相当すると思われる。長期間、この地が湿地帯であったことを示すものであろう。

Ⅳ層　基本的にはⅢ層であるが、埋土中に植物遺体を多く含むためにあえて分層した。

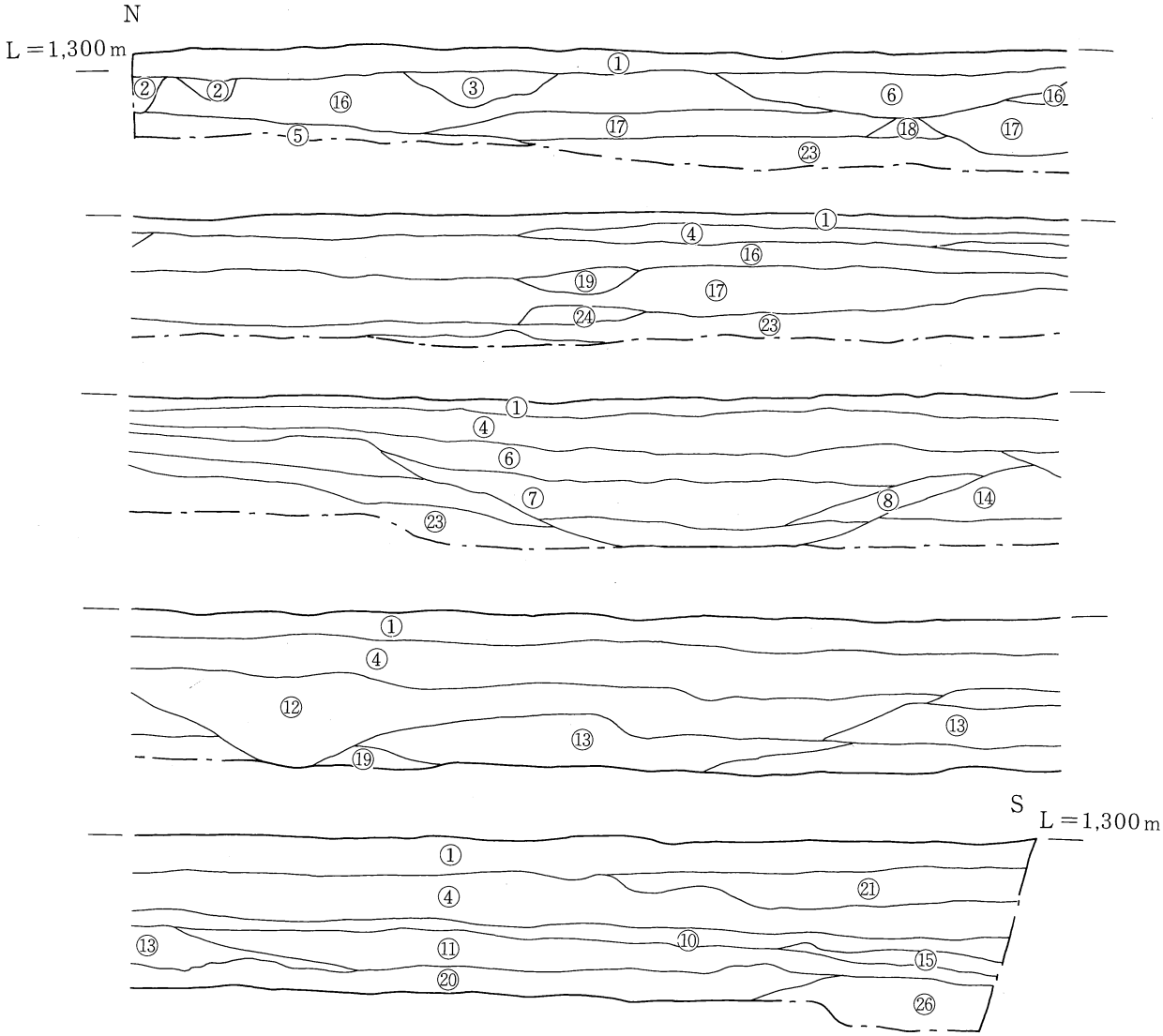
Ⅴ層　グライ化した極細砂層である。弥生時代後期以降の地表面である。

Ⅵ層　3区北東端のみで確認できる洪水礫層である。弥生前期末の遺物を多く含む。

Ⅶ層　ベースになる礫層である。

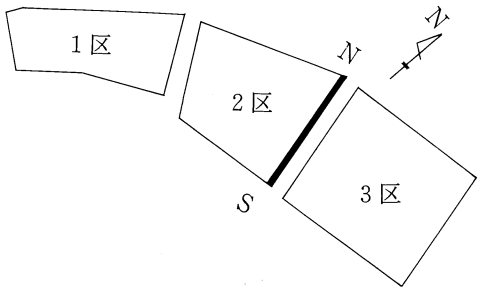
参考文献

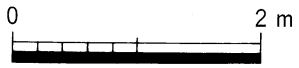
(1)　坂本憲昭・田坂京子　1997.3　『介良遺跡』（財）高知県埋蔵文化財センター



①灰褐色小礫混じりシルト（客Ⅰ）
②明褐色中礫混じりシルト（近，現代）
③灰褐色シルト質極細砂（ＳＤ301埋Ⅰ）
④灰褐色シルト質極細砂
⑤暗褐色シルト質極細砂
⑥黒灰色シルト
⑦黒灰色砂質シルト
⑧⑦＋⑭
⑨褐色砂質シルト　－Ⅳ層
⑩黒灰色シルト　－Ⅲ層
⑪暗黒褐色砂質シルト
⑫暗灰褐色シルト～中砂
⑬黒灰色中～粗砂
⑭緑灰色細～中砂
⑮黒灰褐色シルト
⑯明黄灰色シルト質極細砂　－Ⅴ層
⑰青灰色極細砂
⑱青灰色砂礫
⑲暗黄色中砂
⑳青灰色シルト～小礫
㉑黄灰色・青灰色細砂
㉒暗灰色粗砂混じり中～大礫
㉓青灰色細砂～中礫
㉔青灰色粗砂～中礫
㉕青灰色砂礫
㉖青灰色大～巨礫　－Ⅶ層

Ⅰ層
Ⅱ層
Ⅲ層
Ⅳ層
Ⅴ層





第３図　基本層序

第Ⅲ章　調査の成果

第1節　1～3区の調査

1.　　弥生時代終末から古墳時代前期の遺構と遺物

Ⅲ層及びⅣ層を包含層とするこの時代は後述する古墳時代前期とともに本遺跡における調査の中心となった時代であり，体部にタタキメを持ついわゆる「ヒビノキ式」と呼ばれる土器を多く出土する。一口にヒビノキ式といってもその範囲は広く，Ⅰ～Ⅲ式に細分されることは周知の通りであるが、今回の調査ではそのいずれもが広く出土するとともに，それよりもやや新しい時期のものも同層から出土する。

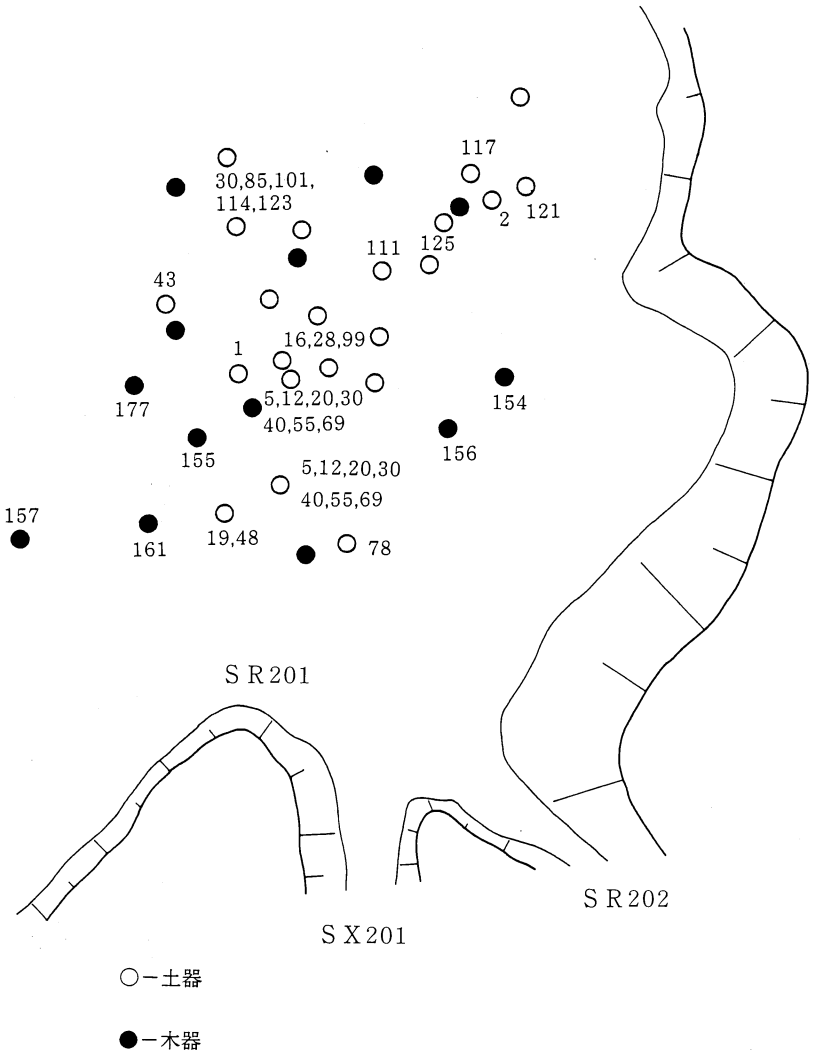
SR201（第4～17図）

この時代の中心となる遺構である。SR201は2区と3区の境界あたりから現れ，弧を描くように広がって1区の中央やや南よりへと逃げてゆく自然河川である。土層堆積や出土遺物の状況を見る限り流速は決して早くなく，むしろ湿地帯のような状況を呈していたものと思われる。第4図で示した範囲に遺物が集中しており，これらの状況を考えあわせるとこの場所が付近で営まれていた集落のゴミ捨て場として機能していたと同時にとあわせて河川祭祀後の一括投棄であろう。遺物の時代幅から見て一度に止まらず何度か行われた可能性が高い。土層はⅢ層およびⅣ層が厚く堆積しているが、遺物はこの2層の境目およびⅣ層・Ⅴ層の境目からの出土が中心である。また、Ⅴ層中に遺物を含んだⅢ・Ⅳ層が混淆している場合も多く，この状態が下層のベース（Ⅶ層）の上面まで続く。

Ⅲ・Ⅳ層の出土遺物は今年度の調査も前年度と同様出土遺物中に占める甕の割合が大きくなっている。甕の大半が体部にタタキを施すものである。体部上半のタタキの方向にも23・27などのように横方向のタタキメをもつもの，20や22のように斜め方向のタタキをもつものの他，縦方向のタタキメをもつ34もみられる。タタキの他では外面にハケを施す（47）ものがある。また4の底部や11・29の口縁部のようにタタキメをハケで消すものも見られる。内面の調整はハケがほとんどであるが，12のように口縁部にハケ，体部はナデというものも見られる。その他5・9のように口縁部から底部まで観察できる個体ではタタキの方向の変化から分割成形を見ることができるものもある。

壺も同様に体部上半で1・8・75のような横方向のタタキ，60・61のような斜め方向のタタキを施すものがある。また，1・61はタタキメをハケで消している。54・55は小型丸底壺であるが，形態的に相違点がある。両者とも丸底ではあるが，頸部から底部にかけて54は弧を描くように丸くなっているが，55は直線的である。

壺は種類も豊富で，1・2・51・52・57～61・64・67・70・75のような短頸の広口壺，71のような広口壺，3・4のような直頸壺，そして前述の小型丸底壺がある。その他，56・66・73・74は混入品，65・68は貼付口縁をもつ広口壺であり，混入品の可能性があるが，65の胎土や色調がこの時期の他

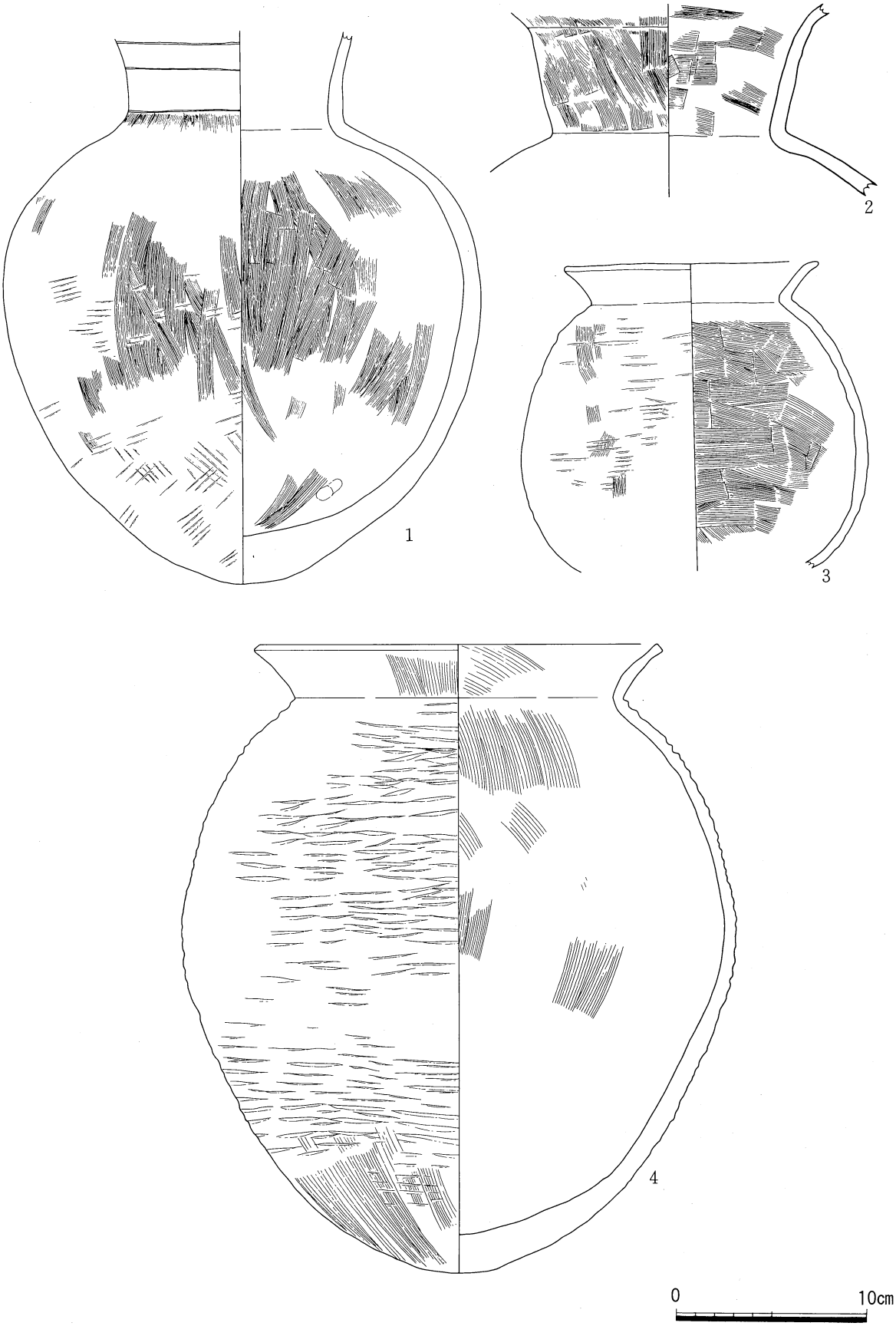


第4図　SR201 遺物出土地点

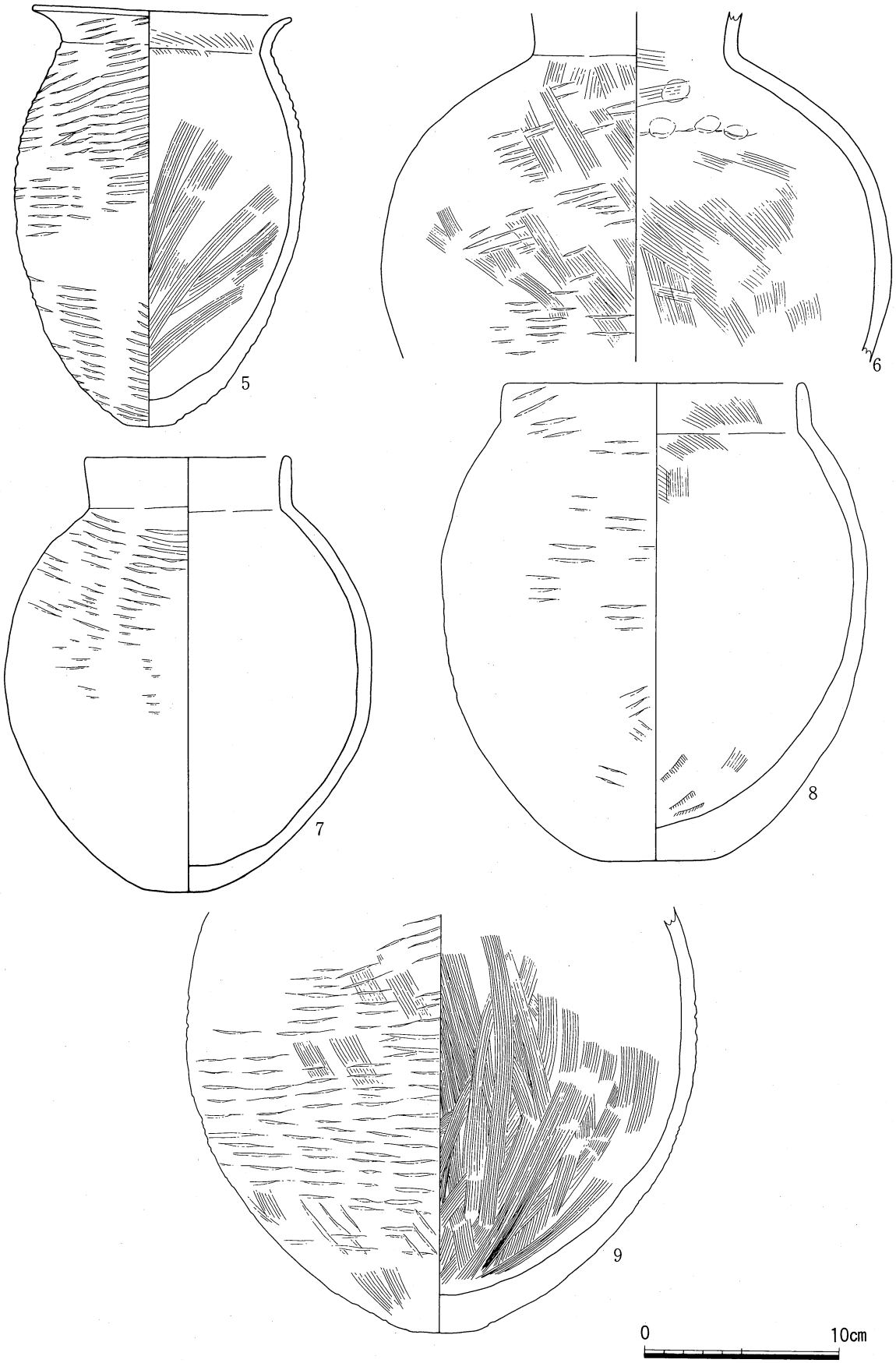
の遺物と酷似しており，時期を決定しかねている。72 は口縁端部に竹管文をもつ甕であり，これも混入品である。

鉢は大半が椀のような形態をなすものである中で 83 のように端部が外反するもの，手捏ね土器のような外面を指頭圧で成形するもの（81）も存在する。内面はハケ・ナデで丁寧に仕上げるが，外面は粗雑である。他に 76・77 が手捏ね土器である。

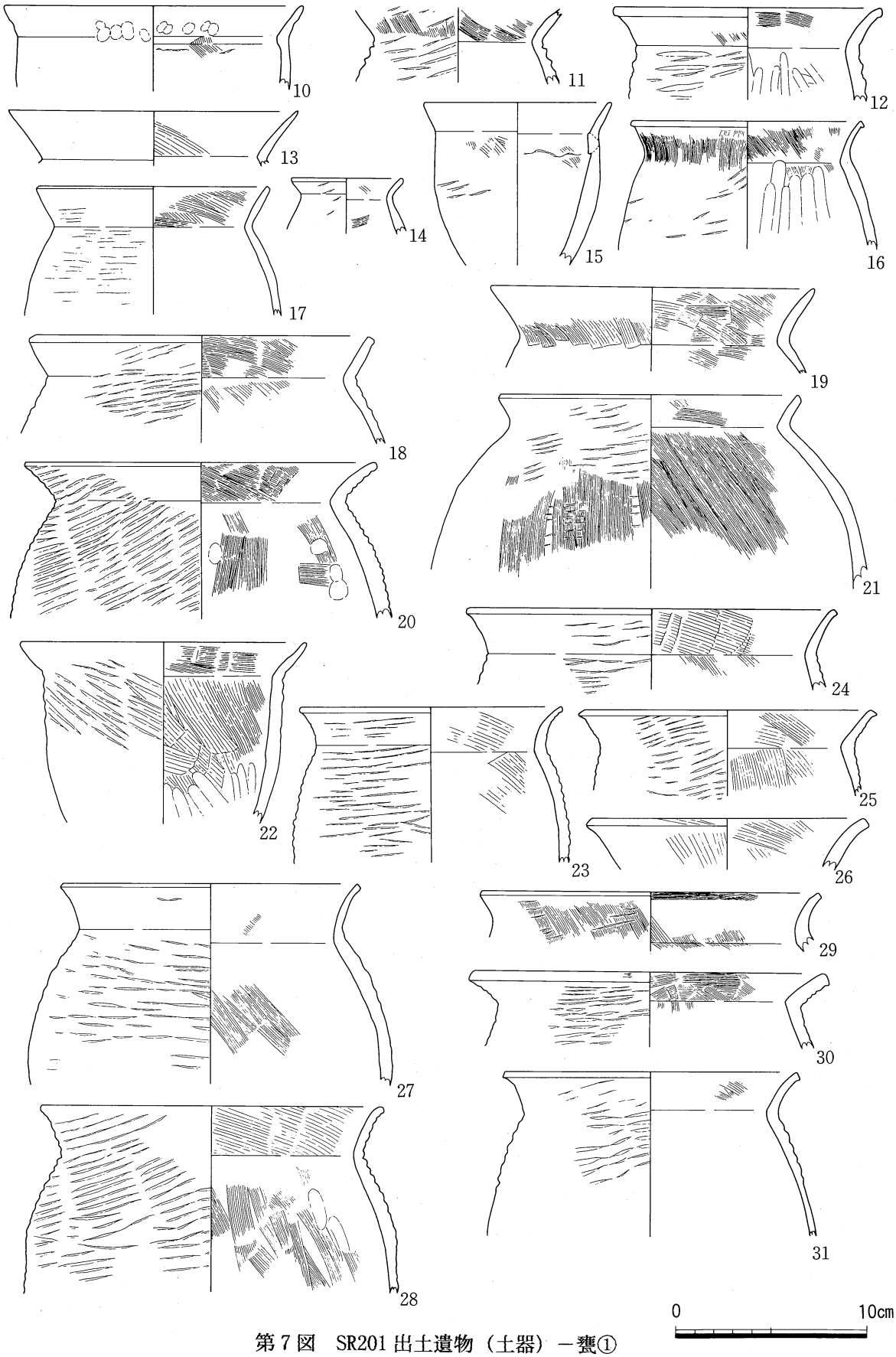
外面には壺・甕と同様タタキメを残すものが多く見られ，それにも横方向（78・88）と斜め方向（84・86・91）がある。また，タタキのあとにハケを施すもの（86）やハケメのみが残るもの（85・87）もあることも壺・甕と同じである。内面はハケ調整を行うもの（80～85・87・90・91・93）とヘラミガキによるもの（79・88）がある。これらのうち 82・84 のハケメは底部の中心付近から左回



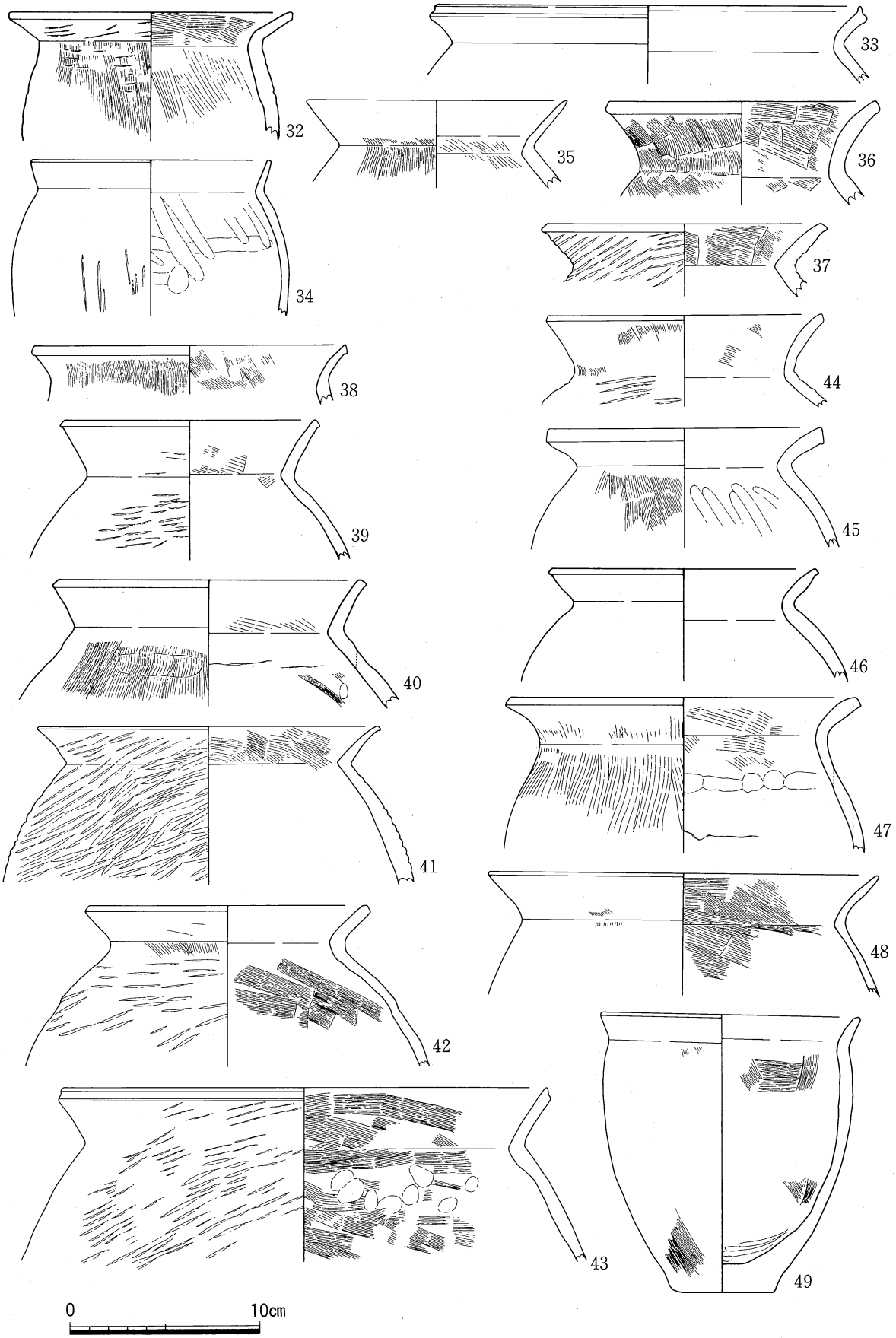
第５図　SR201 出土遺物（土器）－壺・甕①



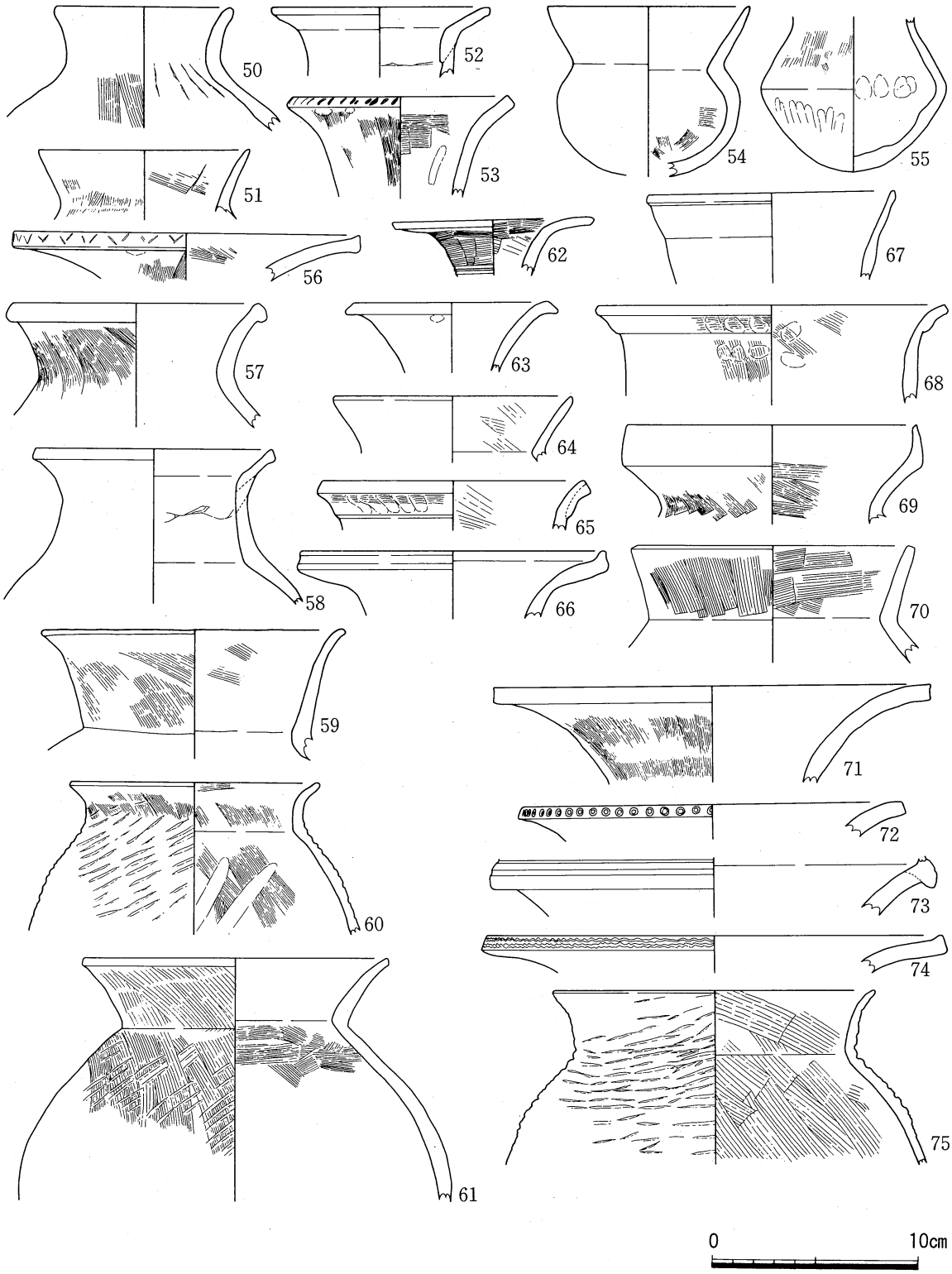
第6図　SR201 出土遺物（土器）－壺・甕②



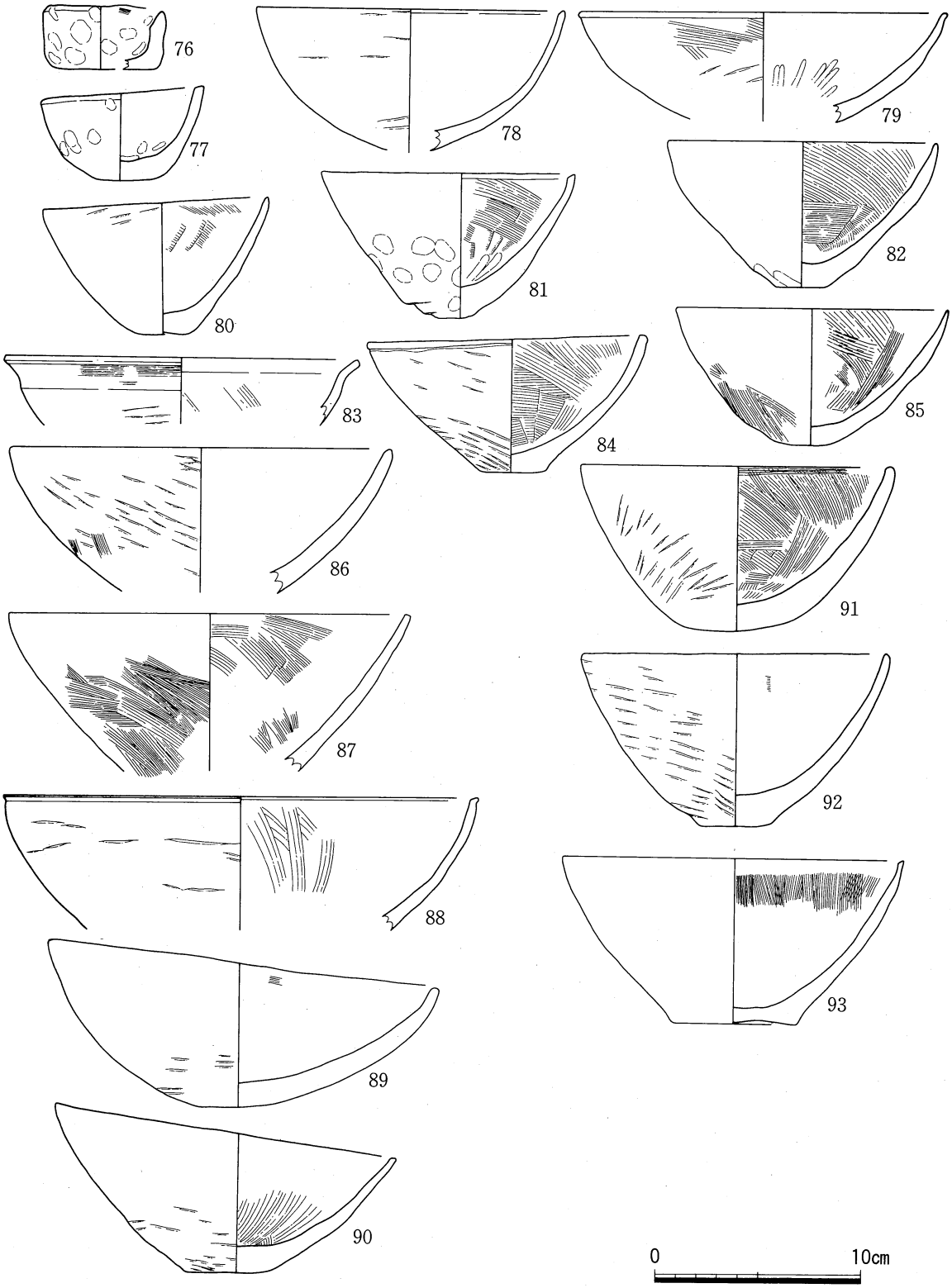
第７図　SR201 出土遺物（土器）－甕①



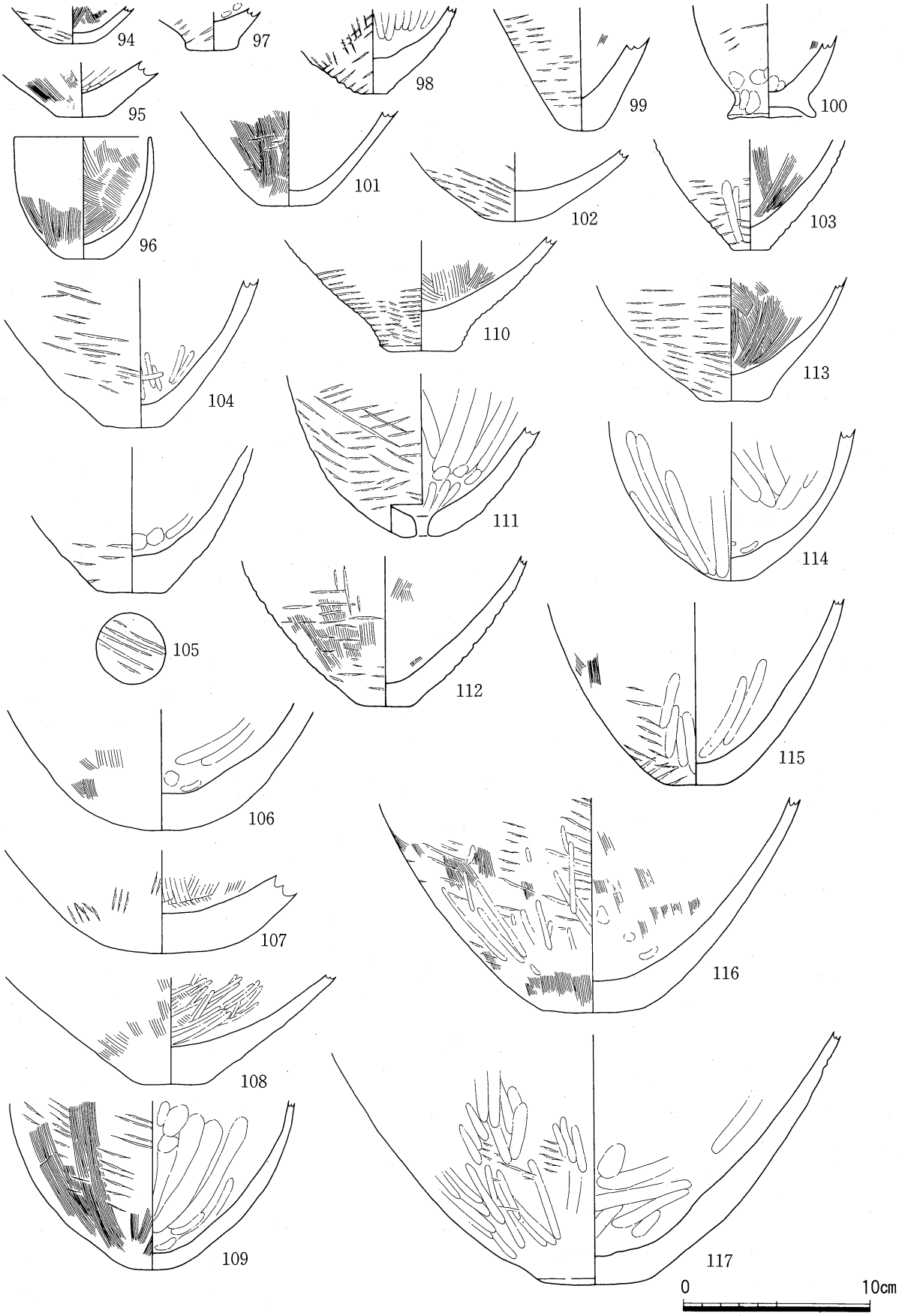
第８図　SR201 出土遺物（土器）－甕②



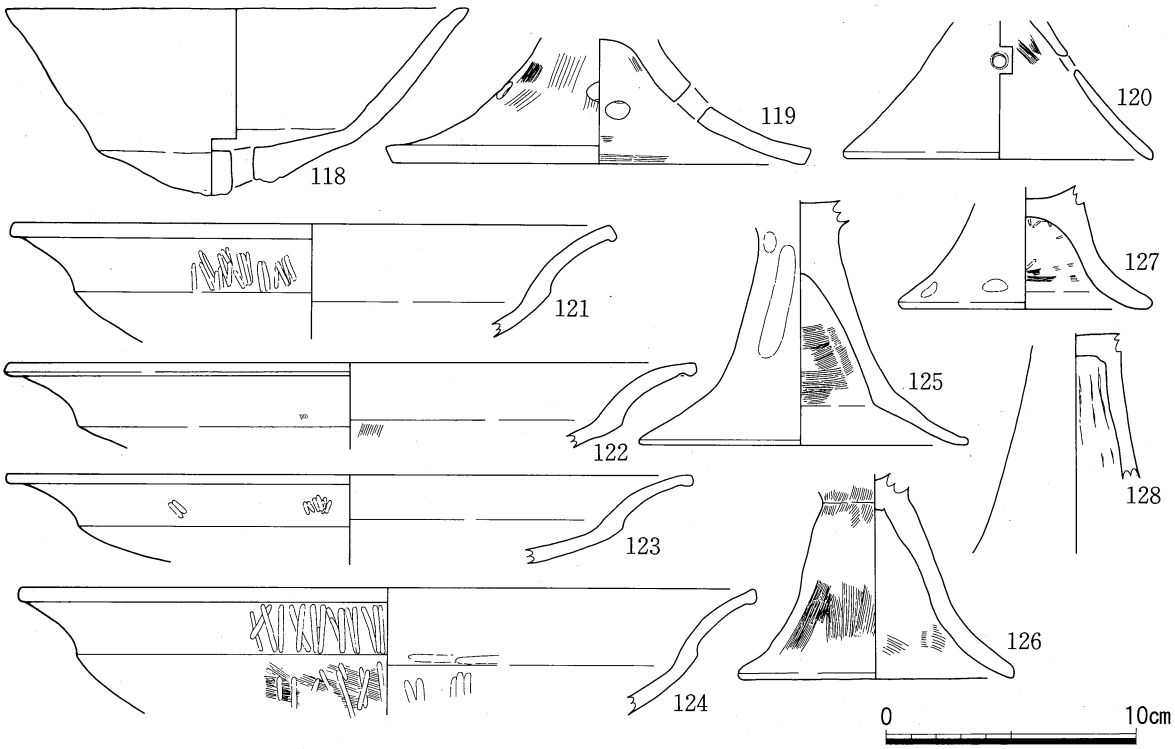
第9図　SR201 出土遺物（土器）－壺



第10図　SR201出土遺物（土器）－鉢



第 11 図　SR201 出土遺物（土器）－底部



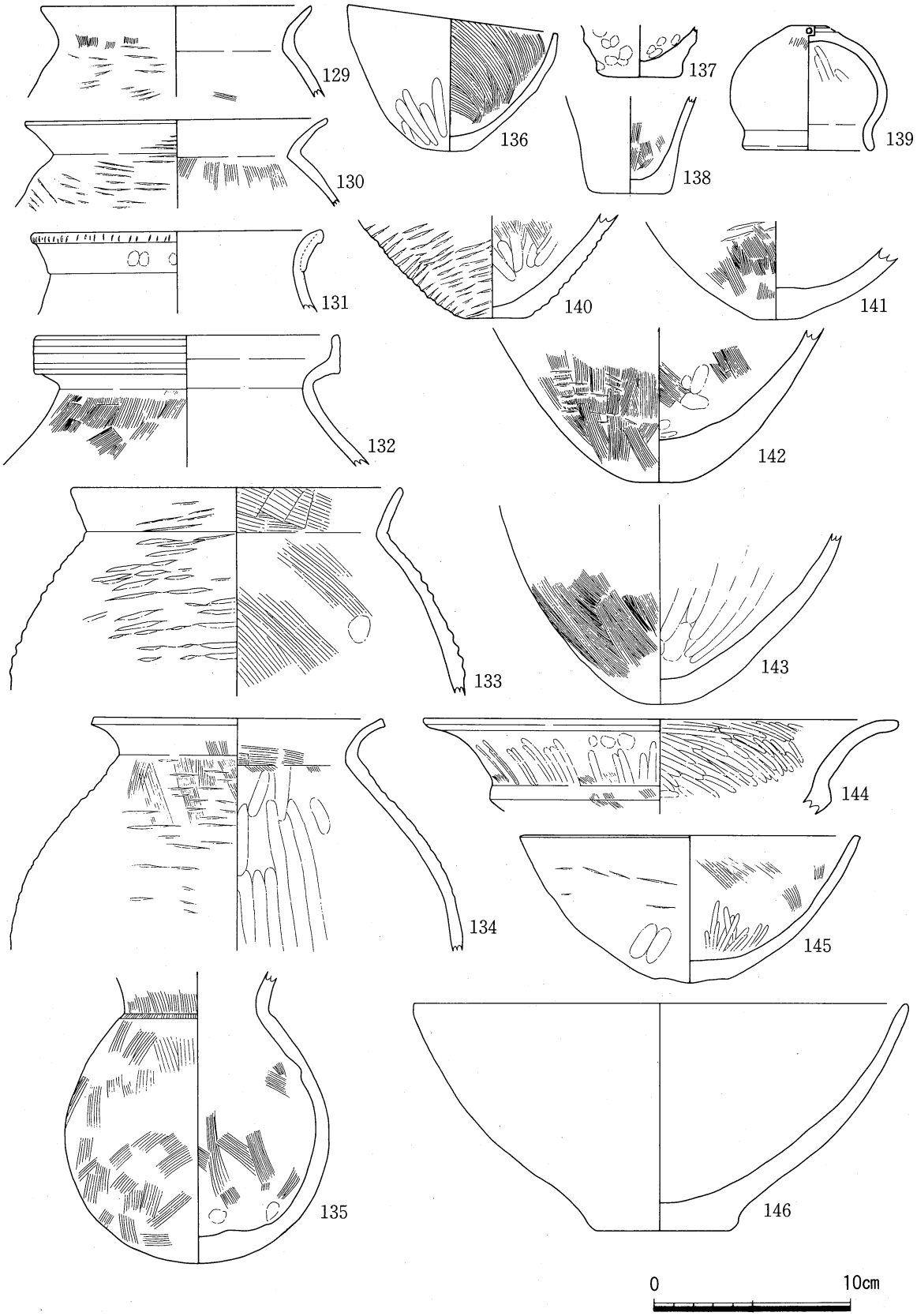
第12図　SR201出土遺物（土器）－高坏

りに風車状に上げている。その他口縁端部付近を強く撫でるもの（79・88・93）も存在する。底部は丸底のもの（89～91），丸底に底部をつけたようなもの（84・92），平底のもの（82・93）があり，89・90は口縁部が傾いている。

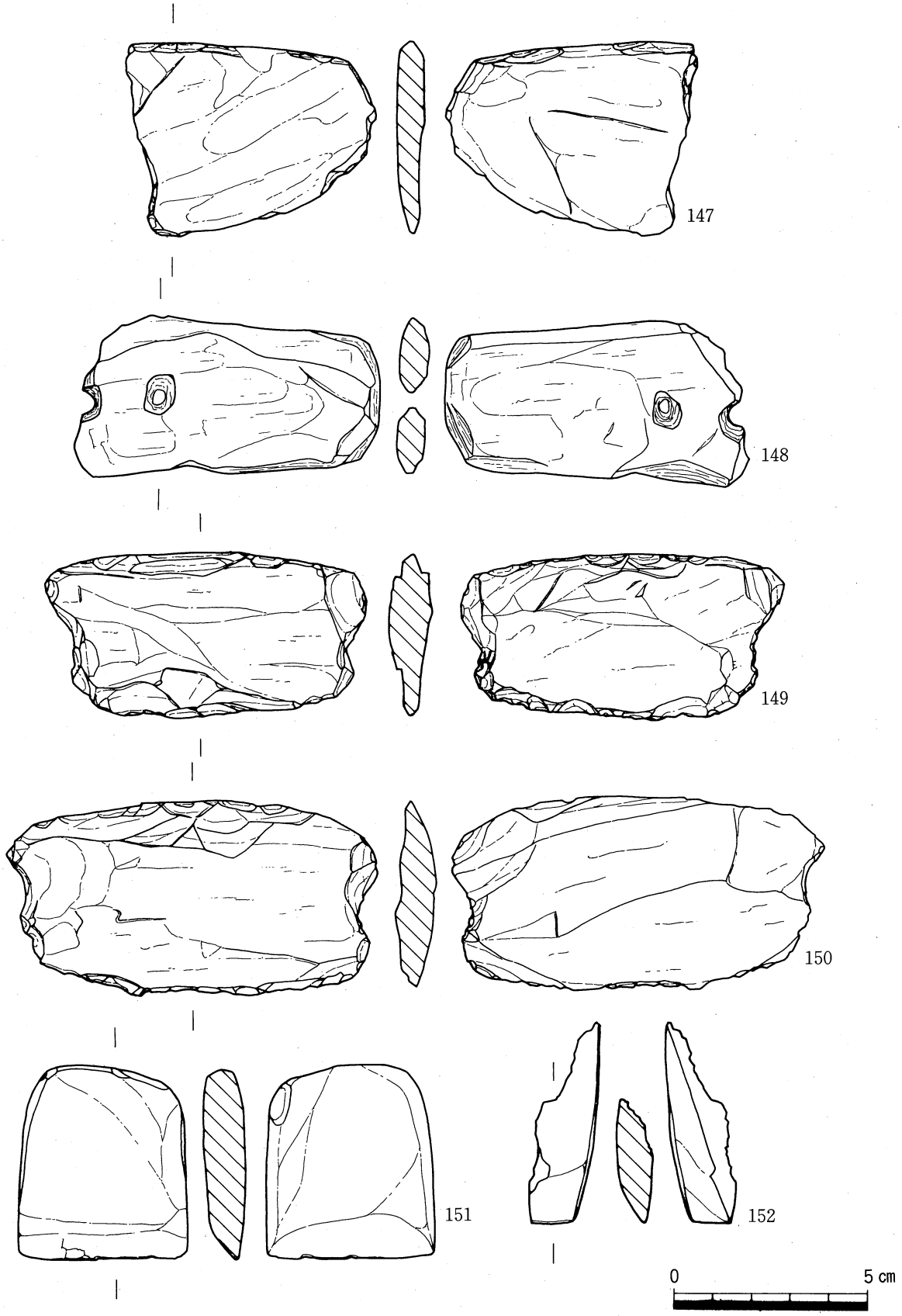
底部には壺（102・106・107），甕（98・104・105・109・111・112・114～117），鉢（94～97・108・110・113）があるほかは器種の判定をしかねるものである。これらの成形・調整についてはそれぞれの項目で述べたことに当てはまるものが多いが，特筆すべきこともいくつかある。甕では105は底面にもタタキを施す。111は底部中央に穿孔し，体部には横方向のタタキと斜め方向のタタキが混在している。また，114・117のように外面をナデによって仕上げるものや，115・116のように外面にタタキのあとナデとハケが混在するものもある。

高坏の坏部は121～124のように大きく外反する口縁部をもつものと118のような直線的に広がるものがある。118は脚部を欠損し，高坏としての機能を失ったのち底部に穿孔され転用されている。内外面とも摩滅が著しく，調整は不明である。124は外面の下半にハケを施したのち内外面ともをヘラミガキで仕上げている。121・123も外面にヘラミガキを施す。

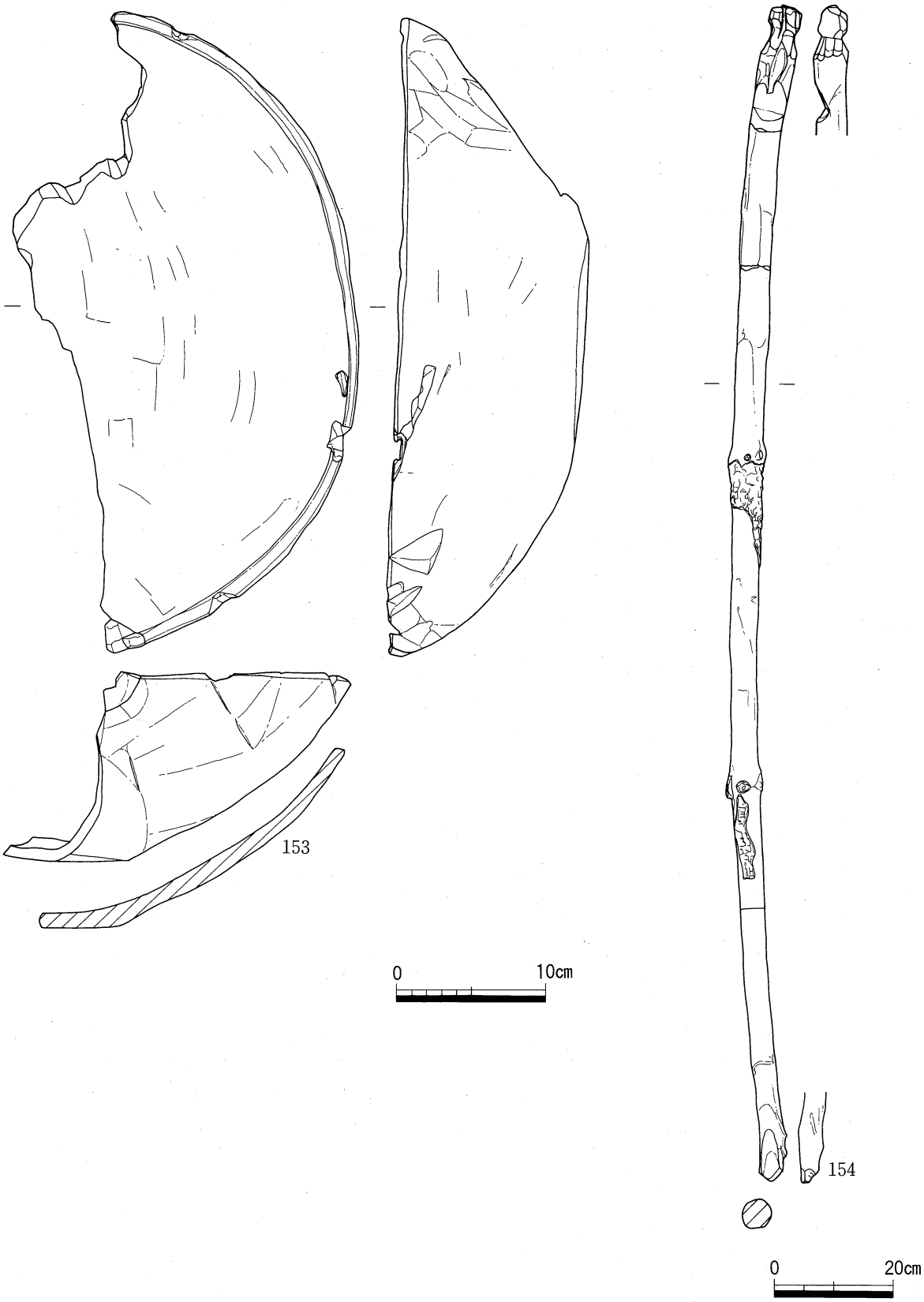
122の外面の調整は摩滅により不明であるが，内面にハケメが残る。120は器台である。上方に穿孔が見られる。127は脚部であるが，器高が低く台付壺や台付鉢といったものかもしれない。125・126・128は高坏の脚である。125は外反しながら下方に広がる。外面ナデ内面ハケによる成形・調整を行う。126はやや膨らみながら下方に広がるものであり，内外面ともにハケ調整を行う。128もやや外反しながら広がるものの，125に比べると直線的な印象が強い。内面に絞り目が残る。119



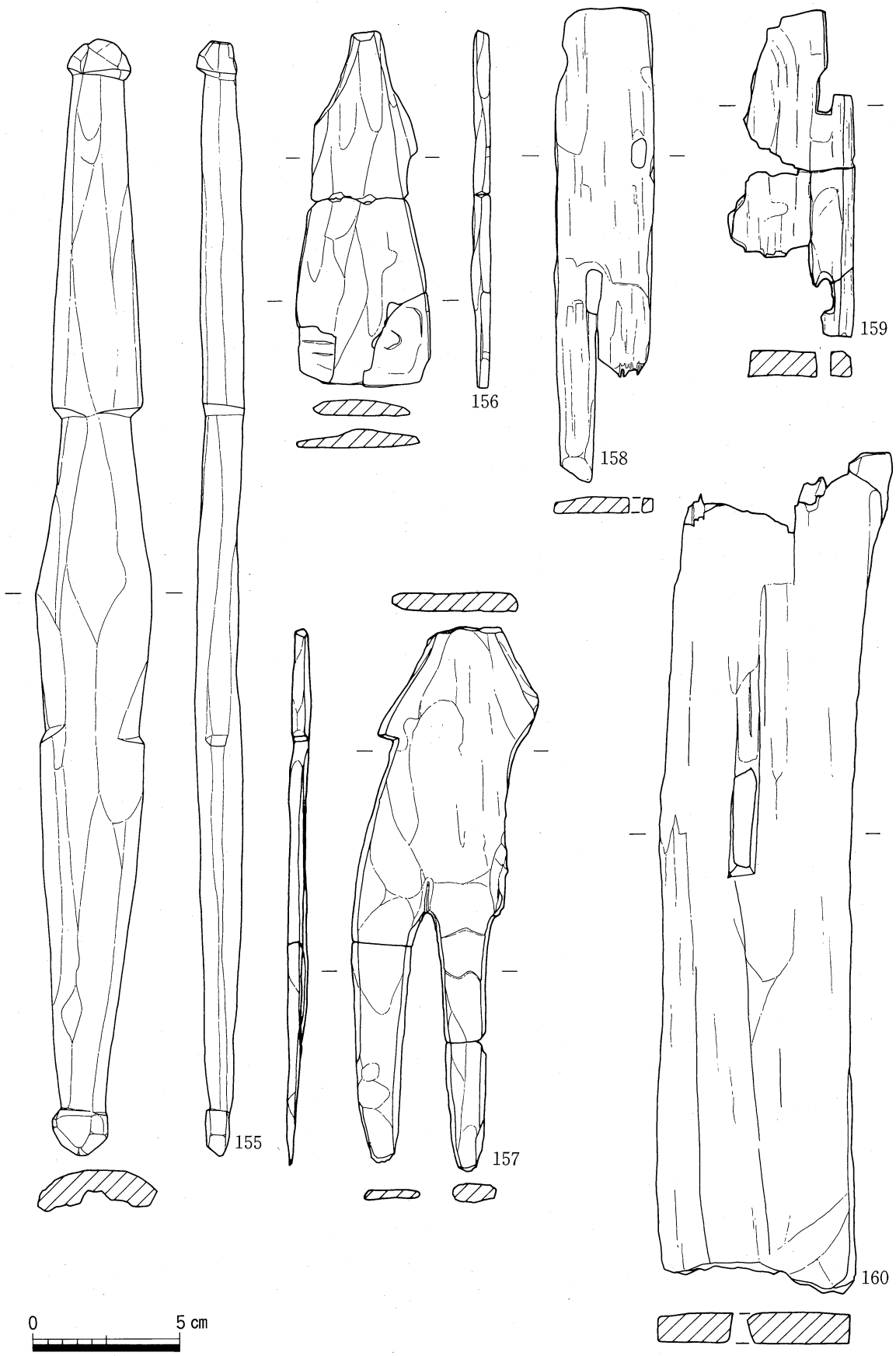
第13図　SR201出土遺物（土器）－V層



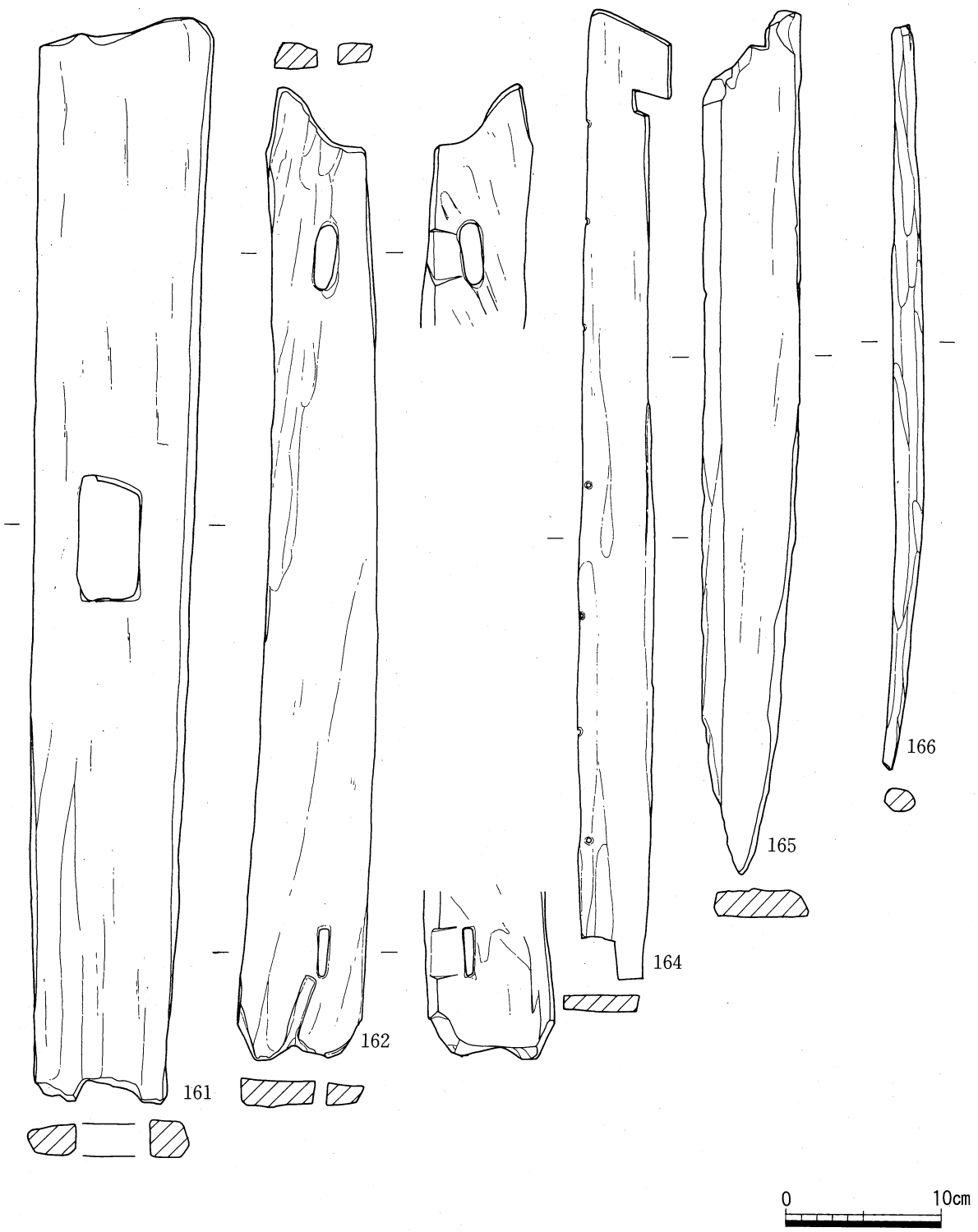
第 14 図　SR201，SD103 出土遺物（石器）



第15図　SR201出土遺物（木器）－①



第16図　SR201出土遺物（木器）－②



第17図　SR201出土遺物（木器）－③

は脚部である。内面の天井がかなり低いが坏部の欠損部が不明であるため，器種の限定は難しい。不規則に穿たれた4孔を有し，内外面とも小刻みなハケを施す。

第13図はⅤ層中に混入したⅢ・Ⅳ層に含まれた遺物である。130・132・133・140は甕である。そのうち132は吉備系の甕と思われ，搬入品である。外面にハケメを有する。130・133は外面に横方向のタタキを施し，内面はハケによる調整を行う。140は底部であるが，やや斜め方向のタタキメを有する。内面にはハケ，指頭圧痕を施す。小さな平坦面をもつ平底である。

壺は129・131・134・135である129・134は短頸の広口壺である。いずれも横方向のタタキメと口縁部にハケメを有する。134は体部の上方のみタタキのあとハケを施している。内面の調整は，129は摩滅のためわずかにハケメを観察するにすぎなかったが，134は口縁部にハケ，体部にナデによる調整がなされている。135は丸底壺である。内外面とも短いハケ調整を多く行う。131は弥生中期の混入品である。

136・145・146は鉢である。136は外面にナデ・内面に風車状のハケを施す。口縁部は傾いている。145は丸底であるが，底部の中心を巡るように撫でており，口縁部は傾いて安定する。外面はタタキののちナデを施し，内面は上半がハケ，下半をミガキで調整する。146は平底である。摩滅のため調整等は不明である。137・138・141～143は底部である。137は手捏ね土器で外面に指頭圧痕が残る。138は器種不明であるが，コップのような形をなすものと思われる。141・142は壺であると思われる。141は内面の調整が摩滅により不明であるが，外面はタタキ後ハケを施す。142は141と同様に外面にタタキ後ハケ，内面はハケを施す。139は小型の壺のようなものであろう。底部に穿孔があるため吊して使用したものと考え，上下を反転して図示した。外面にハケ，内面にヘラミガキがわずかに残る。144は高坏である。大きく外反する口縁部をもち，外面の上半にヘラミガキ，下半にハケ，内面にヘラミガキを施す。

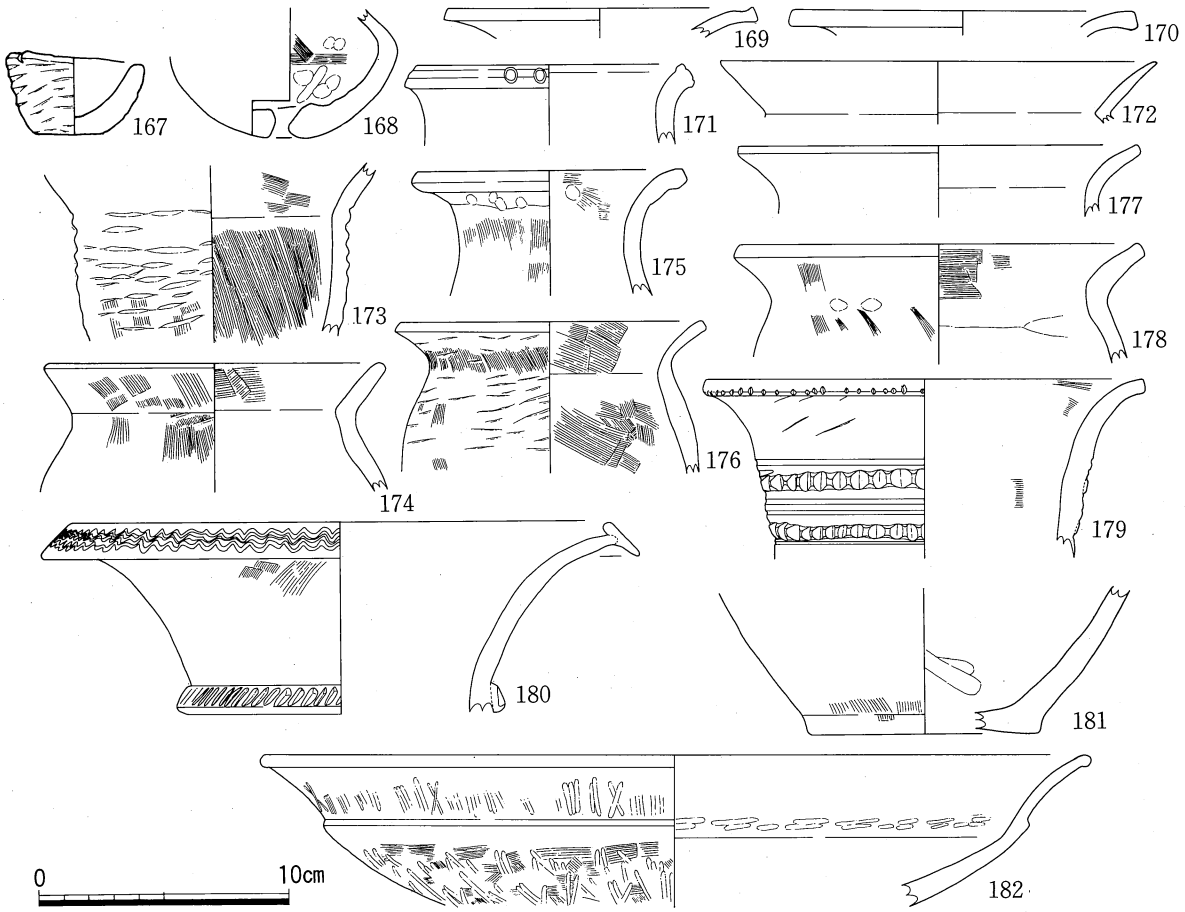
147～150は石包丁である。そのうち147・148は緑色片岩製の磨製品で，148は中央部に横に並んだ2孔を穿つ。149・150は頁岩製の打製品である。両者とも2ヶ所に抉入が認められる。また，150は未製品である。151は頁岩製の磨製扁平片刃石斧である。刃部には使用による微細な欠損が見られる。

153は木製容器である。約1/2を欠損し，芯の有無は不明である。154は両端加工木である。丸木材を使用し，一部には樹皮が現存する。非常に長大で，長さは約2.1mをはかる。用途は不明である。155は紡績具・織機の一部であろう。丸木材を使用するが，現状では下半を欠損している。156は曲柄平鍬，157は曲柄又鍬で現存は2足であるが，本来は3足であったものと思われる。ともに板目材を使用している。158～164は有孔板材であるが，用途は不明である。何らかの部材であろう。163はそれぞれの孔の片側に何かを通していた痕跡があり，第33図の272のように木の皮などを通して固定していたのかもしれない。いずれも板目材である。165も部材であるが，孔は有しない。板目材である。166は丸木材を使用した加工木である。漁撈具の一部であるかもしれない。

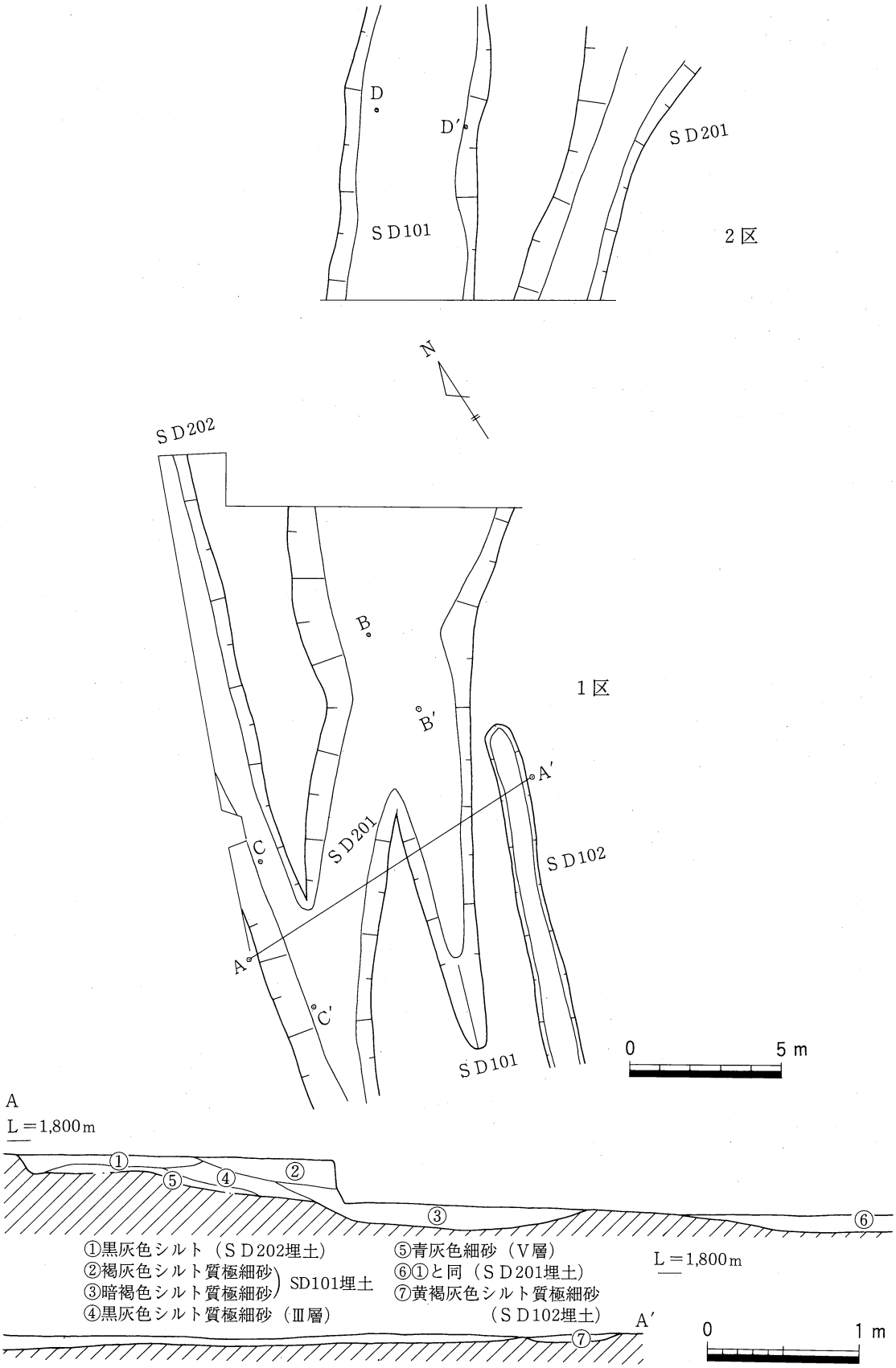
SD201（第18～20図）

2区西南端付近から西へ派生する溝状遺構で，1区北東辺の中央付近で調査区外へと逃げる。自然遺構である可能性もあるが，溝状遺構として扱った。Ⅲ層を埋土に持つ。

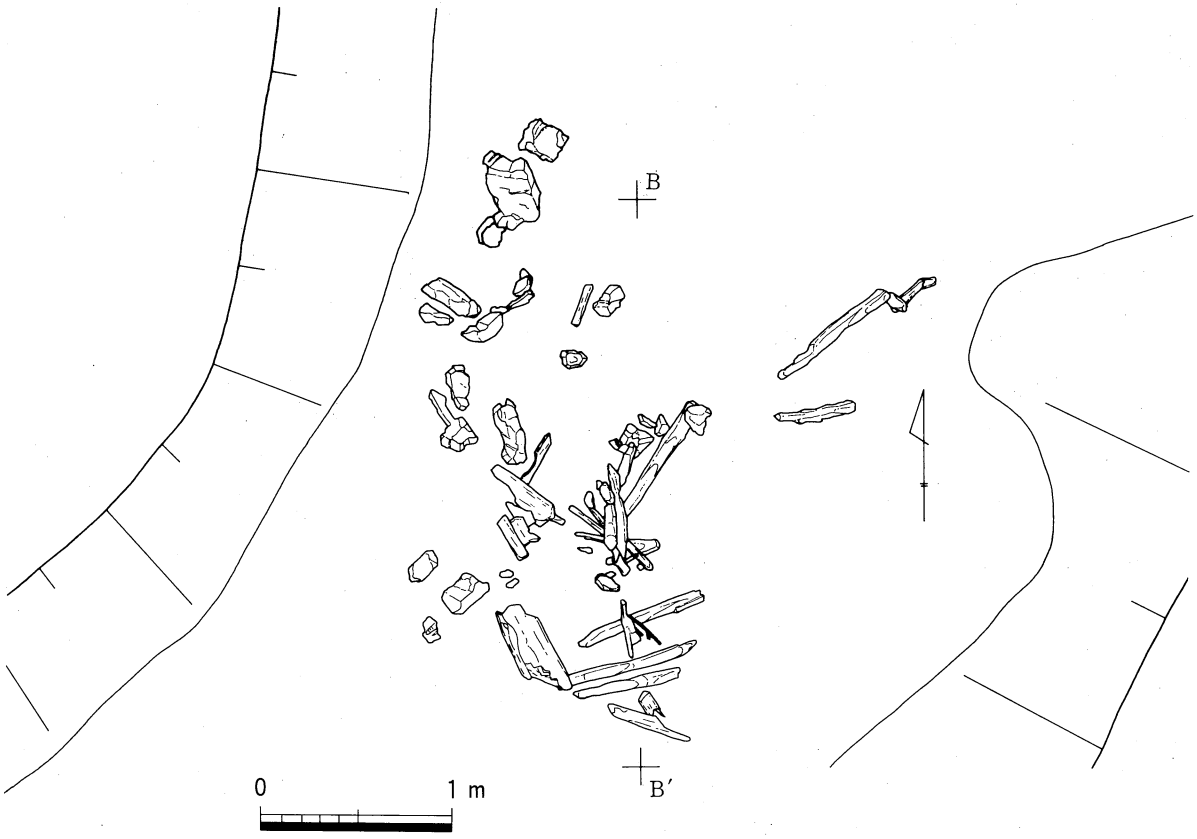
167は小型の鉢である。外面にタタキを施し，内面を丁寧に撫でている。168は底部である。外面は摩滅が著しいが，下方にハケメを確認できる。内面は指頭圧，ハケ，ナデを施し，底部に穿孔している。168・170は壺である。171～174・176・178・179は甕である。171は弥生中期の甕であり，混入品である。口縁端部に竹管文2ヶが現存する。172は下川津B類式と呼ばれるもので讃岐地方からの搬入品である。口縁部のみの破片であるが内外面ともナデを施し端部に向かって鋭く伸びている。173は外面に横方向のタタキメが見られ，下方はタタキののちにハケを施す。内面は体部がナデ，口縁部にはハケ残る。174は体部の内面を撫でるが，口縁部の1.5センチほどの下方に稜をもつ。壺を意識したものかもしれない。176はやや横方向のタタキメを持ち，口縁部はタタキののちにハケを施している。178は体部に板材で左上方に掻き揚げ，文様のようにしている。179は弥生



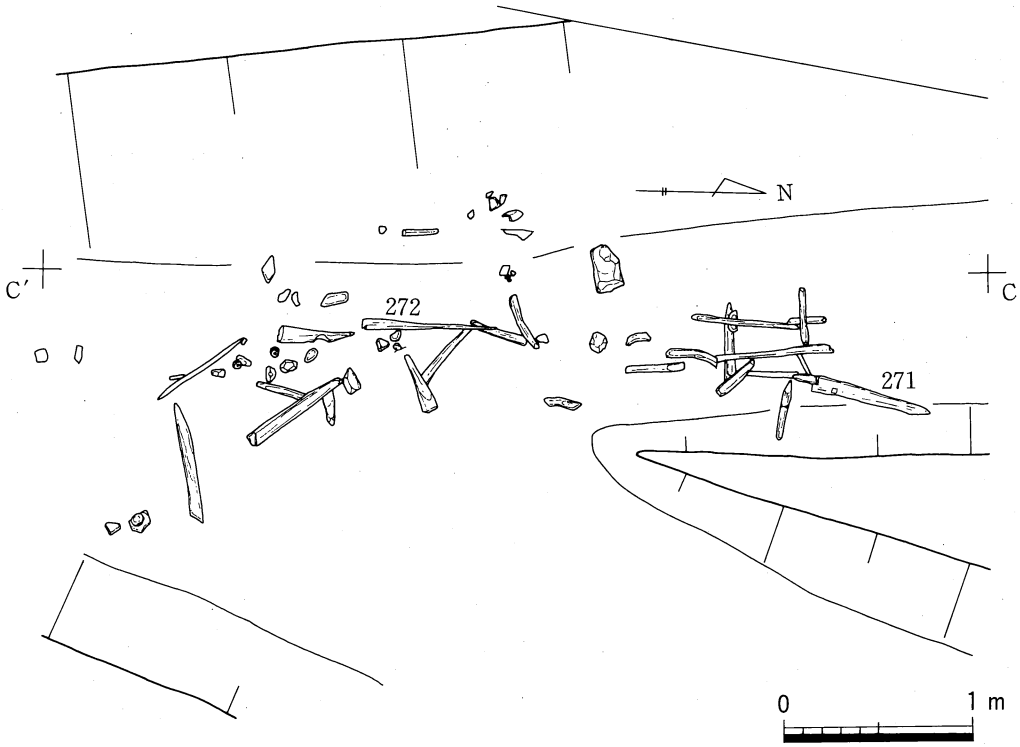
第18図　SD201出土遺物



第19図　SD101，102，201遺物出土状況・土層図測点



第 20 図　SD201 遺物出土状況



第 21 図　SD202 遺物出土状況

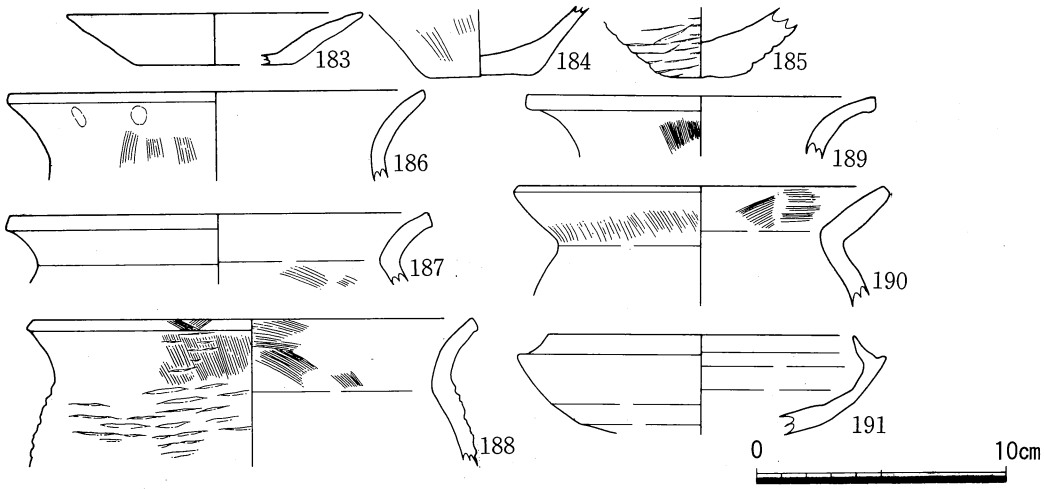
前期末の混入品である。口縁端部に刻目文，体部に押圧凸帯文とその上下にヘラ描沈線文で装飾している。175・177 は壺である。貼付口縁をもち，外面は口縁部に指頭圧，頸部にハケを施す。内面にも指頭圧・ハケが見られる。弥生中期の混入品である。181 は鉢である。内外面とも摩滅が著しいが下方において外面にハケ，内面にナデが認められる。182 は高坏である。坏部が現存するのみであり，直線的に広がる口縁部をもつ。外面の下半はハケ後ヘラミガキ，上半はヘラミガキを施している。内面は上半に調整が残るが，その下半がヘラミガキ，上半は撫でており丁寧に仕上げる。

SD202（第 20・22・34 図）

1 区東端にみられる浅い溝状遺構である。1 区北東端から現れて南流し，SD201 と合流する。北端部に近づくほど削平されており，北端部では深さ 2～3 センチ程度現存するのみである。一方，SD201 付近では削平を受けているものの保存状態も良好で，自然木や木製品の出土もみられる。

183 は土師器小皿であり混入品である。摩滅が著しいものの底部には回転糸切り痕が観察できる。184・185 は底部である。両者とも摩滅が著しいが，184 は外面にハケが，185 は外面にタタキが見られる。186・189 は壺である。口縁部外面にハケを施す。187・188・190 は甕である。188 は体部外面に横方向のタタキメが見られる。口縁部の調整は内外面ともハケである。191 は 5 世紀後半の須恵器・坏身であり，混入品である。

271・272 は板目材を用いた有孔板材である。何らかの部材ではあろう。272 は孔に桜と見られる樹皮が通してあり，また，樹皮が当たっていたであろう箇所にはその痕跡が見られる。



第 22 図　SD202 出土遺物（土器）

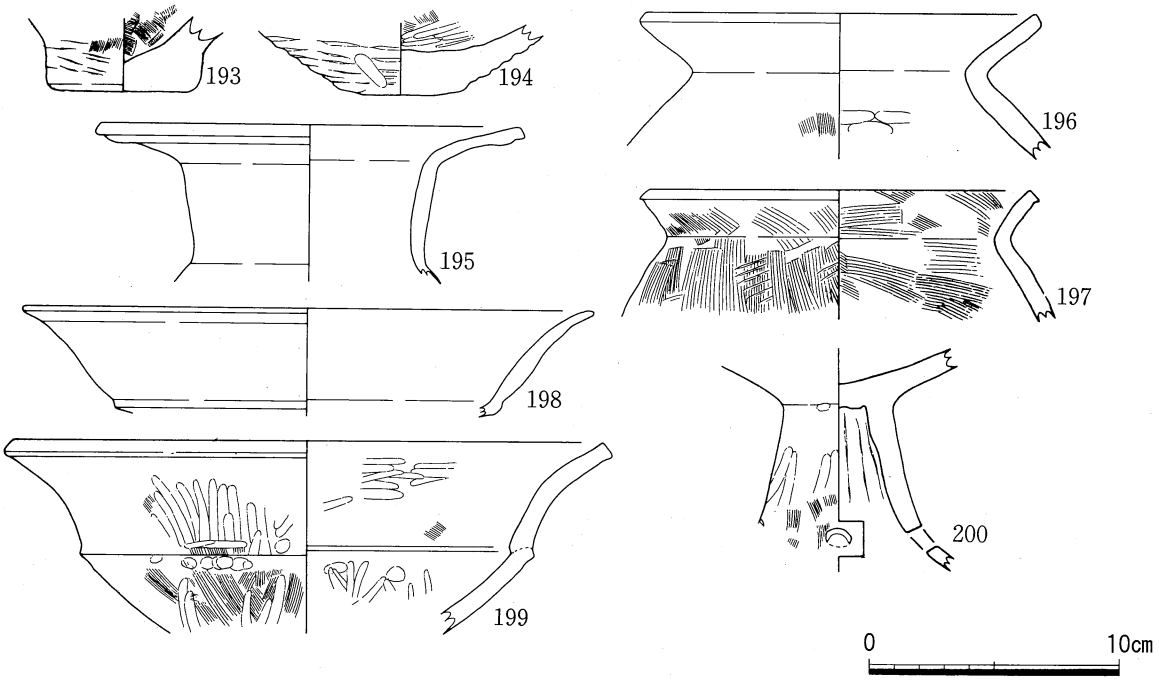
古墳時代前期の遺構と遺物

SX201（第23～25・27図）

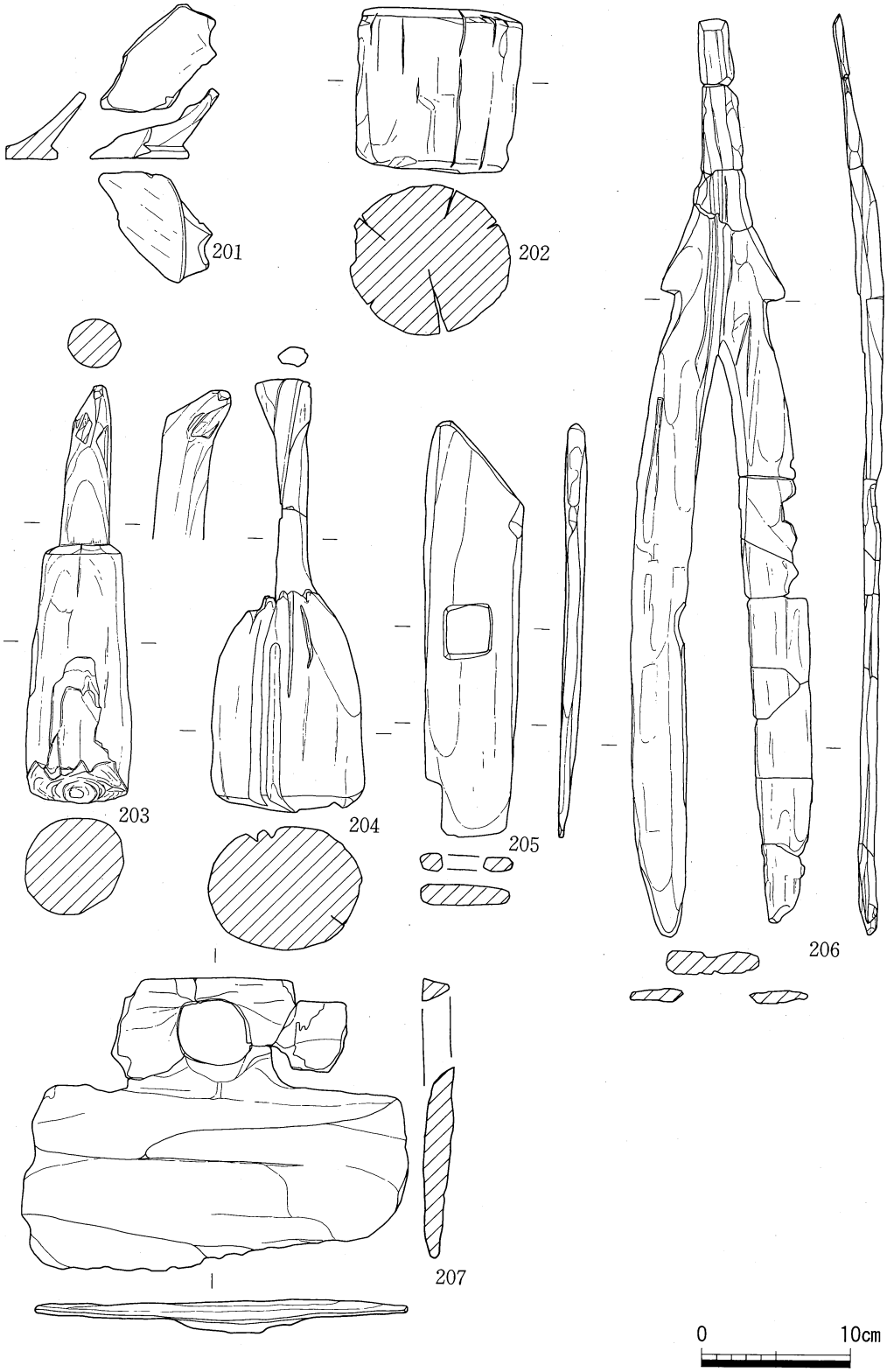
3区西南端に存在する遺構であり，SR201とSR202に周囲を囲まれている。明確なプランを持つわけではないが、枝を払った丸木や加工材を杭や人頭大の角礫で固定してあったり，またSX301に伴うと見られる，SR201から延び、この横で消滅する溝状遺構（SD203）などから何らかの作業場であったと考えている。SR201からこのSD303に水を引いたのであろう。Ⅵ層を床面とする。

193・194は底部である。両者とも外面にタタキ・内面にハケ調整を行う。ともに平底ではあるが，193はしっかりした底部を作り，194は丸底を凹ましたような底部である。195は壺である。直線的に立ち上がる頸部から大きく広がる口縁部を作り出す。196・197は甕である。197は斜め方向のタタキのあとハケを施す。198～200は高坏・坏部である。198はやや膨らみながら外反する口縁部をもつ。199は大きく外反する口縁部をもち，外面の下半はハケ後ヘラミガキ，上半および内面にはヘラミガキを施す。

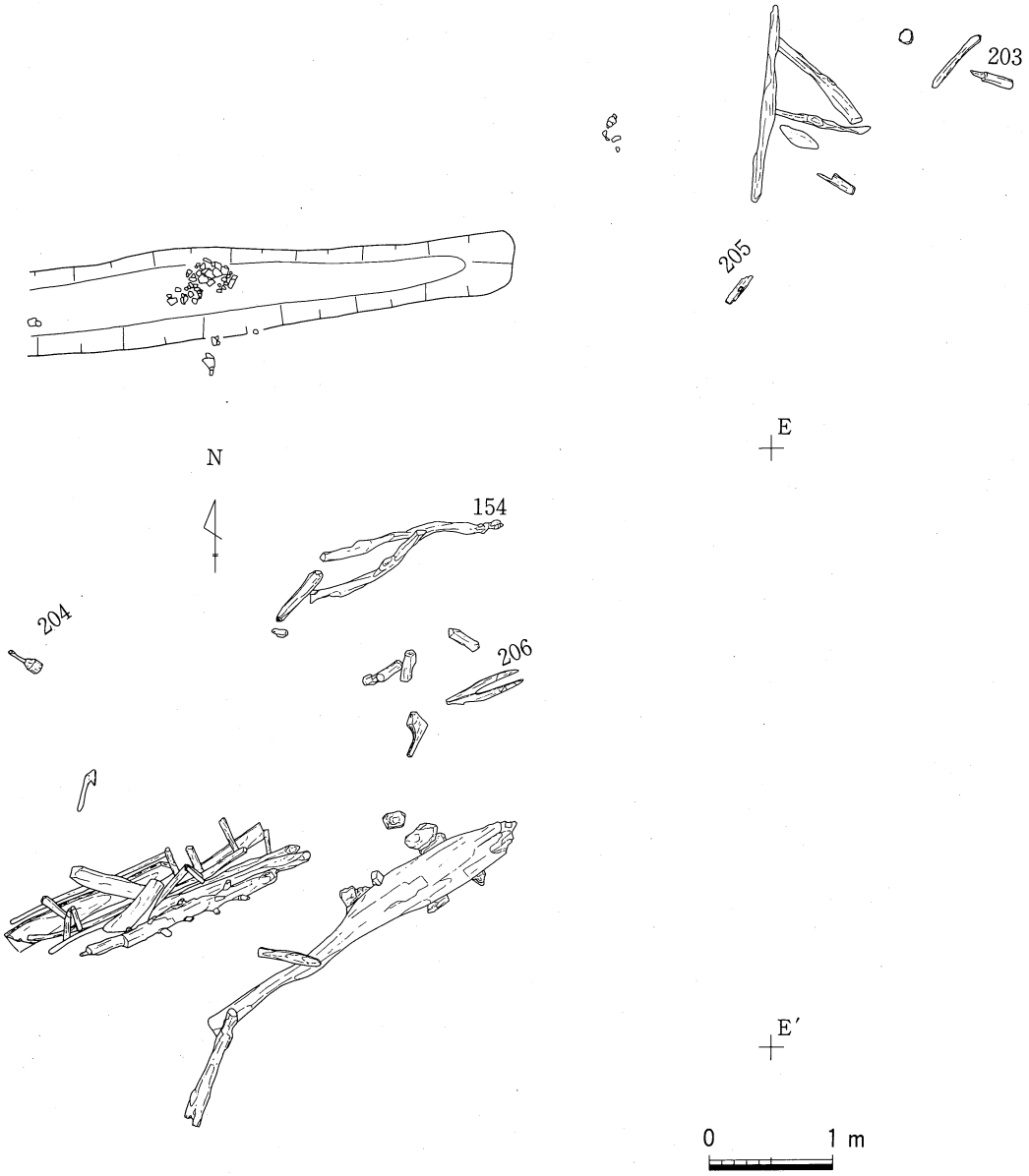
201は木製容器・椀である。どっしりとした底部を作り出している。202～204は横槌である。いずれも丸木材を使用している。204は完存している。205は有孔板材である。板目材を使用する。206は曲柄又鍬である。柾目材を使用するが芯を欠損している。鍬先は2足に分かれる。207は直柄鍬先である。板目材を横に使用する。



第23図　SX201出土遺物（土器）



第 24 図　SX201 出土遺物（木器）



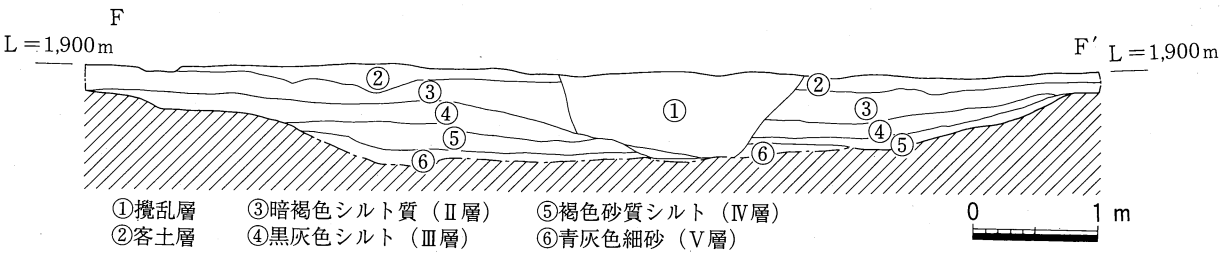
第 25 図　SX201 遺物出土状況

SR202（第26～28・34図）

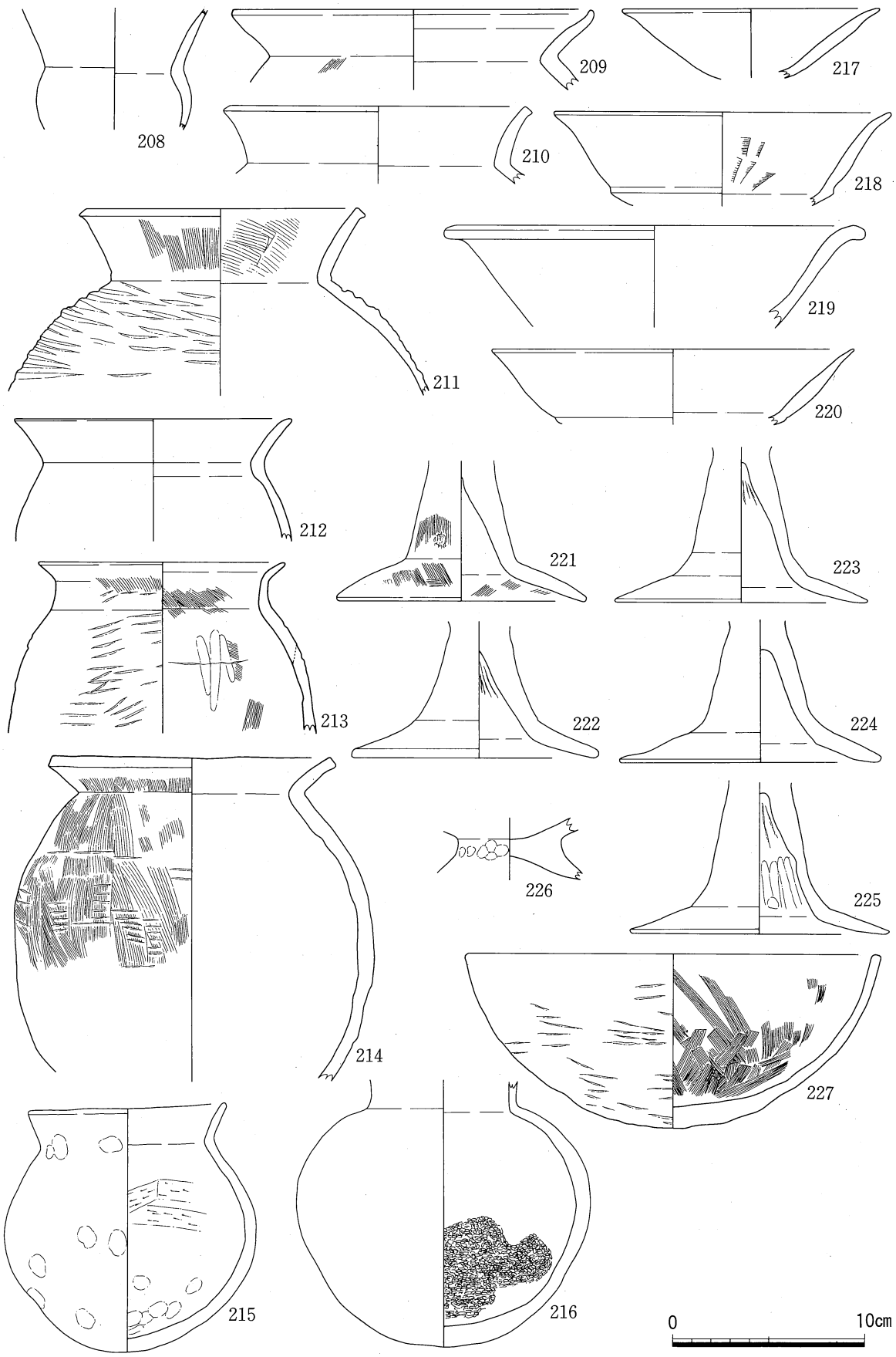
3区東端から3区中央部にのび，そこから約90度向きを変え南流，2区中央やや南よりでSR201に合流し、あたかもSX301を取り巻くように存在する。遺物の出土は網掛けした場所においてのみ確認され，他の場所においての出土はなかった。要所要所を攪乱に切られ，不明な個所は多い。埋土にⅢ層およびⅣ層を持つ。

出土遺物は3区東端付近に集中し、炭化米の残る壺の存在や高坏が多いこと，完形の丸底壺の存在から付近における河川祭祀の可能性を考えたい。

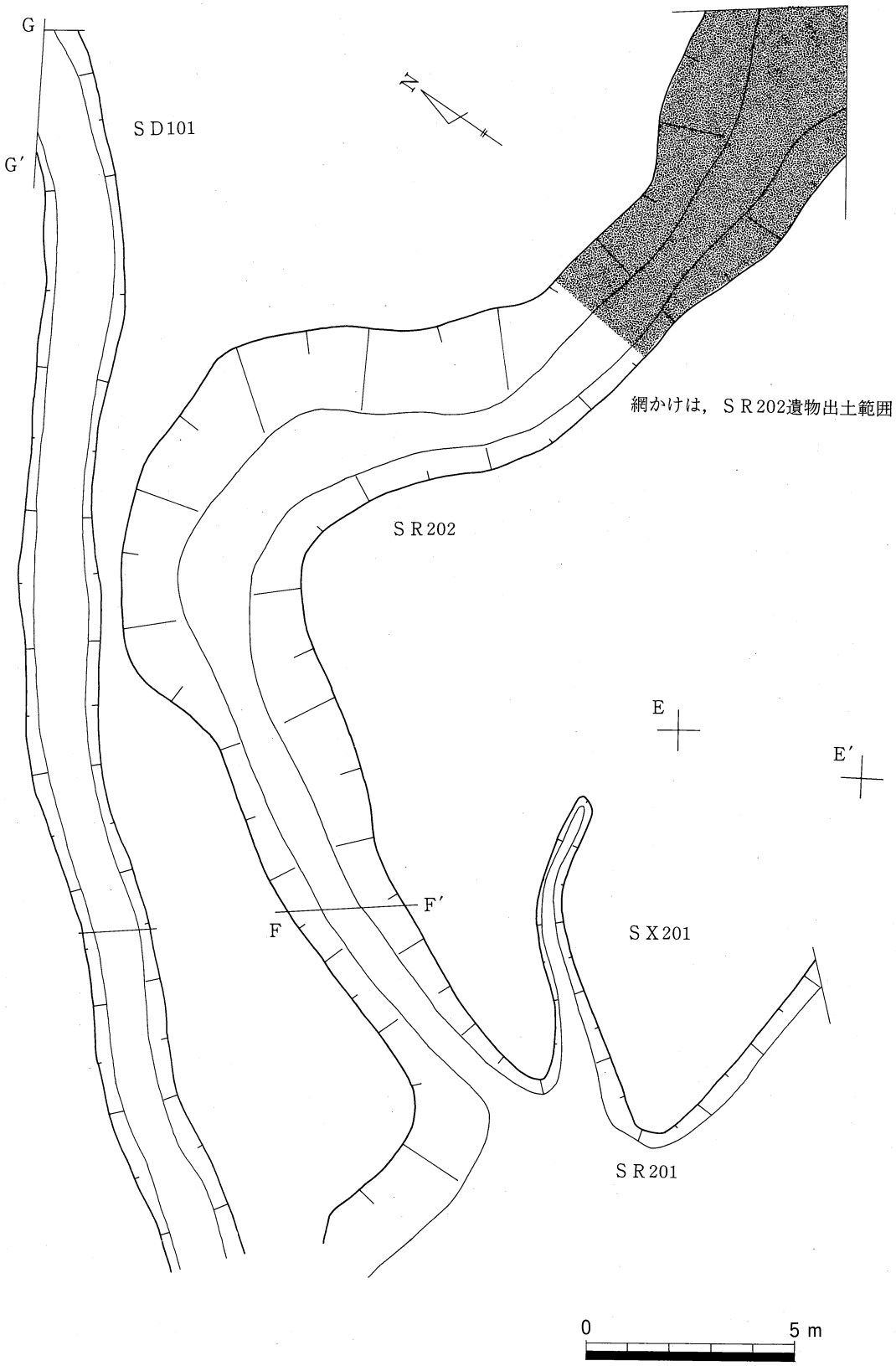
208は小型丸底壺である。209～211は甕である。209は口縁部のない外面にヨコナデを施す。砂質の荒い胎土をもつ。搬入品の可能性がある。211はやや横方向のタタキメを有し，口縁部は内外面ともハケ調整を行う。212・213は壺である。両者ともごく短い頸部を有する広口壺である。213はやや横方向のタタキ，口縁部の両面にハケ，体部内面はナデを施す。214は甕である。体部に横方向のタタキ後ハケ，口縁部の下半にハケ，口縁端部付近にハケを施す。215・216は丸底壺である。このうち215は外面を指頭圧で成形したのち丁寧に撫でている。内面は上半にヘラケズリを行い，下半には指頭圧が残る。216は内外面ともに調整は不明であるが，内面の底に炭化米が付着している。217～225は高坏である。そのうち217～220が坏部，221～225が脚部である。219は混入品である。217・218・220はいずれもやや内湾しながら外方に広がる口縁をもつ。調整は218が内面にハケ調整を行うほかは不明である。221は直線的に下方へ広がり，裾部はやや内湾する。外面と内面の裾部にハケ調整を行い，端部付近はナデを施す。内面の天井部付近に絞り目が残る。222はやや外反しながら下方に広がり，裾部は直線的である。外面はナデを施し，内面には絞り目が残る。223はやや内湾気味に開き，裾部も内湾気味に広がる。内面，外面ともに摩滅のため調整は不明であるが，内面の天井部付近に絞り目が残る。224・225は内湾気味に下方に広がり，裾部は直線的である。224・225ともに外面にヨコナデを施し，224は内面もヨコナデで絞り目もナデ消している。225の内面は縦方向に強いナデを施す。226は脚部である。脚部の付け根に指頭圧痕が残る。227は鉢である。横方向のタタキをもち，内面にはハケを施す。1は柾目材を用いた板材である。芯はもたないが，かなり薄く仕上げ，端部に段を作り出している。2は板目材を用いた板材である。端部付近を「く」の字形に削ってある何かの製品の破損材であろうが，器種は不明である。3は柾目板を用いた有孔板材である。縦方向の中心線に沿って直径7～8㎜程度の孔が現存で7つ穿たれており，田下駄の一部である可能性が高い。4は角材である。



第26図　SR202土層図



第 27 図　SR202 出土遺物（土器）



第28図　SD101，SR202，SX201 平面図・土層図測点

中・近世の遺構と遺物

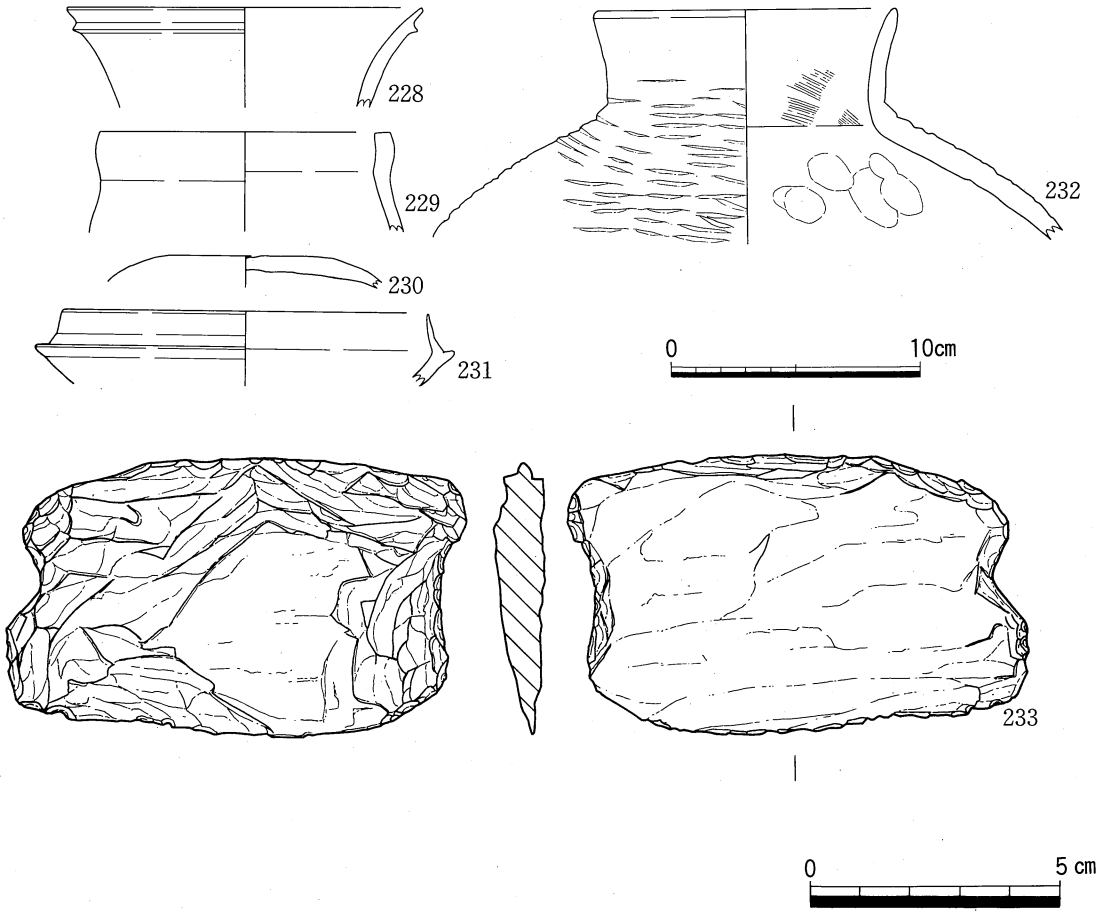
SD101（第29・30図）

SD101は3区東端から調査区北辺に沿って西流し、1区の西端付近で消滅する遺構であるが、自然の流路である可能性もある。ごく浅い溝であり、上層は削平されているものと思われる。

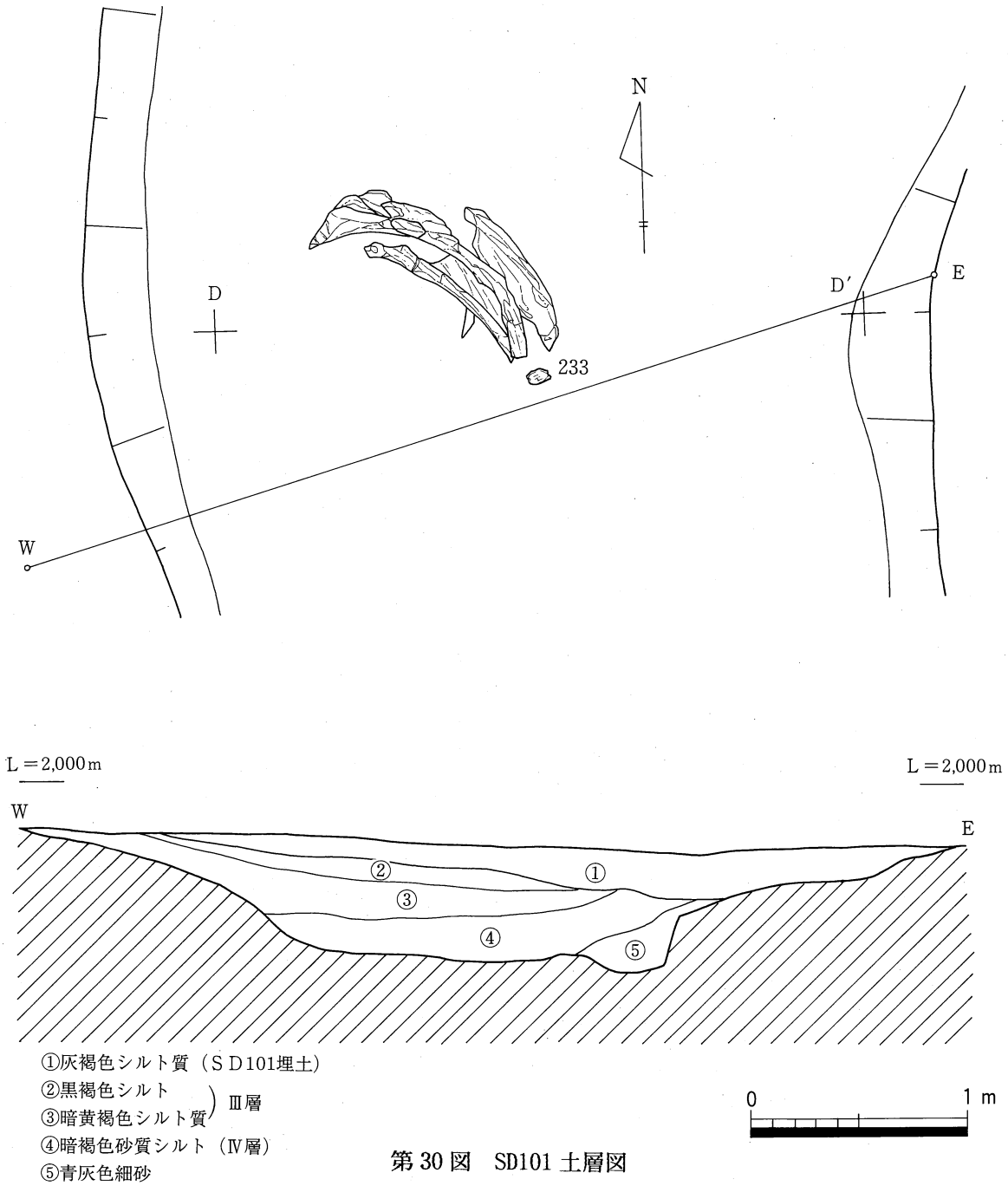
遺物の出土量が少なく，時期を特定するには至らないが，Ⅱ層を埋土とするため，時代幅はあるがこの時期の範疇で考えたい。

ところで，SD101 の下層にⅢ・Ⅳ層が所々は入り込み，同期の遺物がみられることから弥生時代終末期頃にここに小流路が存在した可能性が高い。

228，229は口縁部である。228は口縁下部に凸帯を巡らす。両者とも回転ナデによって仕上げる。230は須恵器・坏蓋である。231は5世紀後半頃の須恵器・坏身である。232は広口壺である。体部および口縁下部に横方向のタタキを施す。内面は口縁下部をハケで仕上げ，体部には指頭圧痕が残る。234 は頁岩製の打製石包丁である。背潰しを行い，両端には抉入が認められる。両面とも使用による摩滅が見られる。230～234は混入品である。



第29図　SD101出土遺物



第 30 図　SD101 土層図

SD102（第 14 図）

2 区の北東端付近に現れ，2 区中央部付近で SD101 と重なるとみられるものが SD202 であるが、上層が削平されていること、両者ともⅡ層を埋土に持つことから切り合い関係の有無は不明である。また、主軸方向から SD104 が SD202 につながる可能性もあるが，1 区の東端は全体的に低くなっている。土層断面においても SD101 との切り合いは認められず，不明といわざるを得ない。

SD202 からの遺物の出土はみられなかったが，SD103 からは頁岩製の磨製扁平片場石斧（112）が出土しているが，混入品である可能性が高い。

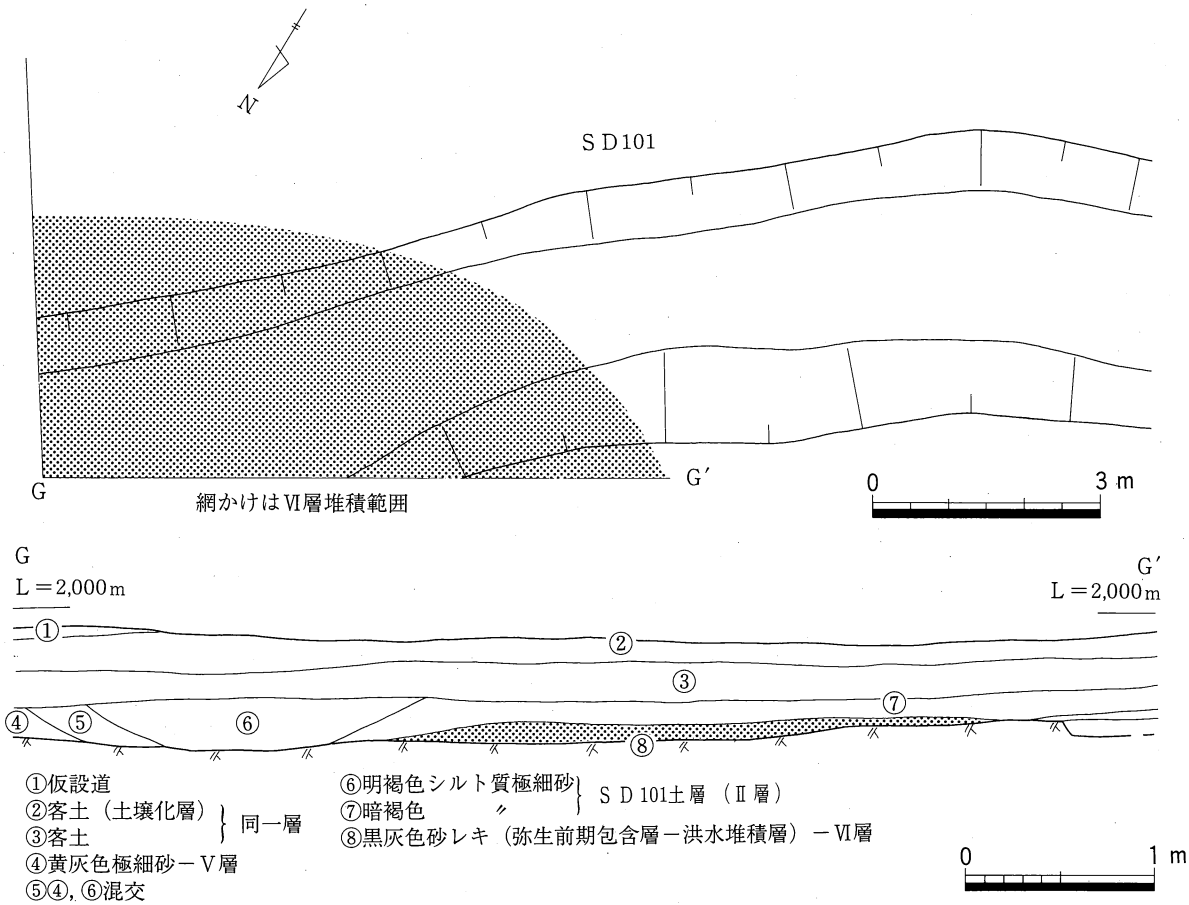
包含層の遺物

Ⅵ層の遺物（第 28・31・32 図）

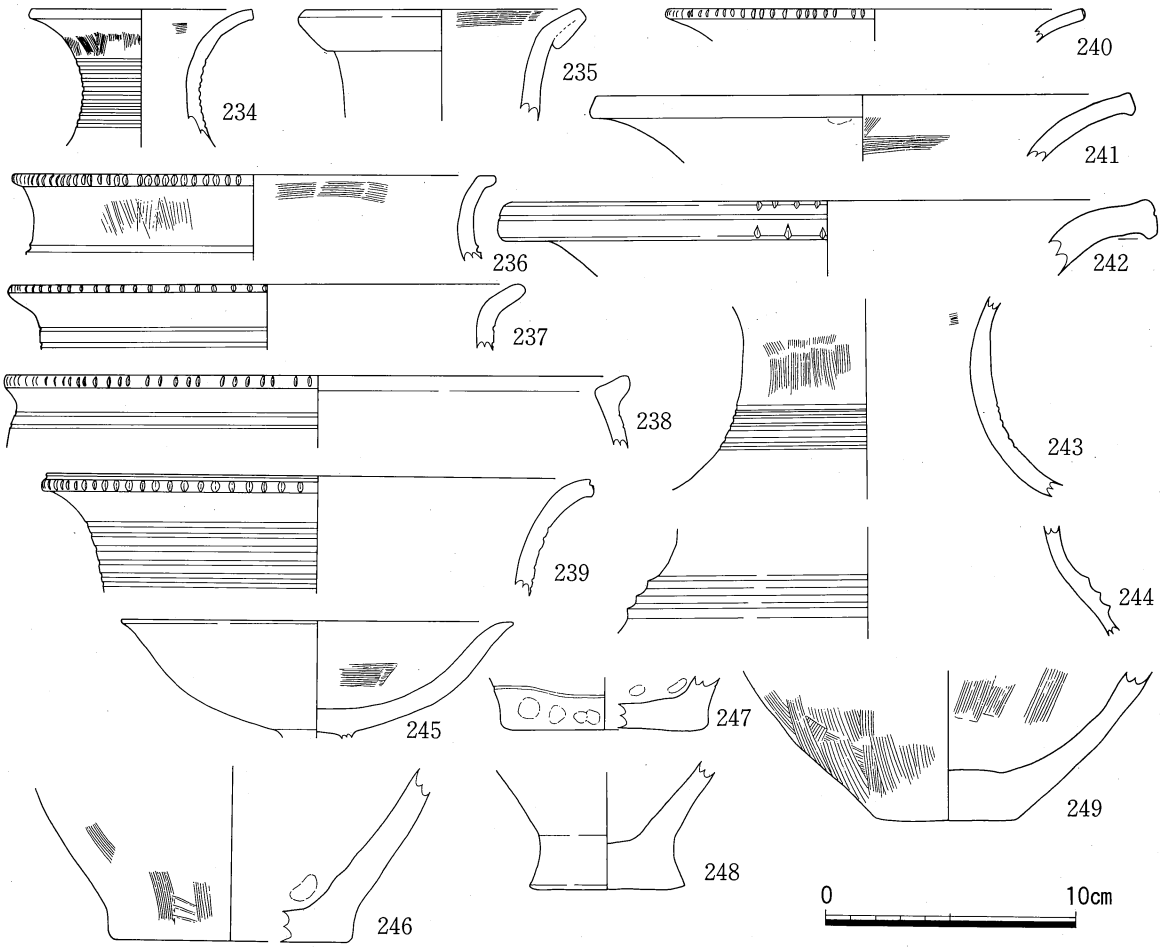
3 区東北端の SD101 下層においてのみ弥生時代前期末の遺物を多く含むが礫層（Ⅵ層）がみられる。弥生時代前期の遺物を含む包含層はここでのみ確認できるものである。Ⅵ層は洪水堆積層であり，本来広く堆積していたものが，後世に削平されたものであると考える。

234 は長頸壺である。大きく外反しながら開く頸部をもちそこに 8 条のヘラ描沈線が巡る。口縁端部付近を内外面ともナデ，口縁下部にハケを施す。235 は弥生中期の壺である。貼付口縁をもち，口縁部内面にはハケメが残る。236・238 は甕である。いずれも口縁端部に刻目文，頸部にヘラ描沈線をもつ。

237・239～244 は壺である。237・239 は口縁端部に刻目文をもち，頸部にヘラ描沈線を巡らす。240 は口縁端部に刻目文を有する。241 は内外面にハケを施し，その後口縁端部周辺を撫でている。242 は口縁端部に上方・下方のそれぞれから刻んで装飾する。243・244 は頸部である。243 は現存 6 条のヘラ描沈線を巡らせ，内外面をハケで調整している。244 は凸帯 3 条をつまみ出している。245 は高坏・坏部である。内面にハケメが残る。246～249 は底部である。246 はしっかりとした底部をもち，外面はタタキの後ハケを施し，内面には指頭圧痕が残る。247 は指頭圧で成形し，沈線を現存で I 条巡らせる。248 は台形の脚部をもつ。249 は内外面ともハケ調整を行う。



第 31 図　Ⅵ層分布範囲・堆積状況

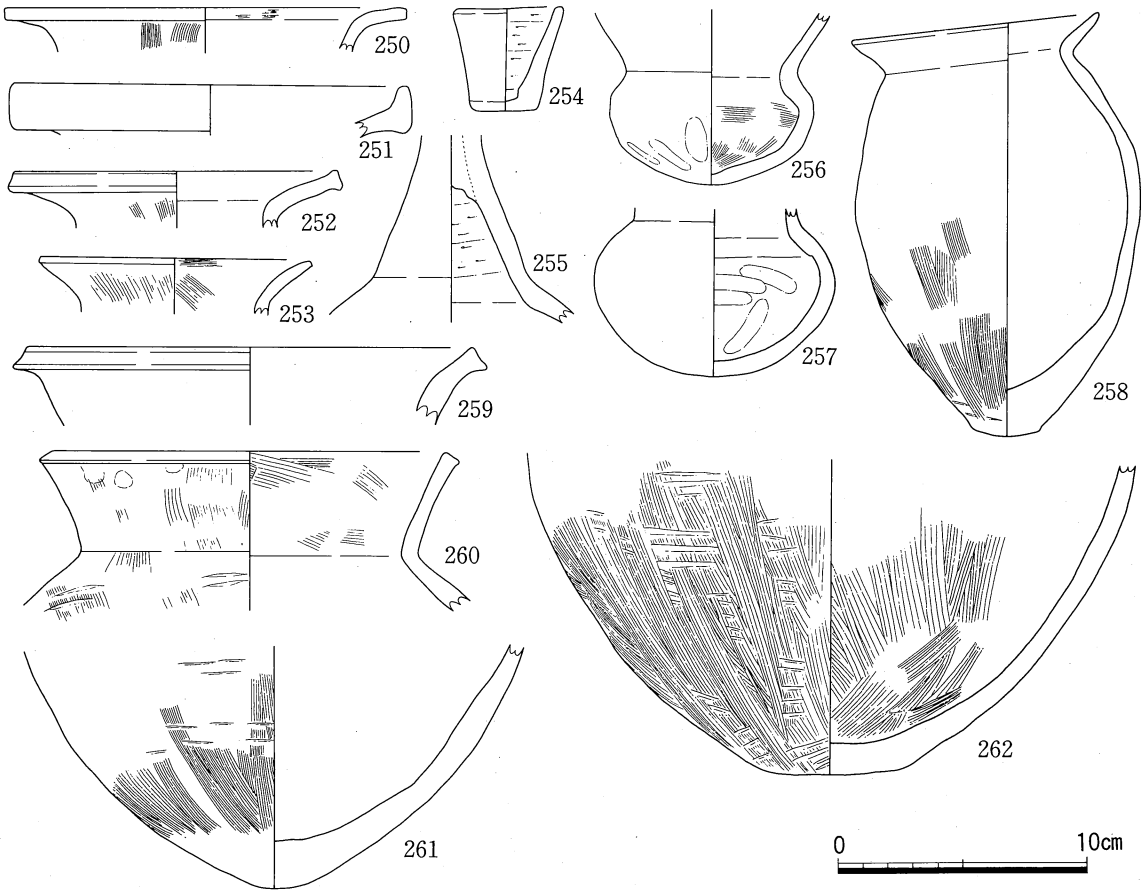

234
235
240
241
236
242
237
238
243
239
244
245
247
249
248
246
0
10cm

第 32 図　　Ⅵ層出土遺物

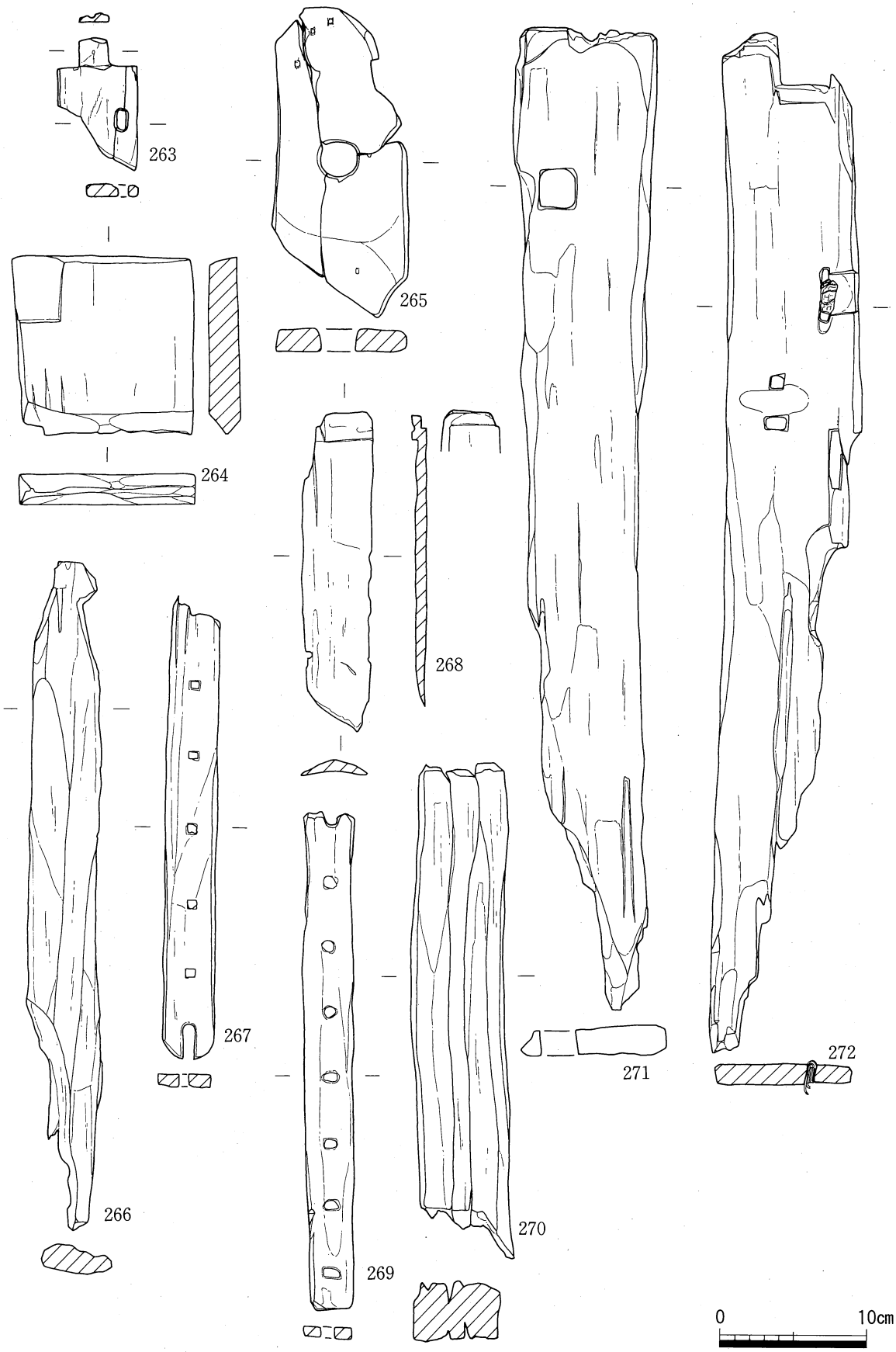
Ⅲ層の遺物（第33・34図）

Ⅲ層は弥生時代終末から古墳時代初頭頃の土器に加え，須恵器等を含む包含層である。基本層序の項でも述べたが，前年度調査のⅨ層である可能性が高い。

251～253は壺である。252は摩滅のため調整は不明であるが，それ以外はいずれもハケ調整を行っている。254は内面ヘラケズリを行う小型の鉢である。255は高坏に脚部である。内湾気味に広がり，裾部は直線的である。外面の調整は摩滅のため不明，内面はナデを施す。256・257は小型丸底壺である。256は外面ナデで成形し，内面はハケ調整を行う。257の外面は摩滅のため不明であるが，内面は撫でている。口縁部を欠損するが，破損のしかたから，欠損後も使用されていた可能性がある。258～260は甕である。258は摩滅が著しいが，外面下方にハケメを確認できる。口縁部を欠損している。259は摩滅により調整は不明であるが，口縁端部に退化凹線が見られる。260は体部にタタキのあとハケ，口縁部の内外面にはハケを施す。261・262は底部である。両者とも外面はタタキのあとハケを施す。262は内面にもハケメを観察できる。263は板目板材である。凸部を作り出し，孔を穿つ。265は板目板の有孔板である。264は板目板材である。先端を削り尖らしている。263～265はいずれも用途は不明である。267は269と同様，田下駄の一部かもしれない。縦の中心線上に6～7㎜程度の方形の孔を現存で5つ穿ち，端部には「U」字形の切り込みを入れる。



第33図　Ⅲ層出土遺物（土器）

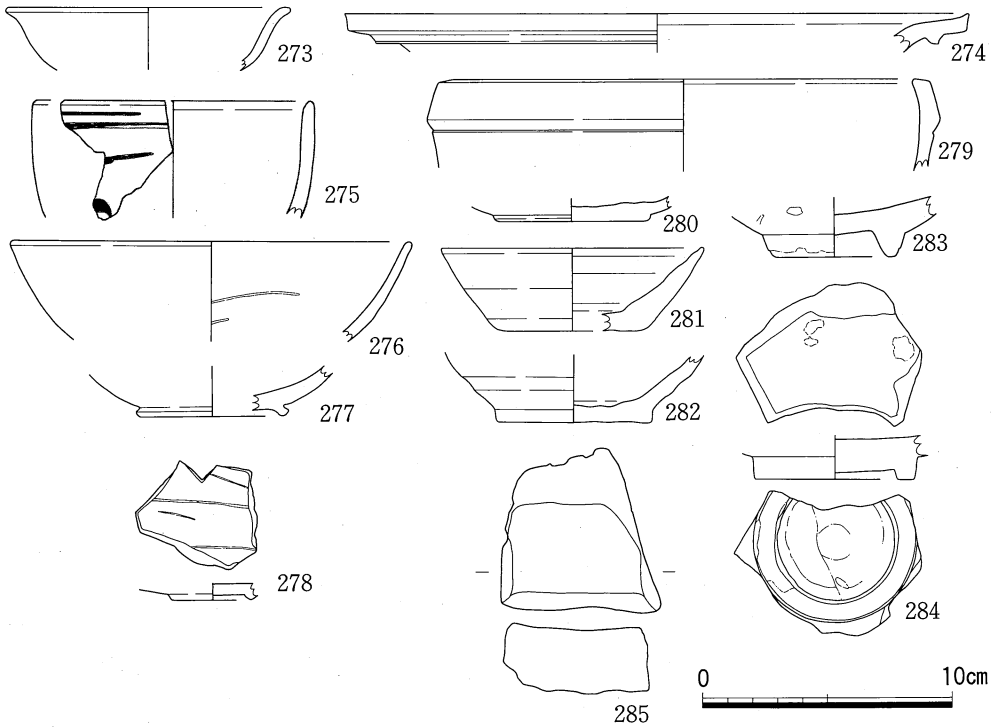


第34図　Ⅲ層，SR202，SD202出土遺物（木器）

Ⅱ層の遺物（第35図）

Ⅱ層は中から近世にかけての包含層である。前年度のⅣ層中に瓦器碗の出土が見られることからこの層が今年度のⅡ層に当たると思われる。しかし，前年度のⅣ層は古代の遺物が見られるのみである。

273は17世紀頃の肥前系磁器である。外反しながら広がる口縁をもつ。274は須恵器・壺の口縁である。5世紀後半頃の所産であり，Ⅲ層からの混入である。275は肥前焼き染付・坏である。下方の染付文様は唐草模様であると思われる。276・278は瓦器碗である。276は内面に暗文を描く。278は底部である。278は底部のみの破片であるが，見込みにヘラミガキが残る。13世紀後半～14世紀初頭頃のものであろう。いずれも和泉型であり搬入品である。277は土師器・碗の底部である。体部や，高台の形態から12世紀前半頃のものであろう。279は14世紀頃の瓦質土器・釜もしくは火舎である。口縁下部に小さな鍔をもち，内外面および口縁端部に摩滅が著しいが回転ナデを観察することができる。280～282は土師器・坏である。280は形骸化した円盤状高台をもつ。いずれも摩滅が著しいが，底部に回転糸切りを行う11世紀初頭頃の時期を与えられよう。283は陶器の底部である。外面に釉がかかり，内面には重ね焼きの痕跡が残る。2次焼成を受けた可能性があり，赤色を呈する。断面逆台形の高台を削り出している。唐津焼きの可能性がある。唐津焼きならば18世紀頃の所産である。284は唐津焼き・底部である。断面逆台形の高台を削り出す。内面には砂目積みの痕跡が残る。285は布目瓦である。内面に指頭圧と布目が，外面には布目が残る。



第35図　Ⅱ層出土遺物

第2節　４区の調査（第36・37図）

１・２区の西側部分は、７年度の試掘時には未調査であったため、念のために今回の調査に平行して確認を行った。それが４区である。その結果、若干の遺構及び遺物が確認できた。

調査区全体に数ヶ所の溝状の遺構や土坑状の窪みが見られたものの、いずれも自然のものである可能性が高い。唯一、人工のものと考えられるのは調査区南端付近で検出された配石である。遺物を伴っていないために時期の決定は難しいが、比較的浅い位置で検出されたことや、付近の包含層からの出土遺物に古代以降のものが一定量含まれていることから、比較的新しい時期のものである可能性も否定できない。配石は上面のレベルをほぼ揃えて配置され、面取りの加工をしてある。配石の間には杭が４本残存していた。東西幅約８０㎝、南北幅約１ｍを測る。その配置から、何らかの水利施設の一部と考えられる。

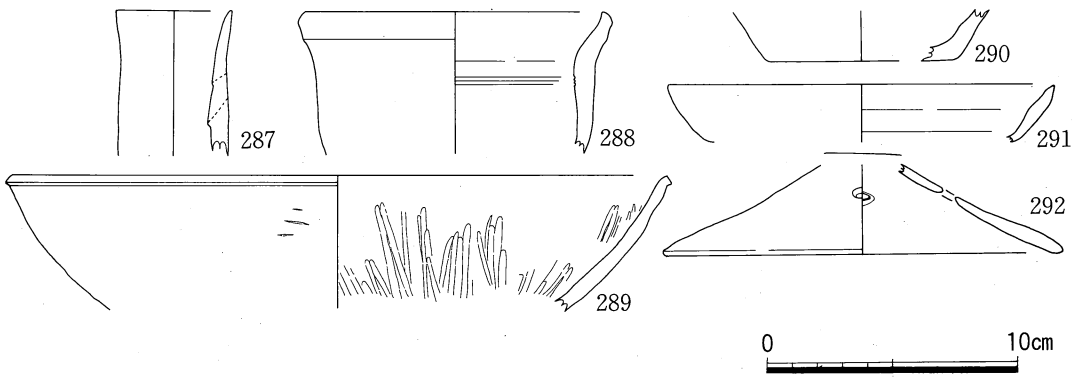
遺物は何れも遺構からの出土ではなく、表面はかなり摩耗している。

弥生時代終末期～古墳時代初頭

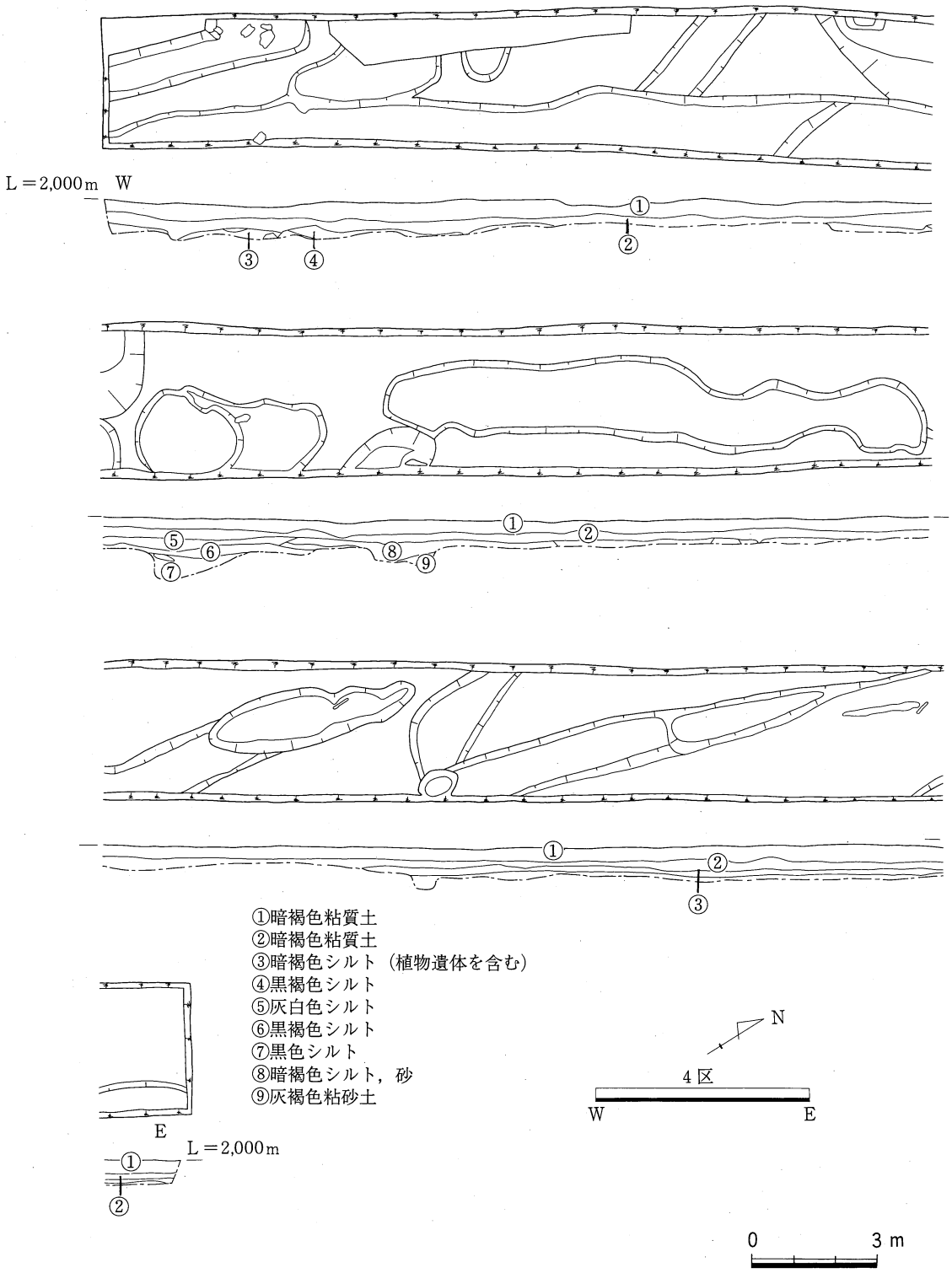
287の長頸壺、289の鉢である。289は内面にヘラミガキが比較的明瞭に残っている。

古代以降

291は土師器の皿で調整は不明である。288は瓦質土器で、やや口径は小さいものの鍋と思われる。乙字状の断面で口縁端部を内側に若干つまみ出している。内面はハケ状の器具で横方向に調整、外面の口縁部にも同様の調整が残る。290は土師質の坏で、成形には回転台を使用、調整は不明である。



第36図　４区出土遺物



第37図　4区平面・土層図

遺　物　観　察　表

遺物観察表

SR201出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
1	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部のみ欠損	11.2	28.8
2	2区	古墳前期	壺	頸部　1/2	12.2	10.0
3	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	13.2	16.5
4	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部1/2		
5	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	ほぼ完形	13.3	21.6
6	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	頸～体部 1/4		18.1
7	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	ほぼ完形	10.4	22.3
8	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～底部1/2	15.4	24.5
9	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	体～底部 1/2		
10	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部　1/8	15.6	4.4
12	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/6	14.0	4.8
13	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/8	15.2	2.9
14	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/4	5.8	2.5
15	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部　1/4	9.8	8.5
16	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/4	11.8	6.7
17	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/4	11.8	6.8
18	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部 1/6	14.8	5.6
19	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/6	17.0	4.3
20	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/3	18.4	8.3
22	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/4	14.8	9.5
23	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部　1/3	13.8	8.3
24	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/6	19.2	4.2
25	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/8	12.6	4.5
26	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/8	14.8	2.7
27	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 3/4	15.4	10.5
28	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/3	17.6	9.8
29	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部 1/8	17.4	3.1
30	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/8	18.2	4.0
31	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部　1/4	15.4	8.6
31	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部～体部 1/3	19.6	10.2
32	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部　1/6	15.0	6.8
33	2区	弥生中期末	甕	口縁部　1/10	22.2	4.0
34	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/2	12.4	8.2
35	2区	古墳前期	甕	口縁部 1/4	13.8	4.6
36	2区	弥生終末	壺	口縁部　1/4	14.0	5.5
37	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/6	14.4	3.8
38	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/8	16.4	3.2
39	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部　1/5	12.2	7.4
40	2区	古墳前期	甕	口縁～体部　1/3	15.8	6.7
41	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/2	17.8	8.4
42	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/2	14.8	8.5
43	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部　1/4	25.4	9.1
44	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～頸部 1/3	14.4	4.8
45	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/8	15.8	3.0
46	2区	古墳初頭	甕	口縁～体部　1/3	14.3	6.0
47	2区	古墳前期	甕	口縁～体部 1/4	15.8	8.1
48	2区	古墳前期	甕	口縁～体部 1/4	20.6	6.4
49	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～底部 2/3	16.8	14.6
50	2区	古墳前期	壺	口縁～体部　1/3	8.4	6.1
51	2区		壺	口縁部　1/4	10.2	3.0
52	2区		壺	口縁～頸部	10.8	3.9
53	2区	弥生中期	甕	口縁部 1/4	10.4	

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
ナデ・タタキのちハケ／ハケ・ナデ・指頭圧	黄白色／黄色		1
ハケ／ハケ	灰褐色／黄灰色		2
タタキ後ハケ／ハケ	黄灰色／黒灰色		3
タタキ・ハケ／ハケ	黄灰褐色／灰褐色		4
タタキ／ハケ	黒色／褐灰色		5
タタキ後ハケ／ハケ・指頭圧	赤橙色／明褐灰色	内面につなぎ目	6
タタキ／ハケ	明赤橙色／灰褐色		7
タタキ／ハケ	明赤橙色／灰褐色		8
タタキのちハケ／ハケ	灰白色／黒灰色		9
指頭圧／指頭圧・ハケ	褐灰色／黄灰褐色		10
ハケ・タタキ／ハケ・ナデ	黒色／灰褐色		12
不明／ハケ	灰白色／明黄褐色		13
タタキ／ハケ	灰褐色／明灰褐色		14
ハケ・タタキ／ハケ	明黄灰褐色／灰黄色	内面につなぎ目が顕著に残る	15
ハケ・タタキ／ハケ・ハケ後ナデ	黄灰色／明黄褐色		16
タタキ後ナデ／ハケ・ナデ	黒色／灰褐色		17
ハケ・タタキ／ハケ	灰褐色／黄灰褐色		18
ハケ／ハケ	黄灰色／黄灰色		19
タタキ／ハケ・指頭圧	灰黄色／黄灰色		20
タタキ／ハケ・ナデ	黒色／黄褐色		22
タタキ後ナデ／ハケ	黒色／黄灰色		23
タタキ後ハケ・タタキ／ハケ	黒色／黄橙色		24
タタキ／ハケ	黒色／明褐色		25
ハケ／ハケ	灰褐色／橙色		26
タタキ／ハケ	灰褐色／灰褐色		27
タタキ・ナデ／ハケ・ナデ	褐色／明黄褐色		28
タタキのちハケ／ハケ	黄灰白色／褐灰色		29
ハケ・タタキ／ハケ	黒色／明褐色		30
タタキ後ナデ・タタキ／ハケ	黄灰色／暗褐色		31
タタキ後ハケ／ハケ	黒色／褐色		31
タタキ後ハケ／ハケ	黒色／黄灰色		32
不明／不明	黒色／黄褐色		33
タタキ／ナデ・指頭圧	黄灰白色／明褐色		34
ハケ／ハケ	黒色／灰褐色		35
ナデ・ハケ／ハケ	明黄橙色／黄灰褐色		36
タタキ／ハケ	黒色／明黄褐色		37
ハケ／ハケ	黄灰色／灰褐色		38
タタキ後ナデ・タタキ／ハケ	黒色／暗黄灰色		39
ナデ・ハケ／ナデ・ハケ	黒色／灰褐色	内面につなぎ目が残る	40
タタキ／ハケ	黄灰色／黄灰褐色		41
ナデ・ハケ・タタキ／ハケ・ナデ	明黄褐色／灰褐色		42
タタキ・ナデ／ハケ・指頭圧	明赤褐色／暗黄灰色		43
ハケ・タタキ／ハケ	赤橙色／赤橙色		44
タタキ／ハケ	黒色／明褐色		45
ナデ／ナデ	灰褐色／灰褐色		46
ナデ・ハケ／ハケ・ナデ	褐色／黄灰褐色	つなぎ目をナデ消す	47
ハケ／ハケ	黒色／灰褐色	外面に吹きこぼれ?	48
ハケ／ハケ・ナデ	灰白色／明褐色		49
ハケ／	赤橙白色／黄灰白色		50
ハケ／ハケ	黄灰色／黄灰色		51
不明／不明	赤橙白色／明灰褐色	内面につなぎ目が顕著に残る	52
刻目文・指頭圧・ハケ／ハケ・ナデ	明赤橙色／黄灰白色		53

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
54	2区	古墳前期	小型丸底壺	口縁～底部 1/2	9.8	8.3
55	2区	古墳前期	小型丸底壺	頸部～底部 1/2		7.5
56	2区	弥生中期	壺	口縁部　1/8	17.2	2.3
57	2区	古墳初頭	壺		11.8	5.9
58	2区		壺	口縁～体部　1/3	11.4	7.3
59	2区	古墳前期	壺	口縁～頸部ほぼ完存	14.7	6.3
60	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/4	16.2	7.3
61	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	14.8	11.7
62	2区		壺	口縁部 1/6	9.8	2.7
64	2区	弥生後期	甕（壺?）	口縁部　1/8	14.8	2.0
65	2区	弥生中期	壺	口縁部 1/6	12.6	2.4
66	2区	弥生中期末	壺	口縁部　1/6	14.8	3.5
67	2区	古墳前期	壺	口縁部　1/4	11.8	4.3
68	2区	弥生中期?	壺	口縁～頸部 1/10	8.3	4.8
69	2区	弥生後期末	壺	口縁～頸部 1/2	13.8	4.7
70	2区	古墳前期	壺	口縁～頸部	13.8	5.7
71	2区	古墳初頭	壺	口縁部　1/6	21.0	4.7
72	2区	弥生中期	甕	口縁部1/12	18.4	1.7
73	2区	弥生中期	壺	口縁部　1/5	21.6	2.7
74	2区	弥生中期	壺	口縁部1/6	22.6	1.8
75	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/4	15.4	8.3
76	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～頸部 1/4	13.6	4.5
77	2区	古墳初頭	手捏ね	完形品	7.9	4.6
78	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 1/2	14.8	6.8
79	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～体部 1/8	17.8	5.3
81	2区	古墳前期	鉢	口縁～底部 4/5	11.0	6.9
82	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 1/2	2.4	7.0
84	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 1/2	13.6	6.7
85	2区	古墳前期	鉢	口縁～底部 2/3	13.2	6.6
86	1区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～体部 1/4	18.4	7.1
87	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～体部 1/8	19.4	7.5
88	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～体部　1/4	23.0	6.4
89	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	ほぼ完形	18.6	8.0
90	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	ほぼ完形	16.6	8.1
91	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 3/4	15.2	8
92	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	ほぼ完形	3.4	8.4
93	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 2/3	16.6	8.0
94	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	2.6	2.0
95	2区		底部	底部ほぼ完存	2.8	3.0
96	2区	古墳前期	無頸壺	口縁～底部 1/2	7.4	6.5
97	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	2.7	2.3
98	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部ほぼ完存	2.4	6.1
99	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部ほぼ完存		6.6
100	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	4.7	6.1
101	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部 3/4	3.2	5.2
102	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部ほぼ完存	2.0	3.7
103	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部　1/2	1.8	5.8
104	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	3.6	6.9
105	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	3.9	7.8
106	2区	古墳前期	底部	底部のみ完存	6.5	2.0
107	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存		5.5
108	2区	古墳前期	底部	底部のみ完存	4.0	5.7
109	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	2.0	9.8
110	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	3.6	6.1
111	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存		8.7
112	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	2.8	7.9

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
ナデ／ハケ・ナデ	灰褐色／灰褐色		54
ハケ・ナデ／指頭圧	灰褐色／灰黄色		55
綾杉文・ハケ・指頭圧・ナデ／ハケ	灰褐色／灰褐色		56
ハケ／不明	暗褐色／橙白色		57
不明／不明	黄橙色／暗黄灰色	内面に接合痕が顕著に見られる	58
ナデ・ハケ／ハケ	黄白色／明黄褐色		59
タタキ後ハケ・タタキ／ ハケ・ナデ	明赤褐色／灰褐色		60
タタキ後ハケ／ハケ	明灰褐色／明黄灰色		61
ハケ・櫛描き沈線／ハケ	黄灰色／黄灰色		62
不明／不明	明灰色／暗黄灰色		64
指頭圧・ハケ／ハケ	黒色／黄灰褐色	貼付口縁	65
退化凹線 (ナデ)	明赤褐色／明赤褐色		66
(ナデ／ナデ)	明黄褐色／明黄褐色		67
ナデ・指頭圧のちハケ／ナデ・ハケ	黒色／灰褐色		68
ハケ／ハケ	黄灰白色／黄灰褐色		69
ハケ／ハケ	黄灰色／灰褐色		70
ハケ／不明	黄灰色／黄灰色		71
竹管文／ハケ・ナデ	赤灰白色／橙色		72
沈線文・ナデ／ナデ	褐色／褐色		73
波状文・ナデ／ナデ	灰褐色／橙色		74
タタキ／ハケ	黒色／黄灰色		75
タタキ／不明	赤褐色／赤褐色		76
指頭圧／指頭圧	黄灰色／黄灰色		77
タタキ／不明	赤橙色／明赤橙色		78
ナデ・ハケ・タタキ／ヘラミガキ	黄灰褐色／明灰褐色		79
指頭圧／ハケ・ナデ	黄灰白色／灰黄色		81
ナデ／ハケ	黄灰色／灰黄色		82
成形・文様・調整(外面／内面)	黄灰褐色／明褐色		84
ハケ／ハケ	明灰色／黄灰色		85
タタキ後ハケ／不明	黄灰色／赤橙色		86
ナデ・ハケ／ハケ	赤橙色／黄灰色		87
ナデ・タタキ／ハケ	黄灰色／灰褐色		88
タタキ／ハケ	赤褐色／黄灰褐色		89
タタキ／ハケ	赤橙色／褐色		90
タタキ／ハケ	黄灰白色／褐色		91
タタキ／ハケ	明黄灰褐色／赤橙色		92
ナデ／ハケ	黄灰褐色／灰褐色		93
タタキ／ハケ	黄灰褐色／褐色		94
ハケ／指頭圧。ナデ	灰褐色／ 明黄灰褐色		95
ハケ／ハケ・ナデ	明赤灰色／黄灰色		96
タタキ／指頭圧・ナデ	赤褐色／黄灰色		97
タタキ／ハケ・ナデ	灰褐色／明黄赤褐色		98
タタキ／ハケ後ナデ	黄灰白色／灰白色		99
指頭圧／指頭圧	黄灰色／灰褐色		100
タタキ後ハケ／	暗褐色／褐色		101
タタキ／不明	灰褐色／明黄橙色		102
タタキ後ナデ／ハケ	赤灰褐色／黒灰色		103
タタキ／ナデ	黒色／明褐色		104
タタキ／ナデ	灰褐色／黒灰色	底部にタタキ	105
ハケ／ナデ	黄灰白色／赤灰白色		106
タタキ／ハケ・ナデ	黄白色／明橙白色		107
ハケ／ミガキ	赤色／明灰褐色		108
タタキのちハケ／ナデ	暗褐色／黄褐色		109
タタキ／ハケ・指頭圧	暗赤褐色／赤橙色		110
タタキ／ナデ・指頭圧	黄灰白色／黄褐白色	底部中央に穿孔	111
タタキ後ハケ／ハケ	暗褐色／黄灰褐色		112

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
113	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	底部のみ完存	3.8	8.0
114	2区		甕	底部のみ完存		8.4
115	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存		9.8
116	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	底部　1/2	5.4	11.2
117	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存		13.3
118	2区	弥生終末	高坏	坏部のみ完存	18.6	7.5
119	2区	弥生後期	高坏	脚部　1/4	17.1	5.1
120	2区	古墳前期	器台	脚部 1/6	12.2	5.5
121	2区	古墳前期	高坏	坏部 1/16	21.8	4.5
122	2区	古墳前期	高坏	坏部 I /8	27.6	3.4
123	2区	古墳前期	高坏	坏部 1/8	27.4	3.6
124	2区	弥生後期	高坏	口縁部 1/12	29.4	5.1
125	2区	弥生後期	高杯	脚部のみ完存	13.2	9.8
126	2区	弥生後期	高坏	脚部ほぼ完存	11.0	8.2
127	2区	古墳前期	脚部	脚部のみ完存	10.2	4.9
128	2区	弥生後期	高坏	脚部 2/3		8.8
129	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～頸部 1/6	10.4	4.6
130	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部 1/3	16.2	4.8
131	2区	弥生中期	甕	口縁～頸部	14.6	4.2
132	2区	弥生後期	甕	口縁～体部1/4	15.4	6.6
133	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/3	16.8	9.5
134	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/3	14.8	11.8
135	2区	古墳前期	壺	頸～底部 4/5	7.6	14.6
137	2区		手捏ね	底部のみ完存	4.0	2.6
138	2区	古墳前期	底部	底部 のみ完存	3.6	5.0
139	2区		壺	口縁～底部 1/2	6.8	6.3
139	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 2/3	10.8	6.1
140	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	3.1	5.1
141	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部ほぼ完存		4.9
142	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	底部のみ完存	2	7.8
143	2区	弥生	底部	底部のみ完存	2.0	10.4
144	2区	古墳前期	高坏	坏部 1/4	24.1	4.8
145	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 1/2	16.6	7.5
146	2区	古墳前期	鉢	口縁～底部 1/2	25.0	11.5

SD201出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
167	1区	弥生終末～古墳初頭	小型鉢	完形品	5.5	3.3
168	1区	古墳前期	小型丸底壺	体～底部のみ完存		5.1
169	1区	弥生中期末	壺	口縁部　1/5	12.8	1.2
170	2区	古墳初頭	壺	口縁部　1/8	13.8	2
171	2区	弥生中期末	甕	口縁部　1/8	10.6	3.2
172	1区	弥生後期	甕	口縁部　1/7	17.8	2.7
173	1区	弥生終末～古墳初頭	甕	頸～体部 1/4	10.4	7.1
174	1区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/6	13.4	5.2
175	1区	弥生中期	壺	口縁～頸部 1/5	10.6	5
176	1区	弥生終末	甕	口縁～体部　1/8	11.1	6.2
177	1区	弥生後期	甕	口縁部　1/8	16	3
178	1区	古墳前期	甕	口縁～体部 1/4	15.8	4.8
179	1区	弥生前期	甕	口縁部 1/8	17.6	7.1
180	1区	弥生中期	壺	口縁～頸部　1/6	21.6	7.7
181	1区		底部	底部 1/2	9.2	5.8
182	1区	弥生終末～古墳初頭	高坏	坏部　1/8	33.2	6

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調（外面／内面）	備　考	図番
／ハケ	褐色／明褐色	中心から上方へ風車状にハケを	113
ナデ／ナデ・指頭圧	褐灰白色／明赤黄褐色		114
ハケ・タタキのちナデ／ナデ	黄白色／暗褐色		115
タタキ後ハケ後ミガキ／ 指頭圧・ハケ	黄橙色／黄褐色		116
タタキのちナデ／ナデ	黄灰色／明褐色		117
不明／不明	灰褐色／灰褐色	脚部欠損後に穿孔	118
ハケ・ナデ／ハケ	灰褐色／灰褐色		119
不明／ハケ	赤褐色／明赤灰色		120
ヘラミガキ・ナデ／ナデ	黄褐色／黄灰色		121
不明／ハケ	明黄赤色／明赤褐色		122
ナデ・ヘラミガキ／ナデ	黄褐色／赤褐色		123
ナデ後ミガキ・ハケ後ミガキ／ミガキ	灰黄色／黄灰色		124
指頭圧／ハケ	赤橙色／黄灰褐色		125
ハケ・ナデ／ハケ・ナデ	明黄灰褐色／明灰褐色		126
指頭圧／ミガキ・ハケ	明黄褐色／明赤灰褐色		127
ナデ／ナデ	明赤黄灰色／赤灰白色		128
ハケ・タタキ／ハケ	黄灰白色／灰白色		129
タタキ／ハケ	黒色／黄灰色	内面に接合痕	130
刻目文・指頭圧／不明	明灰褐色／赤褐色		131
ハケ／不明	黄灰色／黄灰色	吉備地方からの搬入品	132
タタキ／ハケ・指頭圧	黒色／黄灰褐色		133
ナデ・ハケ・タタキ後ハケ／ハケ・ナデ	黒色／褐灰色		134
ハケ／ハケ・ナデ・指頭圧	黄灰色／黄灰褐色		135
指頭圧／指頭圧	黄白色／黄白色		137
ナデ／ナデ・ハケ	暗褐色／黄灰白色		138
ハケ・ナデ／ナデ	黄灰色／明褐色	底部に穿孔（吊して使用?）	139
ナデ／ハケ	灰褐色／赤灰褐色		139
タタキ／ハケ・ナデ	赤橙色／赤灰褐色		140
タタキ後ハケ／	黄灰色／褐色		141
タタキのちハケ／ハケ・指頭圧・ナデ	灰褐色／褐色		142
ハケ／ナデ	明黄灰色／明灰色		143
ナデ・ハケ・ミガキ／ナデ・ミガキ	灰褐色／灰褐色		144
タタキ・ナデ／ハケ・ヘラミガキ	灰褐色／灰黄褐色	底部中心付近を円形になでる	145
	黄白色／黄灰色		146

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調（外面／内面）	備　考	図番
タタキ／	黄灰色／黄褐色	口縁端部に焼成時の亀裂	167
ハケ／指頭圧・ナデ・ハケ	灰褐色／明橙灰色		168
口縁端部にハケ他は不明	黄灰色／黄灰色		169
不明／不明	赤褐色／赤灰色		170
退化凹線（ナデ）・竹管文	灰褐色／灰褐色		171
	暗褐色／暗褐色	下川津B類	172
タタキ・タタキ後ハケ／ハケ	灰褐色／褐灰色		173
ハケ／ハケ・ナデ	明黄灰褐色／灰褐色		174
指頭圧・ハケ／指頭圧・ハケ	赤褐色／赤灰褐色		175
タタキ後ハケ／ハケ	黄灰褐色／明灰褐色		176
不明／不明	明赤灰色／黒灰色		177
ハケ・指頭圧／ハケ・ナデ	灰褐色／黄灰色		178
刻目文・押圧凸帯文・板材の圧痕・ヘラ描沈線文・ナデ／ナデ・ハケ	灰褐色／灰褐色		179
波状文・ハケ・刻目凸帯文／不明	明黄灰色／灰褐色		180
ハケ／ナデ	灰褐色／灰褐色		181
ナデ後ミガキ・ハケ後ナデ／ミガキ	黄灰色／黄褐色		182

SD202出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
183	1区	中世・土師器	皿	口縁～底部	6.2	1.9
184	1区		底部	底部 2/3	4.2	2.6
185	1区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部 1/4		2.8
186	1区	古墳前期	甕	口縁部 1/8	16.6	3.7
187	1区	古墳前期	甕	口縁部 1/6	16.8	2.8
188	1区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/8	17.2	5.8
189	1区		壺	口縁部　1/6	12	2.5
190	1区		甕	口縁部　1/6	15	4.9
191	1区	5C後半	坏	身　1/6	12.2	4
175	1区	弥生中期	壺	口縁～頸部 1/5	10.6	5
176	1区	弥生終末	甕	口縁～体部　1/8	11.1	6.2
177	1区	弥生後期	甕	口縁部　1/8	16	3
178	1区	古墳前期	甕	口縁～体部 1/4	15.8	4.8
179	1区	弥生前期	甕	口縁部 1/8	17.6	7.1
180	1区	弥生中期	壺	口縁～頸部　1/6	21.6	7.7
181	1区		底部	底部 1/2	9.2	5.8
182	1区	弥生終末～古墳初頭	高坏	坏部　1/8	33.2	6

SX201出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
193	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	5.2	3.1
194	3区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	1.5	2.7
195	3区	古墳前期	壺	口縁～頸部　1/2	16.6	6.3
196	2区	古墳前期	甕	口縁～頸部 1/2	15.6	5.8
197	3区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部　1/4	15.2	5.3
198	3区	古墳前期	高坏	坏部 1/6	22.8	4.3
199	2区	古墳前期	高坏	坏部1/6	23.6	3.1
200	2区	古墳前期	高杯	脚部 1/2		8.7

SR202出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
208	3区	古墳前期	小型丸底壺	頸部～体部 1/4		6.3
209	3区	古墳前期	甕	口縁部 1/2	18.4	4.3
210	3区	古墳前期	壺	口縁部 1/4	15.3	4
211	3区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部1/2	14.4	9.8
212	3区	古墳前期	甕	口縁～体部　1/4	14.4	6.4
213	3区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/4	12.7	8.9
214	3区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部ほぼ完存	14.8	17.6
215	3区	古墳前期	壺	完形品	10.4	12.9
216	3区	古墳前期	壺	頸～底部1/2		13.9
217	3区	古墳前期	高坏	口縁部　1/8	13.4	3.6
218	3区	古墳前期	高坏	坏部 1/6		
219	3区	弥生終末	高坏	坏部 1/8	21.9	5.3
220	3区	古墳前期	高坏	坏部　1/8	18.6	3.9
221	3区	古墳前期	高坏	脚部ほぼ完形	13	7.3
222	3区		高坏	脚部　2/3	12.8	7.1
223	3区	古墳前期	高坏	脚部　1/2	13.2	8.1
224	3区		高坏	脚部のみ完存	12.6	7.4
225	3区		高坏	脚部 2/3	13.6	8.8
226	3区		底部	底部ほぼ完存	5.4	3.2
227	3区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 4/5	21.6	9.9

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
不明／不明	色		183
ハケ／不明	明黄赤褐色／ 褐灰色		184
タタキ／	明黄白色／灰褐色		185
指頭圧・ハケ後ナデ	黄灰褐色／明赤褐色		186
ナデ／ナデ・ハケ	灰褐色／灰褐色		187
ハケ・タタキ後ハケ・タタキ／ハケ	灰褐色／灰褐色		188
ハケ／不明	明灰褐色／ 明灰褐色		189
ハケ／ハケ	黄灰白色／黄灰色		190
回転ナデ／回転ナデ	灰色／灰色		191
指頭圧・ハケ／指頭圧・ハケ	赤褐色／赤灰褐色		175
タタキ後ハケ／ハケ	黄灰褐色／明灰褐色		176
不明／不明	明赤灰色／黒灰色		177
ハケ・指頭圧／ハケ・ナデ	灰褐色／黄灰色		178
線文・ナデ／ナデ・ハケ	灰褐色／灰褐色		179
波状文・ハケ・刻目凸帯文／不明	明黄灰色／灰褐色		180
ハケ／ナデ	灰褐色／灰褐色		181
ナデ後ミガキ・ハケ後ナデ／ミガキ	黄灰色／黄褐色		182

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
タタキ・ハケ／ハケ	灰褐色／黄灰白色		193
タタキのちナデ／ナデ・ハケ	黄灰色／黄白色		194
ハケ／ハケ	赤橙色／赤褐色		195
ナデ・ハケ／ナデ	黄灰色／黄灰色		196
タタキ後ハケ／ハケ	明灰褐色／明赤褐色		197
ナデ／ナデ	赤褐色／赤褐色		198
指頭圧のちハケ・ヘラミガキ／指頭圧・ハケ・ヘラミガキ	黄褐色／灰褐色		199
ハケ・ナデ／	赤橙色／黒赤色	内面に絞り目	200

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
ナデ／ハケ	黒色／灰褐色		208
ナデ・ハケ／ナデ	黒褐色／暗褐色	搬入品	209
ナデ／ナデ	黒灰色／灰褐色		210
ハケ・タタキ／ハケ	黄灰色／明灰褐色		211
不明／不明	灰褐色／灰褐色		212
ハケ・タタキ／ハケ・ナデ	明黄赤褐色／褐灰色	内面に接合痕	213
ナデ・タタキ後ハケ／ナデ	黒色・明赤褐色／灰褐色		214
指頭圧後ナデ／ナデ・ヘラケズリ・指頭圧	暗灰・明赤黄灰色／暗灰色		215
不明／	褐色／褐灰色	内面に炭化米付着	216
ナデ／ナデ	赤褐色／黄橙色		217
ナデ／ (ナデ・ハケ)	暗赤灰色／赤灰色		218
不明／不明	黄灰褐色／ 灰黄褐色		219
不明／不明	赤褐色／赤橙色		220
指頭圧後ハケ・ナデ／ハケ	暗黄灰色／黄褐色	内面に絞り目が顕著に残る	221
ナデ／ナデ	灰褐色／灰褐色		222
ナデ／ナデ	橙色／赤橙色		223
ナデ／ナデ	赤褐色／赤褐色	内面に絞り目が顕著に残る	224
ナデ／ナデ	灰褐色／灰褐色	内面に絞り目	225
指頭圧／不明	明灰褐色／明灰褐色		226
タタキ／ハケ	明黄褐色／褐色		227

SD101出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
228	3区		須恵器・壺	口縁～頸部 1/8	14	4
229	3区			口縁部　1/8	11.8	4
230	3区		須恵器・坏	蓋　1/2		1.7
231	3区	5C後半	身	身・口縁部 1/6	18.6	3
232	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/2	11.8	9.5

Ⅵ層出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
234	3区	弥生前期	壺	口縁～頸部 1/4	8.8	5.5
235	3区	弥生中期	壺	口縁～頸部　1/6	11	4.4
236	3区	弥生前期末	甕	口縁部1/6	18.6	3.1
237	3区	弥生前期末	甕	口縁部1/16	20.4	2.6
238	3区	弥生前期	甕	口縁部1/16	24.8	2.9
239	3区	弥生前期	甕	口縁部 1/16	21.8	4.7
240	3区	弥生前期	甕	口縁部1/20	16.9	1.3
241	2区	古墳前期	壺	口縁部 1/6	22.1	2.2
242	3区	弥生前期	壺	口縁部 1/16	25.4	3
243	3区	弥生前期末	甕	頸部1/4		7.8
244	3区	弥生前期	壺	頸部 1/10		4.4
245	3区	弥生終末	高坏	坏部 2/3	15.6	4.8
246	3区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部 1/3	9.6	7
247	3区		底部	底部 2/3	8.3	2.3
248	3区		底部	底部のみ完存	6.2	5.2
249	3区		底部	底部のみ完存	5.3	6

Ⅲ層出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
250	1区	古墳前期	壺	口縁部　1/8	16.2	1.8
251	1区	弥生後期	壺	口縁部1/16	15.8	2
252	1区	弥生後期	壺	口縁部　1/8	12.8	2.5
253	2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部　1/8	11.4	2.3
254	3区		鉢	ほぼ完形	4.3	4.3
255	3区	古墳前期	高坏	脚部　1/4		6.8
256	3区	古墳前期	小型丸底壺	ほぼ完形		6.9
257	3区	古墳前期	小型丸底壺	頸～底部　完形		6.9
258	3区	弥生終末～古墳初頭	甕	体～底部のみ完存		
259	1区	弥生中期末	甕	口縁部　1/8	17.8	3.1
260	1区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～頸部 1/2	15.6	6.4
261	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存		9.6
262	1区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存		12.5

Ⅱ層出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
273	3区	17世紀	碗	口縁部　1/8	11.4	2.5
274	1区	5世紀後半	須恵器・壺	口縁部 1/12	25	1.6
275	3区	17世紀	陶磁器・坏	口縁部　1/5	11.4	4.7
276	1区	13世紀末	瓦器・碗	口縁部 1/12	16.1	4
277	3区	11C	土師器・碗	底部 1/4	6.2	1.7
278	1区	13世紀末	瓦器・碗	底部のみ完存	3.2	0.6
279	3区	14世紀	鍋	口縁部　1/8	18.4	3.7
280	3区	中世	土師器・坏	底部　1/2	6.5	1.1
281	3区	中世	土師器・坏	口縁～底部 1/4	6	3.3
282	3区	中世	土師器・坏	底部 1/4	6.2	2.7
284	2区	近世	陶器・碗	底部	5.8	2.4
284	1区	17世紀	陶磁器・底部	底部ほぼ完存	6.4	1.8

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
回転ナデ／回転ナデ	黒色／暗黄灰色		228
回転ナデ／回転ナデ	黒灰色／黒灰色		229
回転ナデ／回転ナデ	暗灰色／青灰色		230
回転ナデ／回転ナデ	青灰色／青灰色		231
タタキ／ハケ・指頭圧・ナデ	明黄褐色／明黄灰褐色		232

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
ナデ・ハケ・ヘラ描沈線9条／ナデ・ハケ	赤褐色／灰褐色		234
不明／ハケ	明灰黄色／黄灰色		235
刻目文・ヘラ描沈線文／ハケ	暗褐色／褐灰色		236
刻目文・ヘラ描沈線文／	赤褐色／褐色		237
刻目文・ヘラ描沈線文／ナデ	黄灰褐色／明黄褐色		238
刻目文・ヘラ描沈線文（5条）／	褐色／赤褐色		239
刻目文／	褐灰色／赤灰褐色		240
指頭圧・ハケのちナデ／ハケ・ナデ	明灰褐色／黄灰色		241
刻目文・沈線文・指頭圧／ナデ	黄灰褐色／灰褐色		242
ハケ・ヘラ描沈線（5条）／ハケ	赤橙色／赤橙色		243
凸帯文／	褐色／褐色		244
ナデ／ナデ・ハケ	褐色／褐色		245
タタキ後ハケ（ナデ?）／指頭圧	黄灰色／黄灰褐色		246
ヘラ描沈線文・指頭圧／指頭圧	灰褐色／灰褐色		247
不明／不明	赤褐色／明赤灰褐色		248
ハケ／ハケ	暗灰褐色／灰黄色		249

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
ナデ・ハケ／ハケ	褐色／褐色		250
不明／ナデ	橙色／明赤褐色		251
ナデ・ハケ／ナデ	明褐灰色／明褐灰色		252
ハケ／ハケ	黒色／灰褐色		253
不明／ケズリ	黄灰褐色／黄灰褐色		254
不明／ケズリ	明褐色／灰褐色		255
ナデ／ハケ	灰褐色／灰褐色		256
ナデ／ハケ・指頭圧	赤褐色／赤褐色	口縁部欠損後再利用か?	257
タタキのちハケ／不明	灰褐色／灰黄色		258
ナデ／ナデ	灰褐色／灰褐色		259
指頭圧・ハケ・タタキのちハケ／ハケ	灰白色／灰黄白色		260
タタキのちハケ／	明灰黄色／明灰黄色		261
タタキ後ハケ／ハケ	黄灰白色／明灰褐色		262

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
	灰白色／灰白色	肥前焼	273
回転ナデ／回転ナデ	黒灰色／灰色		274
	緑灰色（自然釉）	肥前焼	275
回転ナデ／回転ナデ	黒灰色／黒灰色	和泉産	276
不明／不明	黄灰色／黄灰色		277
回転ナデ／回転ナデ	黒灰色／黒灰色	和泉産・見込みに暗文	278
不明／不明	灰白色／灰白色		279
回転ナデ／回転ナデ	赤褐色／赤褐色		280
回転ナデ／回転ナデ	灰褐色／黄灰色	底部回転糸切り	281
回転ナデ／回転ナデ	灰褐色／灰白色		282
回転ナデ／回転ナデ	褐色／暗赤灰色	唐津焼?・外面に自然釉	284
高台削りだし／砂目積痕	暗オリーブ灰色（釉）・黄灰白色	唐津焼	284

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
285	3区	古代	瓦			

4区出土遺物

（土器）

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
287	4区	古墳前期	長頸壺	頸部　1/2	4.8	5.9
288	4区		須恵質・鍋	口縁部 1/8	11.8	5.7
289	4区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁部　1/6	26	5.5
290	4区	中世・土師器	坏	底部　1/2	7.2	1.5
291	4区	中世・土師器	坏	口縁部1/20	15.5	2.3
292	2区		器台	脚部　1/8	16	3.6

（石器）

図番	遺構名	器　種	石　種	製　法	全　長	全幅	最大厚	備　　考
147	SR201	石包丁	緑色片岩	磨製	(6.3)	4.9	0.7	
148	SR201	石包丁	緑色片岩	磨製	(7.8)	4.1	0.7	中央付近に孔2つ
149	SR201	石包丁	頁岩	打製	8.3	4.2	0.9	
150	SR201	石包丁	頁岩	打製	9.6	5.0	1.0	未製品
151	SR201	扁平片刃石斧	頁岩	磨製	5.0	4.3	1.1	
152	SD102	扁平片刃石斧	頁岩	磨製	(5.1)	(1.5)	1.1	
233	SD101	石包丁	頁岩	打製	8.9	6.0	1.0	

木器観察表

図番	遺構	器種	木取り	径	現存高	現存長	全幅	最大厚	備考
153	SR201	木製容器	半割材・芯無し	46.8	11.9				
154	SR201	両端加工棒	皮付・丸木材	3.8		149.7			
155	SR201	木製織具	半割材・芯無し			76.1	7.9	2.9	
156	SR201	木製鏃先	柾目板			24.1	9.0	1.3	
157	SR201	木製鏃	柾目板・3足（一部欠損）			37.1	12.6	1.3	3足（一部欠損）
159	SR201	有孔板材	板目板・芯なし			21.2	8.5	1.7	
160	SR201	有孔板材	柾目板・芯無し			56.8	13.3	2.1	
161	SR201	有孔板材	柾目板・芯無し・皮無し			69.8	9.9	2.2	
162	SR201	有孔板材	柾目板			63.6	7.7	1.9	
164	SR201	有孔板材	柾目板・芯無し			62.7	5.5	1.0	
165	SR201	板材	柾目板・芯無し			57.8	6.1	1.8	
166	SR201	加工木	芯持・丸木材・皮無し			48.1	1.5～2.0		
201	SX201	木製容器	皮無し・丸木材	11.6	4.7				
202	SX201	木製横槌	丸木材・皮無し			10.9	11.1		柄を欠損
203	SX201	木製横槌	皮なし・丸木材	5.9～7.6		21.8			
204	SX201	木製横槌	皮なし・丸木材	7.1		28.2			
205	SX201	木製鏃先？	柾目板・芯無し			28.3	6.6	1.4	
206	SX201	木製鏃先				61.7	1.8		
207	SX201	木製鏃先	柾目板			19.7	25.8	2.1	
263	Ⅲ層	有孔板材	板目板・芯なし			9.1	5.9	0.9	
264	Ⅲ層	板材	板目板・芯なし			11.8	12.2	2.0	
265	Ⅲ層	有孔板材	板目板・芯なし			21.2	9.4	1.6	農具の一部か？
266	SR202	板材	柾目板・芯無し			45	4.8	1.7	
267	Ⅲ層	田下駄？	柾目板・芯無し			31.6	3.5	0.8	
268	SR202	加工木	柾目板・芯無し			21.9	4.7	1.0	
269	SR202	田下駄？	板目板・芯なし			34.0	3.5	0.9	
270	SR202	板材	柾目材・芯なし			33.8	6.3	3.9	
271	SD202	有孔板材	板目板・芯なし			67.2	9.8	2.1	
272	SD202	有孔板材	柾目板			69.4	8.8	1.8	孔に皮を通す

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
布目／指頭圧・布目	黄灰色／黄灰色		285

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調 (外面／内面)	備　考	図番
ナデ?／不明	赤橙色／赤褐色		287
回転ナデ／回転ナデ・沈線3条	黒色／黒灰色		288
タタキ?／ミガキ	黄灰褐色／黄灰色		289
回転ナデ／回転ナデ	灰褐色／灰褐色	底部回転糸切り	290
(回転ナデ／回転ナデ)	明黄灰褐色／明黄灰褐色		291
不明／不明	赤橙色／赤褐色	裾部に穿孔	292

第Ⅳ章　おわりに

介良遺跡として囲まれた範囲は広範に及び，また調査のなされていない箇所がほとんどである。さらに，全体が今回の調査区のような河川遺構であるとは考えられず，そうした意味から介良遺跡全体を特色づけることは困難を極める。それを踏まえた上で中で今回の調査区の位置づけを考えるならば以下のようなことがいえよう。

介良遺跡の中心をなす遺構は自然河川であり，調査区に隣接して南流する「介良川」の旧河道（SR201）である。調査区内における SR201 の川筋は 2・3 区の境界付近に現れ西流，2 区の中程で緩やかに東へ向きを変えて 1 区の中程から調査区外へ逃げる。流速は遅く川底には葦か何かの植物が繁茂していたようだ。その川筋の変換点に弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物の出土が集中している。破片も多いが，一部を欠損したのみの土器が多く，後述するような河川祭祀終了後の投棄の可能性か考えられる。また，木製品も多く出土していることなどからこの付近に不要物を捨てる「ゴミ捨て場」のような場所が存在していたことも推測できる。この付近にこの時代の集落遺跡は知られていないが，地形的に本調査区よりも北もしくは東方，さほど遠くない場所に立地していたものと思われる。ところで，調査区内においても北へ行くに従って少なからず削平され，その土をその西側に盛っているそうである。こうしたことから考えれば集落はかなり削平され，場合によっては消滅してしまっている可能性もある。

土器以外では木器，石器には農耕具の出土は多いが，漁具の出土が極端に少なく，漁具の可能性のある加工木が 1 点見られるのみである。昨年度の調査における遺物の出土状況と遺物の傾向の詳細は不明であるが，場合によっては別の集落の存在を考えなければならなくなろう。

SR201 に接続される流路が SR202 である。SR202 の特色は遺物にある。遺物の出土が南端付近に集中していることは述べたとおりであるが，その組成が特徴的である。高坏がもっとも多く，図化し得た 20 点中，坏部 4 点，脚部 5 点の計 9 点（45.0%）であり，坏と脚で 1 個体としても 35.7% にのぼる。さらに底部に炭化米の付着した丸底壺，完形の丸底壺や 1 点のみではあるものの小型丸底壺の存在は付近における祭祀を想起させるものである。木製品もそれに関連したものかもしれない。また，この時，投棄された土器群も来年度以降検出されるかもしれない。

SR201 から派生する流路は SD201 であるが，これは人工物であろう。遺物量も少ない。西方に水を引いたものと考えられ，遺物量も少ない。木製品や流木の集中する箇所が存在することから考えて元来はもっと深く，後世に削平されているものと推定される。

SD201 に接続する流路が SD202 であるが，これも北へ行くほど削平され，1 区北端付近では床面が残る程度である。SD201 との合流部で木製品や流木が多く列をなして出土しており，深い流路であったことが伺える。

SX201 はその中の流路を通じて SR201 から水を引いて何かを行った「作業場」のようなものであったのであろう。枝を払ったのみの丸木材や 1m ほどの長さの板材が杭を用いて固定されている。遺物にも完形品の木製品が多く見られる。

緩やかに流れるこの介良川とその河原を祭祀や生活に利用した人々は，これが少しずつ流路を移

動し，湿地帯と化して行くに従い，その場所を変えていったと思われる。集落などのように人が常駐したわけではなかろうが，様々な形で人に大きく関与し，いわば生活に密接した場所であったといえよう。

介良遺跡は自然河川を主とする遺跡である。その流れは土層堆積の状況からもきわめて遅かったとみえ，そのため出土遺物もほぼ原位置を保っていると考えてもよいと思われる。

このような環境下における祭祀の類例として真っ先に中村市・具同中山遺跡群を挙げなくてはならない。5 世紀代のものであるが，ここでは祭祀遺構と，その後，自然河川に投げ込まれた土器群が見つかっている。この具同中山遺跡群と介良遺跡の相通じる点は河川の流速が遅く，遺物がほぼ原位置を保っていることにある。中村市と高知市東端という約 150 km離れた地点においても同様な祭祀行為が行われていたことは容易に想像できる。

介良周辺の祭祀の一例としては，中世におけるものが知られる。これは朝嶺神社背後の「おあらい池」の中に据えられた古常滑焼の甕を用いたものであった。常に水が貯められ，早天続きの時にはこの水を少し動かして祈ったという。また，神社の祭礼前後の丑の刻に神池の水で米粥を炊くなどを行ったという。これらは農耕の神事に関連のあるものと見られている。これが直接介良遺跡で行われたものとは関係なかろうが，それに似たようなことがなされていたのではないかと思われる。

参考文献

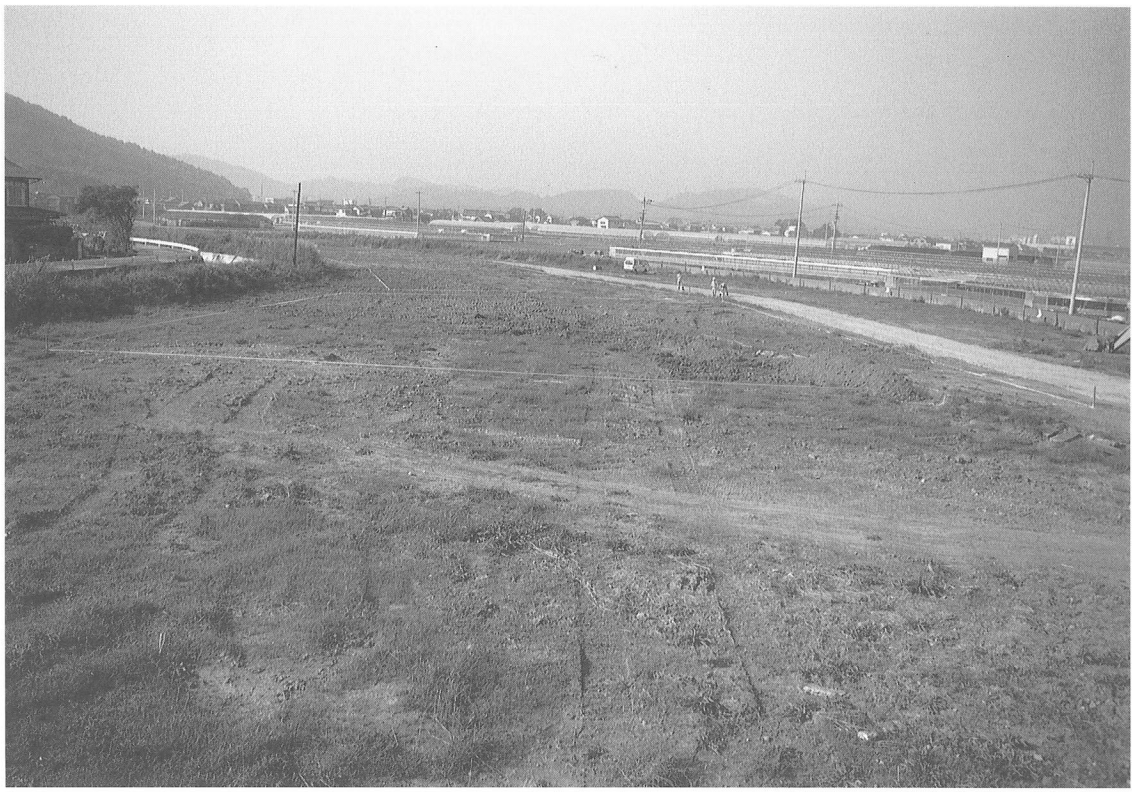
松田直則，山崎正明 他『具同・中山遺跡群』(財) 高知県埋蔵文化財センター　1997.3

岡本健児　「介良の考古学」『介良』高知市教育委員会　1989

出原恵三　「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀—」『考古学研究』144 号　1990.3

写　真　図　版

介良遺跡遠景（北より）

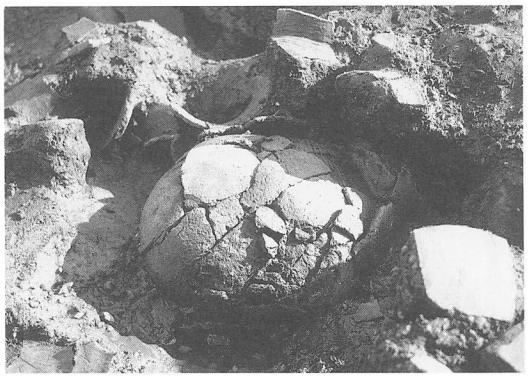


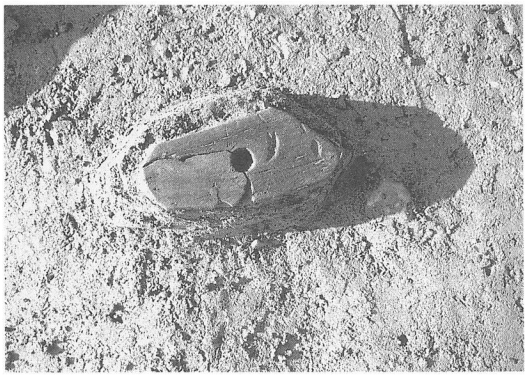
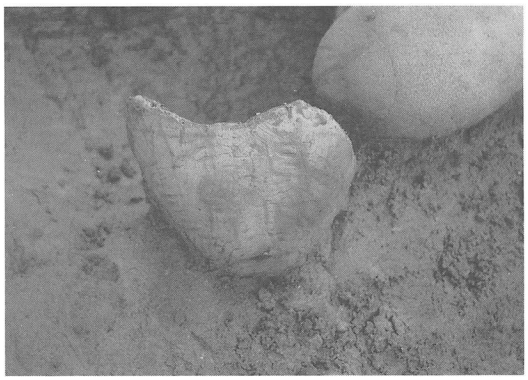
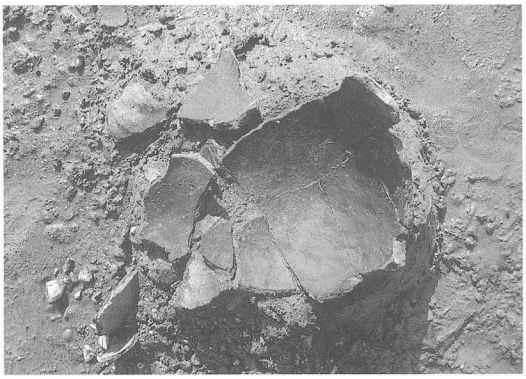
調査前の風景（北東より）

土層（２区東壁）

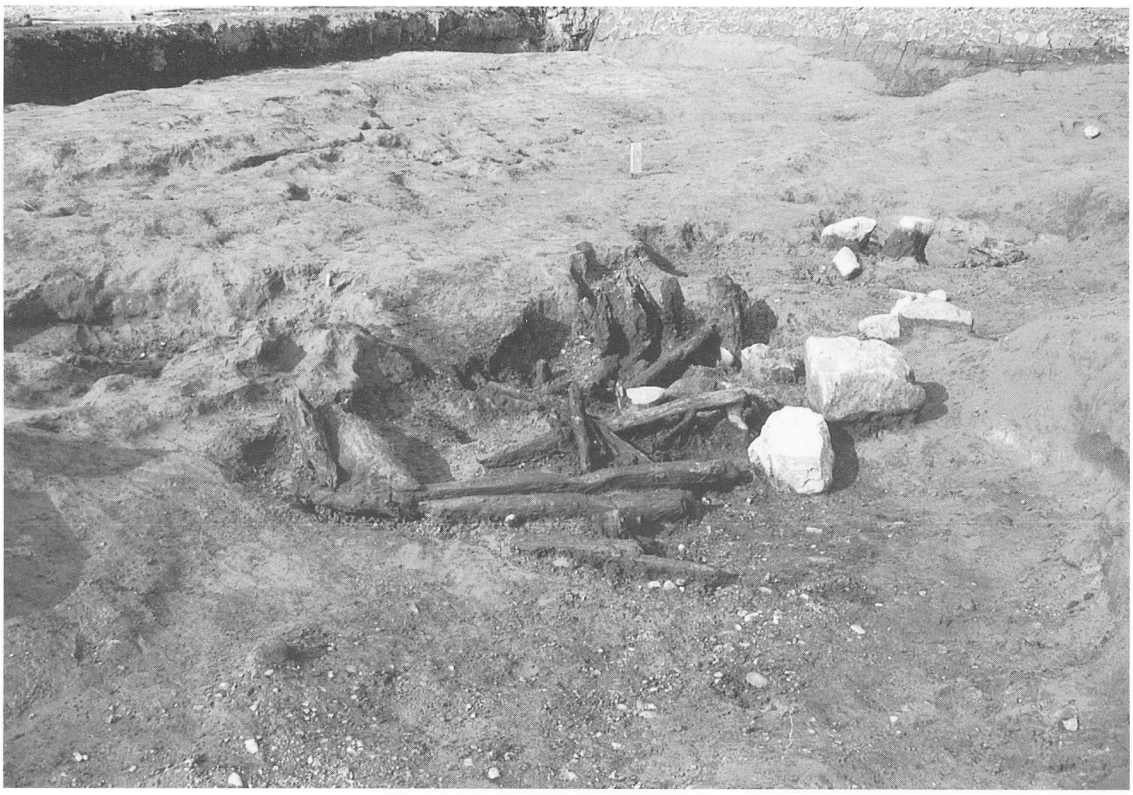
土層（２区南壁）

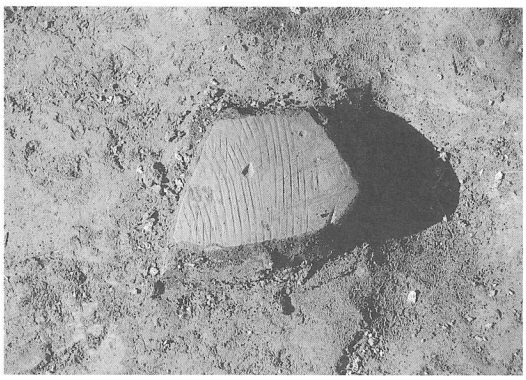
完掘（北東より）

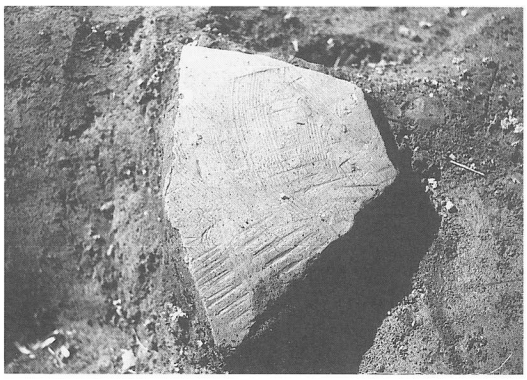


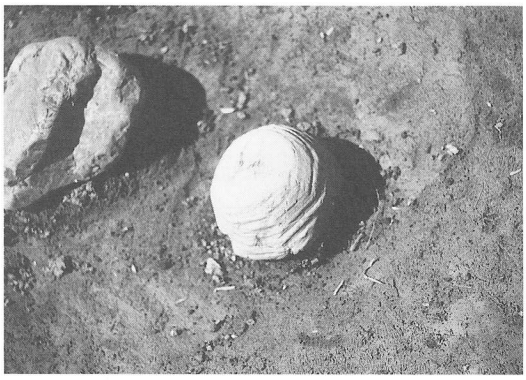




ＳＲ201遺物出土状況

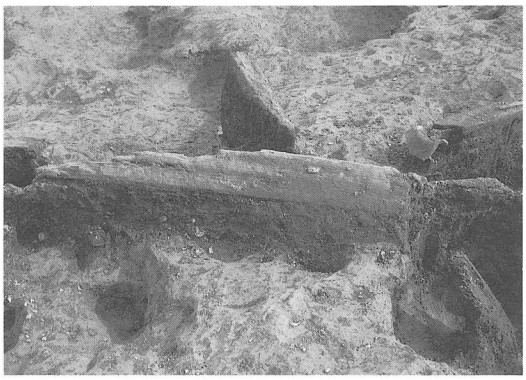






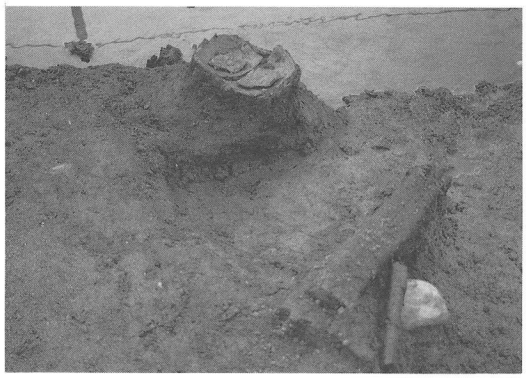


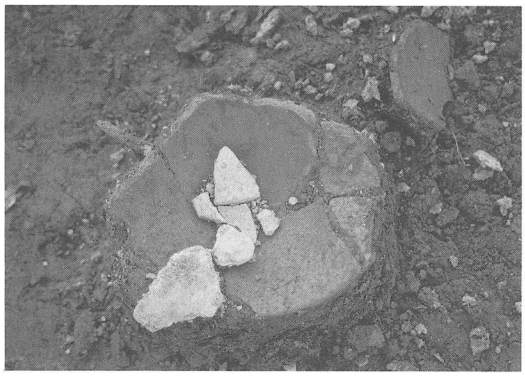
ＳＤ201遺物出土状況



ＳＤ202遺物出土状況

ＳＲ202土層





ＳＲ202遺物出土状況

ＳＸ201全景（南西より）

ＳＸ201遺物出土状況

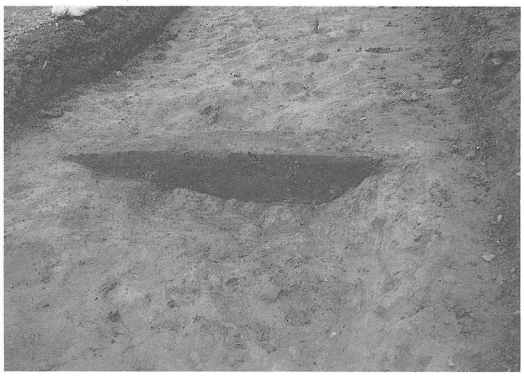
ＳＤ101・102交差部

ＳＤ101土層（２区）

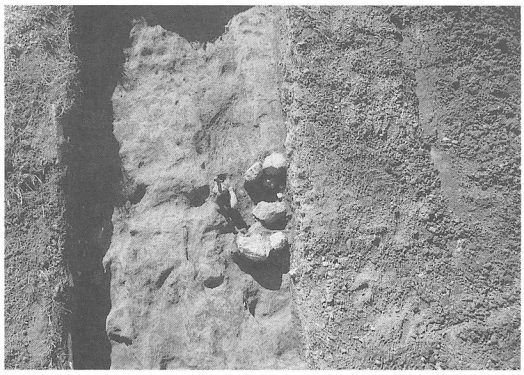
4区全景（北より）

4区土層（東壁）

4区土層（南壁）

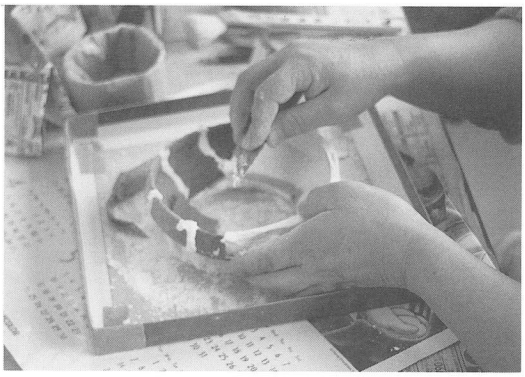


4区小流路



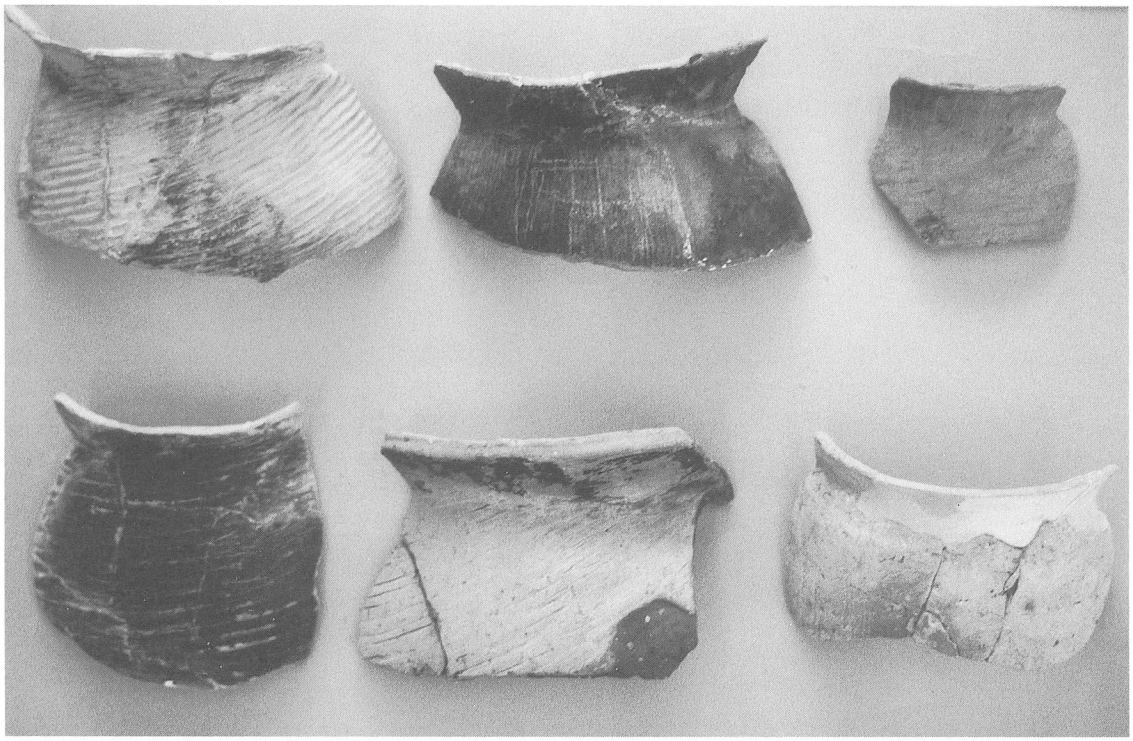
石組み

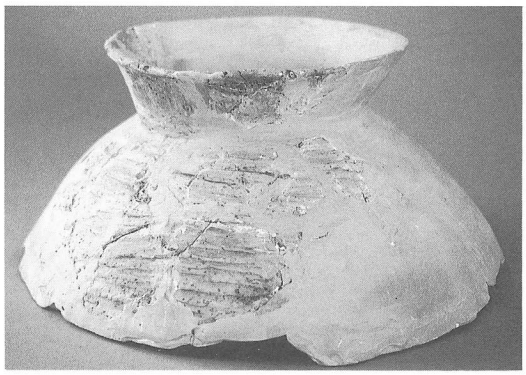
調査風景

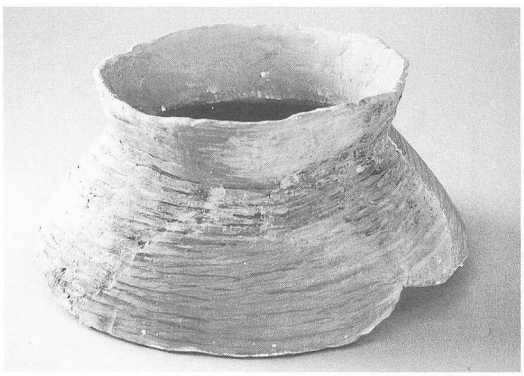


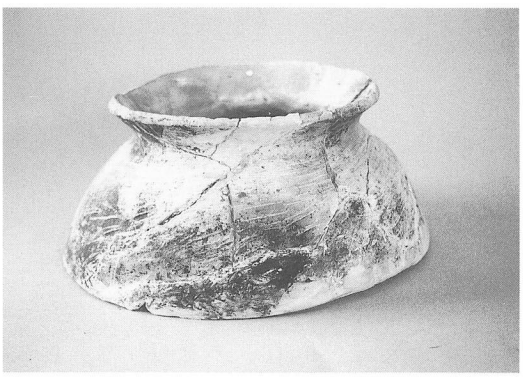
整理作業風景

調査に参加された方々



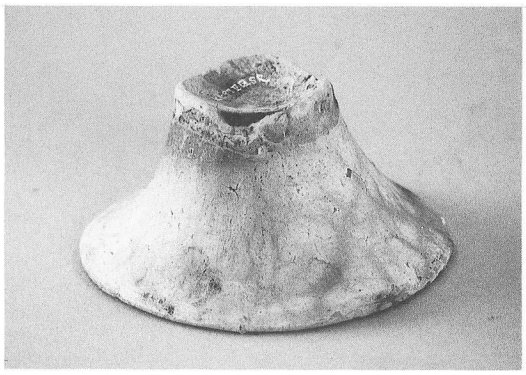




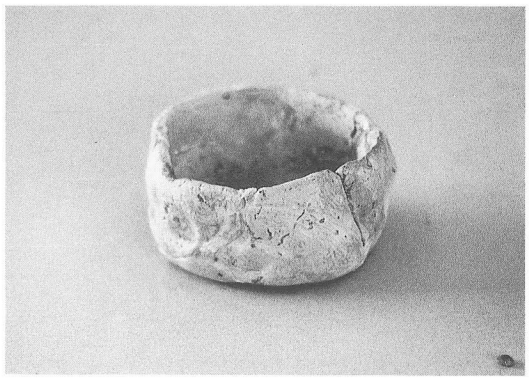
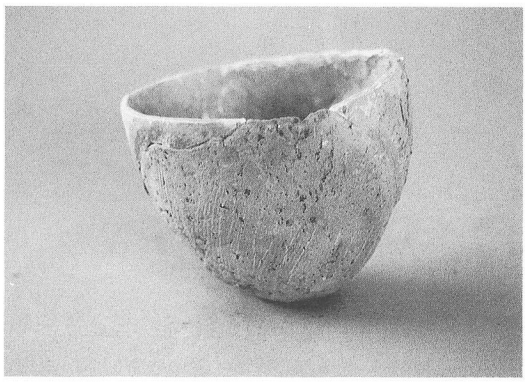
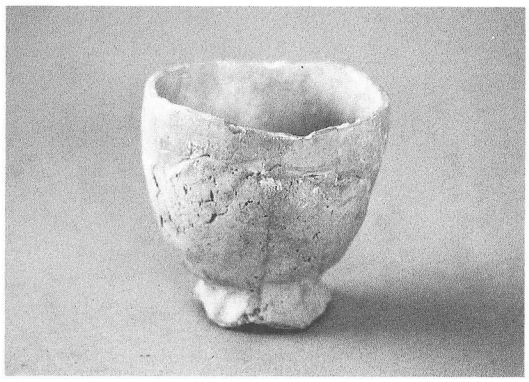
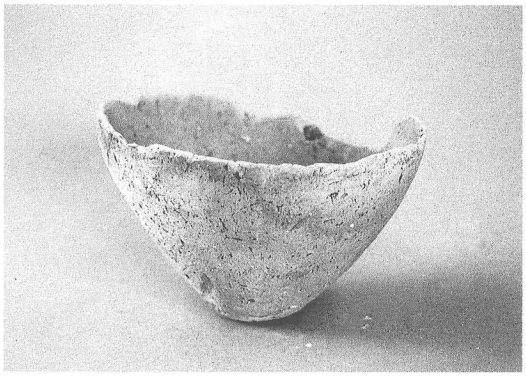
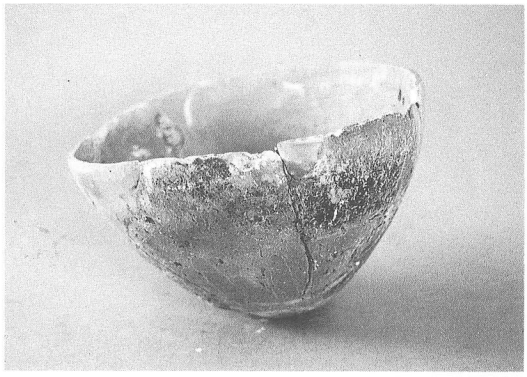
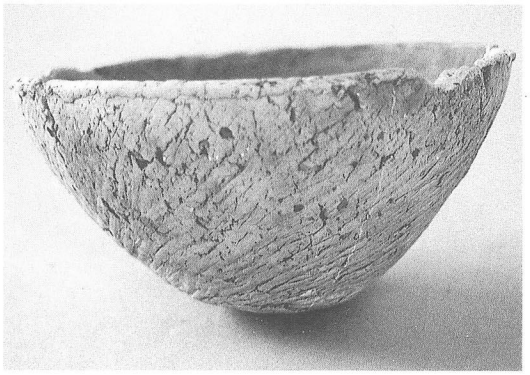
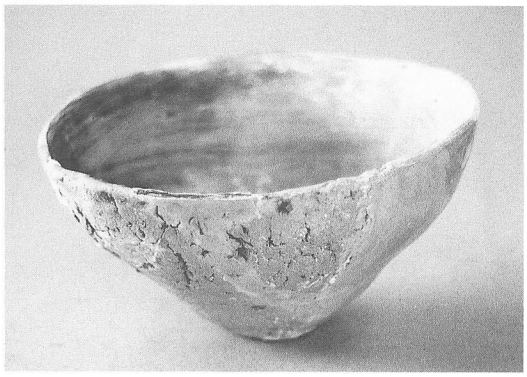


ＳＲ201出土遺物（１）

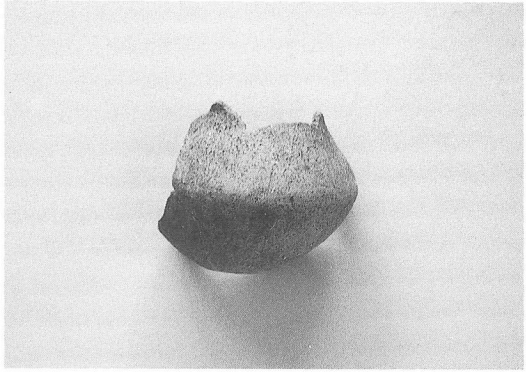
ＳＲ201出土遺物（２）

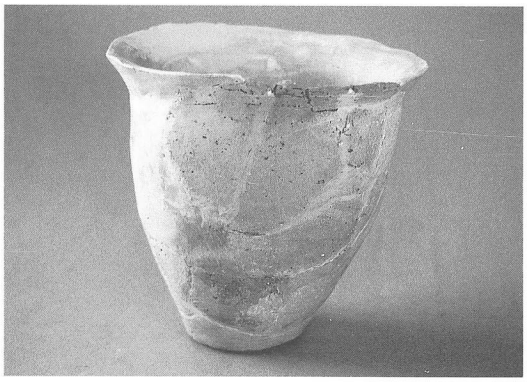
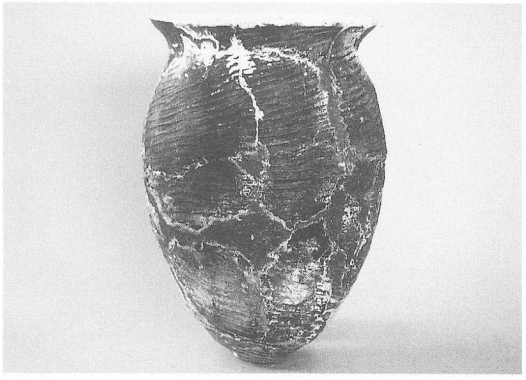
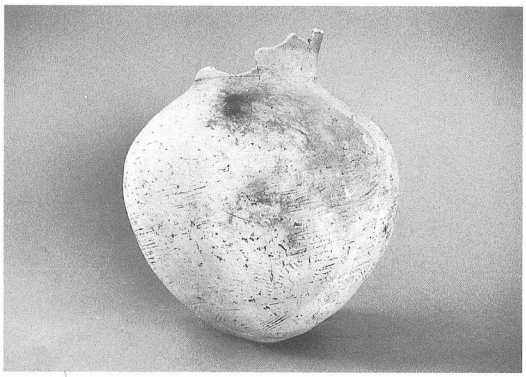
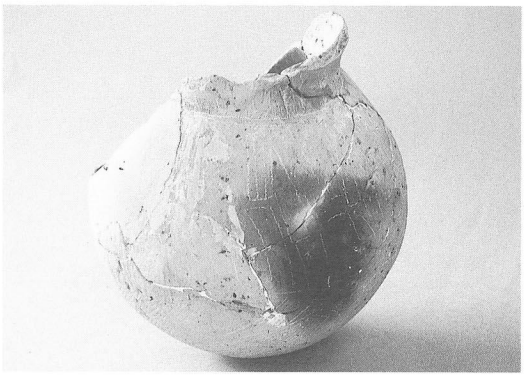
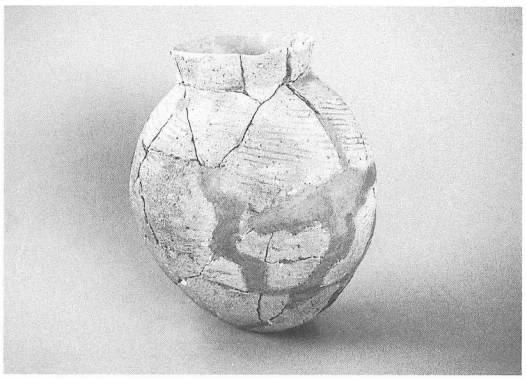
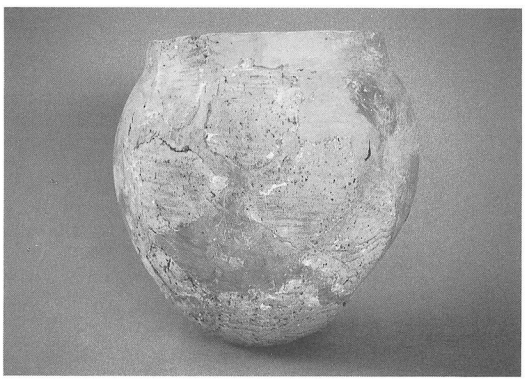


ＳＲ201出土遺物（３）

ＳＲ201出土遺物（４）



ＳＲ201出土遺物（５）